田野町文化財調査報告書　第32集

本野遺跡（縄文時代遺物編）

平成４年度県営農地保全整備事業元野地
区に伴う元野地区遺跡発掘調査報告書

１９９９

宮崎県宮崎郡田野町教育委員会

例　　言

1．本書は、平成４年度県営農地保全整備事業元野地区に伴い田野町教育委員会が実施した『本野遺跡』発掘調査結果のうち、主に縄文時代の出土遺物について報告するものである。尚、本事業は宮崎県中部農林振興局からの委託と国庫補助事業を得て実施した。

2．平成４年度の調査は、次の体制で実施した。

調査主体	田野町教育委員会		教育長	鍋倉政信
調整担当	田野町教育委員会	社会教育課	係長	長友啓泰
庶務担当		同	主査	長友カツ子
調査担当		同	主任主事	森田浩史
調査指導	宮崎県教育庁　文化課			

3．平成10年度の室内調査及び資料整理作業は、次の体制で実施した。

調査主体	田野町教育委員会		教育長	堀内　　侃
調整担当	田野町教育委員会	社会教育課	主任	森田浩史
庶務担当		同	主任	森田浩史
調査担当		同	主任	森田浩史
		同	主事	金丸武司

4．平成４年度の現地調査にあたって、下記の業務を外部に委託した。

空中写真撮影（株式会社スカイサーベイ）

自然科学分析（株式会社古環境研究所）

5．平成４年度と10年度の室内調査及び資料整理作業は、次の補助員の協力を得て実施し　た。

6．本書で用いた方位は磁北、標高は海抜高である。

7．本書で記載した色調は農林水産省技術会事務局監修の標準土色帳を参考にした。

8．本書に掲載した出土遺物及び関連記録資料は、田野町教育委員会文化財調査事務所（0985－86－5160）に保管している。また、未掲載遺物の一部は文化財収蔵庫に収納した。

9．本書の編集は金丸・森田が担当し、これに株式会社古環境研究所より提出された『自然科学分析調査報告書』の一部を掲載した。尚、文責については各文末に明記した。

本　文　目　次

第Ⅰ章　序　説
第１節　調査に至る経緯…… 1
第２節　遺跡の位置と歴史的環境…… 1
第Ⅱ章　調査の結果
第１節　調査の方法と概要…… 3
第２節　出土遺物（土器）…… 5
第３節　出土遺物（石器）…… 9
第Ⅲ章　地質とテフラ
第１節　はじめに…… 34
第２節　地　質…… 34
第３節　テフラ検出分析…… 34
第４節　屈折率測定…… 35
第５節　小　結…… 36
第Ⅳ章　植物珪酸体分析
第１節　はじめに…… 40
第２節　試　料…… 40
第３節　分析法…… 40
第４節　分析結果及び考察…… 40
第Ⅴ章　まとめ
第１節　曾畑式土器について…… 54
第２節　尾田式土器に類似する土器について…… 54
第３節　刻目のない突帯文土器について…… 54
第４節　船元土器について…… 54
第５節　春日式土器・大平式土器について…… 55
第６節　その他の有文土器について…… 57
第７節　縄文時代後期の土器について…… 57
第８節　結　語…… 58
第９節　おわりに…… 58

図　版　目　次

第１図　町内主要遺跡分布図…… 2
第２図　調査区周辺地形図…… 4
第３図　出土遺物実測図（縄文時代前期の土器）…… 11
第４図　出土遺物実測図（縄文時代前期の土器）…… 12
第５図　出土遺物実測図（縄文時代中期の土器）…… 13

第６図　出土遺物実測図（縄文時代中期の土器）…… 14
第７図　出土遺物実測図（縄文時代中期の土器）…… 15
第８図　出土遺物実測図（縄文時代中期の土器）…… 16
第９図　出土遺物実測図（縄文時代中期の土器）…… 17
第10図　出土遺物実測図（縄文時代中期の土器）…… 18
第11図　出土遺物実測図（縄文時代中期の土器）…… 19
第12図　出土遺物実測図（縄文時代中期の土器）…… 20
第13図　出土遺物実測図（縄文時代中期の土器）…… 21
第14図　出土遺物実測図（縄文時代中期の土器）…… 22
第15図　出土遺物実測図（縄文時代後期の土器）…… 23
第16図　出土遺物実測図（縄文時代の石器）…… 24
第17図　出土遺物実測図（縄文時代の石器）…… 25
第18図　出土遺物実測図（縄文時代の石器）…… 26
第19図　出土遺物実測図（縄文時代の石器）…… 27
第20図　出土遺物実測図（縄文時代の石器）…… 28
図１　Ｄ区東壁の土層柱状図…… 38
図２　Ｃ区北壁の土層柱状図…… 39
図３　Ｄ区東壁の植物珪酸体分析結果…… 45

表　目　次

表１～４　出土遺物観察表（土器）…… 29～32
表５　出土遺物観察表（石器）…… 33
表６　テフラ検出分析結果…… 37
表７　屈折率測定結果…… 37
表８　Ｄ区東壁地点の植物珪酸体分析結果…… 43
表９　Ｄ区東壁における主な分類群の推定生産量…… 44

写真図版目次

植物珪酸体の顕微鏡写真…… 47～53
図版１　（調査着手前全景）（調査状況遠景）…… 61
図版２　（Ｅ・Ｆ区調査状況）（Ａ区調査状況）…… 62
図版３　（Ｂ区調査状況）（Ｆ区遺物出土状況）…… 63
図版４　（Ｆ区遺物出土状況）…… 64
図版５　（Ｆ区縄文土器出土状況）…… 65
図版６　（縄文時代前期の土器）…… 66

図版 7　（縄文時代中期の土器）…… 67
図版 8　（縄文時代中期の土器）…… 68
図版 9　（縄文時代中期の土器）…… 69
図版10　（縄文時代中期の土器）…… 70
図版11　（縄文時代中期の土器）…… 71
図版12　（縄文時代中期の土器）…… 72
図版13　（縄文時代中期の土器）…… 73
図版14　（縄文時代中期の土器）…… 74
図版15　（縄文時代後期の土器）…… 75
図版16　（縄文時代の石器）…… 76
図版17　（縄文時代の石器）…… 77
図版18　（縄文時代の石器）…… 78
図版18　（縄文時代の石器）…… 79

第Ⅰ章　序　説

第１節　調査に至る経緯

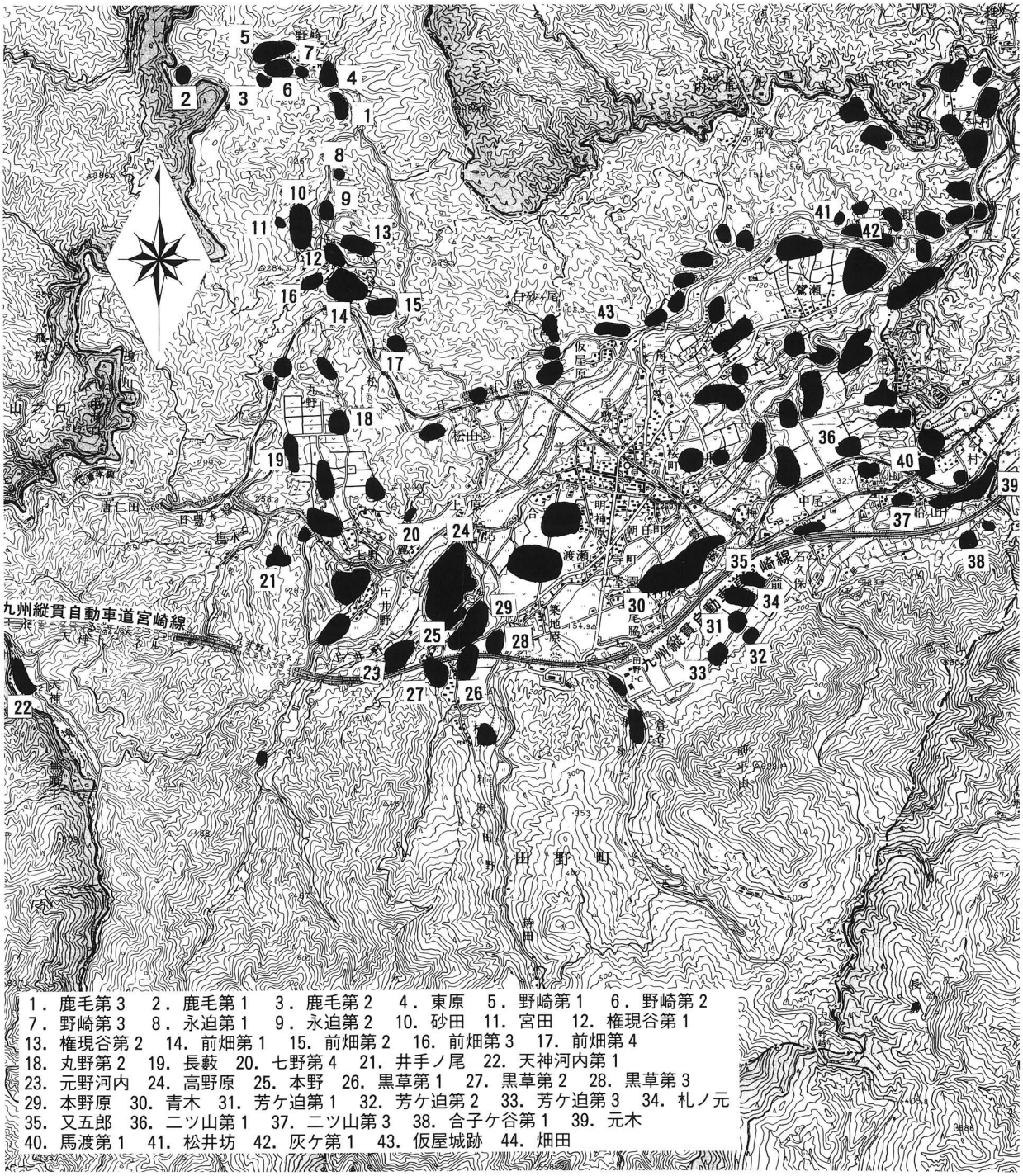
田野町では前平地区・七野地区・八重地区などで農地整備に関連する事業が実施されてきたが、平成４年度から元野地区においても大規模な県営農地保全整備事業に着手することとなった。平成４年度の工事着工が計画された本野工区は、平成元年度に町教育委員会で実施した町内遺跡詳細分布調査において確認された周知の遺跡（本野遺跡）であったため、その保存等について早急に協議検討する必要が生じ、平成４年２月に県文化課が詳細確認のための試掘調査を実施した。調査の結果、縄文時代から弥生時代にかけての複合遺跡であることが確認された。その後、県文化課と宮崎県中部農林振興局の間で協議が行われ、同年９月２２日には町教育委員会を含めた３者で遺跡の保存方法などについての具体的な協議を行ったが、工事施工上で盛土あるいは現状での保存が困難な部分について、発掘調査による記録保存の措置をとることとなった。平成４年10月８日付けで宮崎県中部農林振興局と委託契約書を締結し、現地における調査は同年10月16日より着手、翌年１月28日に完了した。

第２節　遺跡の位置と歴史的環境

本野遺跡は、鰐塚渓谷を源流とする元野川左岸の河岸段丘上に位置する。西側の片井野川と東側の別府田野川に挟まれたこの一帯は豊富な水源を有し、町内でも有数の遺跡が集中する地域でもある。本遺跡の対岸に位置する本野原遺跡は昭和46年の宮崎大学史学研究部考古学班による調査で市来式土器・綾式土器が出土したほか、平成６年度に県文化課が実施した試掘調査でも縄文時代早期と後・晩期の遺構遺物が確認された。現在でも一帯を踏査すると遺物が包蔵された状態を容易に観察することができる。また、聞き取りのみではあるが地下式横穴墓も所在するといわれている。別府田野川左岸に位置する畑田遺跡では、平成10年度の発掘調査により縄文時代晩期の住居跡と土坑、近世～近代の掘立柱建物と溝が確認され、縄文時代早期・晩期、弥生時代、平安時代、中世～近世・近代に至る幅広い時代の遺物が出土した。中でも縄文時代晩期の土坑から出土した組織痕土器は、今後同時代の研究資料として注目されるであろう。本野遺跡が所在する元野川左岸には、他に高野原遺跡と元野河内遺跡があり、近年の県営農地保全整備事業に伴って既に大半の部分で発掘調査を終了している。高野原遺跡は平成４年度（地中レーダー探査のみ）５～７年度の調査により、各年度において縄文時代早期の遺構遺物が出土したほか、平成６年度の調査では縄文時代後晩期かとみられる掘立柱建物（現在整理中）と竪穴住居、弥生時代の日向型間仕切りを含む竪穴住居、地下式横穴墓、中世の掘立柱建物などが検出された。元野河内遺跡は平成８年度の調査により、旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代早期の集石遺構と遺物、同前期～後期の土器などが出土した。

以上のように、当地域一帯は断続的ではあろうが長期にわたって集落が営まれていたことがわかる。町内には他にも前平地区遺跡群（札ノ元・芳ケ迫第２ほか）七野地区遺跡群（丸野ほか）八重地区遺跡群（砂田ほか）鹿村野地区遺跡群（ズクノ山第２・前ノ原第２ほか）などの遺跡密度の濃い地域が見られる。しかし、いずれも縄文時代を中心とする遺跡であり、弥生時代のまとまった集落跡は船ケ山地区の元木遺跡以外に発見されていない。これに対し、元野地

区では本野遺跡と高野原遺跡で中期末から後期の竪穴住居跡群が検出されている。また、古墳時代についても灰ケ野地区の灰ケ野第１遺跡で地下式横穴墓の発見が報告されているみにとどまるのに対し、いずれも集落跡の発見は無く、現在のところ墓域としての認識にとどまるが、本野遺跡と高野原遺跡では前述したような状況である。古代・中世以降になると集落跡や山城の分布などの様相に大きな変化がみられるものの、豊かな水資源を有する当地区周辺が弥生時代以降の田野盆地エリア内において中心的な位置を占めていたことを想定できよう。　（森田）



第１図　町内主要遺跡分布図

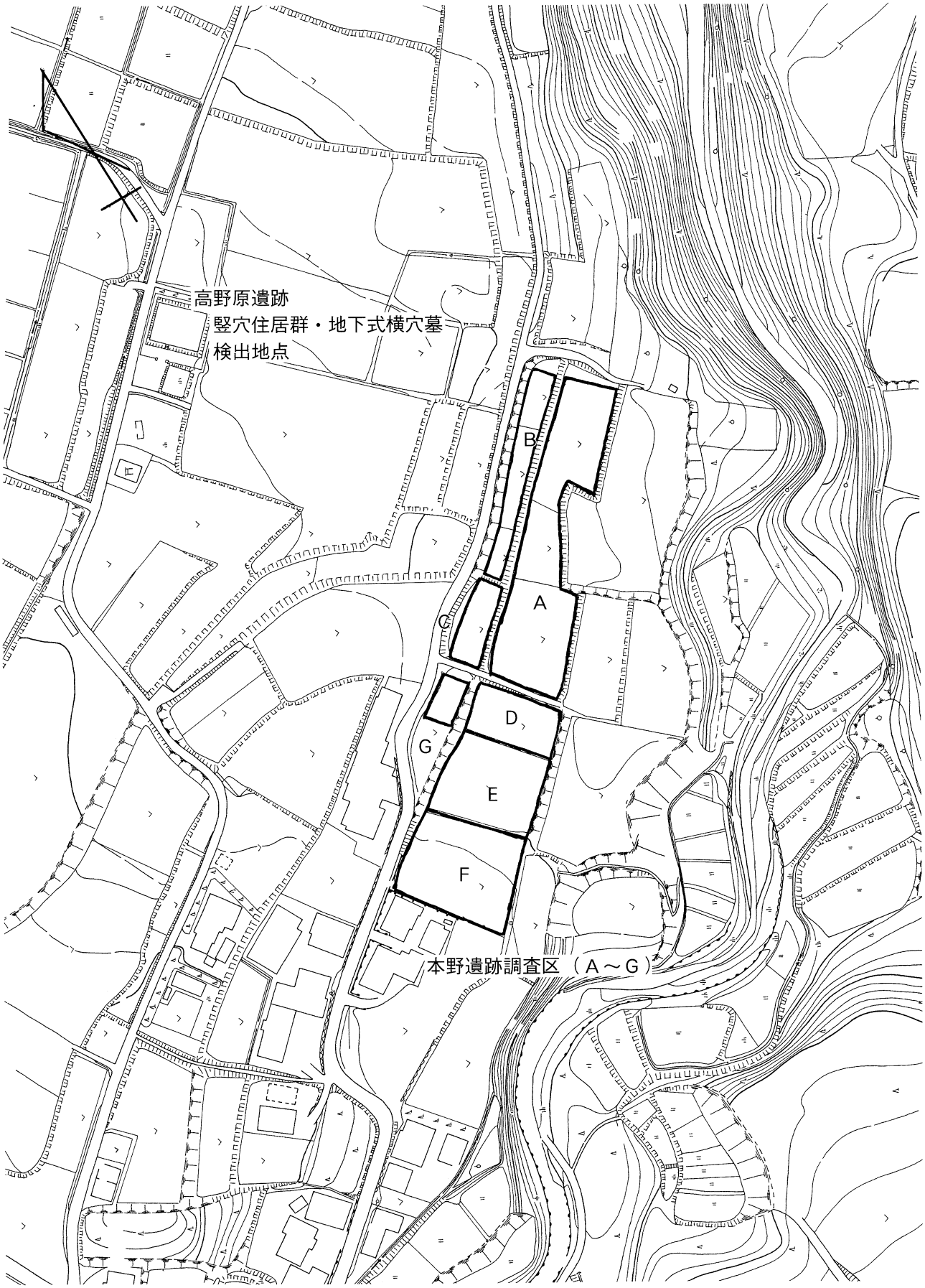
第Ⅱ章　調査の結果

第１節　調査の方法と概要

元野川左岸の河岸段丘上に位置する本野遺跡は、元野地区高野原の台地縁辺にあたり農道を挟んで高野原遺跡と画される。事業地内は畑地であり、その大半が調査の対象となったため、廃土の置き場など作業効率を考慮して便宜的にＡ～Ｇの調査区を設定し、Ａ～Ｄ区の作業を完了した後にＥ～Ｇ区へ移行するという方法を取らざるをえなかった。実質調査面積は約12,000㎡に至る。作業は重機により耕作土を除去し、遺物包含層から赤ホヤ堆積層直上までを精査しながら掘り下げ、同直上面において遺構を検出することを目的とした。当初は試掘調査のデータから、主な対象として弥生時代の集落跡を想定したが、これに加えて縄文時代遺物が大量に出土する結果となった。本野遺跡の地層は、耕作土から赤ホヤ堆積層の間に存在する御池軽石混入層とその前後が遺物包含層である。調査の段階で基準土層の分層をおこなったが、後に提出された古環境研究所の分析報告データとは一致しない部分があった。また、基本的には各層位ごとに遺物の分布を把握するよう努力したが、当時は十分な調査期間をいただけず結果的に精度の低い調査となったため、資料整理の段階で多くの矛盾が生じた。これらの理由から情報の混乱を避けるため、当初に設定した基準土層と遺物の出土層位の関係については、本報告中で詳細に記していないことをご理解いただきたい。

調査の結果、縄文時代前期から後期と弥生時代中期末から後期の遺物包蔵地及び集落跡であることを確認した。縄文時代前期は曾畑式土器がＡ区東方とＢ・Ｅ・Ｆ区から出土した。尚、調査年度に刊行した概要報告書中で轟Ｂ式としたものについては、現在の編年を適用し中期に含めた。同中期は春日式土器・船元式系土器・大平式土器と型式不明の土器がほぼ全域から出土したが、中でもＦ区に集中した分布がみられた。春日式土器は北手牧段階・前谷段階・轟木ケ迫段階とされる新旧の各タイプが存在する。船元式系土器については、各研究者から瀬戸内地域に出土するタイプのものとは異なるという所見を得ていることから、あえて「系」とした。後期は指宿式土器・市来土器・丸尾式土器をはじめ納屋向タイプとされるものなどがＡ区東側とＢ区を中心に出土した。上記の各時期に伴う石器については石鏃・石匙・石核・剥片・石斧などが出土したが、傾向として土器の量に反して数量共に少ない。尚、各石器の詳細な時期については本調査で明かにできなかった。弥生時代はＢ区のみにおいて遺物包含層とみられる部分を確認したが、他の調査区においては既に消滅していたようである。Ｅ区とＦ区において竪穴式住居跡を13棟検出した。これらはやや不整形なもの２棟を除いて基本的に方形である。この方形住居のうち２棟は隅部の一箇所に方形の張り出しを有するものである。本遺跡と農道を隔てて北側の高野原遺跡では、花弁状住居などの間仕切りや突出部を有する竪穴式住居群を検出しているが、両遺跡の距離はそれほど無く、大きな時期差も見受けられない。これらが同一集落内における時間差を示すものか、あるいは意図的な住み分けかなど検証すべき課題を多く残している。同遺跡については、平成11年度刊行予定の『高野原遺跡・本野遺跡』の中で詳細な報告を行いたい。

（森田）



第2図　調査区周辺地形図

第2節　出土遺物（土　器）

本野遺跡で出土した縄文時代の土器は、縄文前期・中期・後期にあたる。これらの大半は遺物包含層からの出土であるが、前節でふれたように出土層位との関連において良好なデータが得られなかったため、ここでは各遺物の分類及び観察を記して報告に代えたい。

曽畑式土器（1）～（13）

（1・8）は、縦横の沈線を組合せ区画を形成している。（1）には、ごく部分的に沈線間に刺突文を施されている。また、器面には補修孔が二ヶ所認められるが、うち一つは未貫通である。（2・4）も同様の部位に施文されるが、区画は形成されず、（2）は細い沈線により施文され、縦位と斜位の沈線により折帯文が形成されている。折帯文は他に（6・7）にも認められる。折帯文が施文されるこれらの土器は、その全てが沈線の後に器面を撫でており、特徴的である。（4）は口縁部直下に刺突文を2列巡らせ、その下位に沈線文を施す。（3）は横位の沈線が規則的に施文されているが、内面には沈線の施文がされない。（5・9・10）は縦位の沈線文が密に施文されたのちに、沈線を施している。また、(11) は羽状の沈線が2本単位で描出されているが、これも同類のものと思われる。(12) は曲線による文様であるが、おそらく曽畑式土器に含まれるものであろう。尚、外面の点描部分には、朱の付着が認められる。(13) は胴部下半～底部にあたる。沈線は粗雑である。焼成は（2・3・5・7・8・12）は良好であり（1・8）は粗悪である。

尾田式土器に類似する土器（14）～（17）

これらは縄文前期末～中期初頭に位置付けられる尾田式土器に類似した土器である。

(14) は胴部にあたる。外面はナデの後に刺突文が施文される。刺突は横位に施文されるが、規則性に乏しい。(15) は押引き状の文様が横位に巡っており、内面にも同様の文様を施文している。(16) は外面に縦方向の条痕文が残されており、内面に浅い刺突文が横位に施文される。おそらく口縁部付近であろう。(17) は数列の押引文が斜位に施文されている。

刻目のない突帯文の貼付けられる土器（18～43）

この土器は、以下のａ～ｃ類に細分が可能である。

ａ類（18～27）は細い突帯が数本単位で貼付けられたものである。(18) の突帯は一見したところｂ類に近いが、口縁に平行せず、弧状のモチーフを形成するようでもないため、ａ類に含めた。口縁はやや外反し、3条単位で突帯が貼付けられる。(19～21) もモチーフ状に貼り付けられた口縁部である。また、(22～27) のように貼付け突帯は胴部にまで及んでいる。中には、(23・24) のように、胴部が大きく張り出すものも認められる。

ｂ類（28～38）は、やや太めの突帯が口縁に平行または弧状に貼付けられたものである。(28～30) は平口縁に平行して数本単位の突帯が貼り付けられている。(31) の口縁は波状である。(32) は2本の突帯のうち上の方は弧状が連続するように貼付けられている。(33) は数本単位の突帯が一ヶ所に集約され、単位状になっている。(34) は胴部片であるが、ここにも口縁部同様の突帯が貼付けられている。(35) は突帯が一条のみであり、器形も大きく内湾する。器面もナデを用いているため、別種の土器である可能性も考えられる。(36) の突帯は連続的な弧状のモチーフになるようである。(37・38) の土器には共通した意匠が表現されている。これらのうち、特に共通性の高い（28～34）は、(30) と調整不明の（34）を除けば、全て地文の条痕文が縦方向であるという特徴が認められる。

c類（39～43）は垂下する突帯を持つものまたはそれに類するものである。

（39）は波状口縁の波長部より三条の突帯が垂下しており、突帯の外側に沈線が深く施文されている。また、内面にも同様の沈線が施文される。42は横方向の条痕が施文されたのちにミミズばれ状の突帯が縦横に貼り付けられる。口唇部にも円形の刺突がみられる。（41・43）も同類の土器と考えられるが、垂下する突帯はなく、代わりに内面にも円形の刺突が入り込む。（40）は口縁端部に細い突帯が一条貼り付けられるほか、平坦な突帯が斜位に貼り付けられる。突帯の上には軽い刻目を施す。また、器面には相交弧文（ロッキング）が描出されている。

船元式土器（44～57）

以下のa～c類に細分が可能である。

a類（44～47）は突帯と組み合わせたものである。

（44）は突帯を縦横に貼付けた後に、緻密な縄文を施文、円形の刺突を施したものである。（45）には縄文が施文されないが、扁平な工具により押引状の文様が細かく施文される。（44・45）の内面は丁寧に撫でられており、器壁も薄い。（46）は外面に突帯と円形刺突が施され、内面上部には緻密な縄文が施文されている。（47）は突帯上に縄文を施文している。この（46・47）は器壁が薄く、焼成が軟質であり、同一個体の可能性が高い。

b類（48～52）は浅い縄文が施文され、沈線文と組み合わせており、内面に丁寧に横ナデが行われたものである。（48）は縄文の地文の上に、（45）と同様に幅広の細かい押引文をキャタピラ状に施文したものである。この文様は内面にも見ることができる。（49～52）は縄文の地文の上にごく浅い沈線を施文したものである。（49）の沈線には二叉状の工具を用いたものと思われる。

c類（53～57）は粗い縄文が器面に粗雑に施文され、突帯文と組み合わせており、内面のナデが粗く不規則なもの。他に、外面の色調が黒褐色であることも、c類に共通した特徴である。

（53）は縄文のうえに突帯を貼付け、突帯上に更に縄文を施文している。器形は胴部がわずかに窄まるが、口縁部はやや内傾する程度である。（54）～（56）は平口縁であり、突帯は貼付けられない。やはり口縁はわずかに内傾している。（57）は（53）と同一個体である。

春日式土器・大平式土器（58～135）

（58～135）は縄文時代中期に位置付けられる春日式及び大平式に相当するもので、以下のa～f類に細分が可能である。

a類（58～66）は施文部位が胴部にまで及ぶものである。

（58～61）は同一個体である。器形は口縁で大きく内湾しており、胴部が一旦窄まるという典型的なキャリパー状を呈する。器面には単位的に胴部にまで垂下する突帯が貼付けられる。胴部下半には縄文が施文されるが、縄文の後にナデにより調整が行われる。内外面共に丁寧なナデが施されており、器壁はきわめて薄い。（62～64）も同一個体であり、浅めの沈線及び連点が施文され、胴部にまで及んでいる。これもキャリパー状の器形であるが、口縁の内湾が弱く、器壁も厚い。（65）は細めの沈線が施文されたのちに、器面を撫でている。口縁部付近と考えられ、キャリパー状に器形が内湾する。（66）は胴部片である。単位的に垂下した刻目を有す突帯の両側に浅い沈線が施文される。

b類（67～84）は口縁部が内湾するものである。

（67）は波状口縁となる。外面には2条の沈線が波状に施文される。（68）以下は平口縁であ

る。(68・69・71) の施文には、押引文が用いられる。(72・75・76) には沈線内刺突を行っている。(70) は口縁部に刺突のある細い突帯が貼付けられる。(77～79) は沈線と刺突を組み合わせている。(80・84) は口縁部に突帯を貼付けた一群である。(80～82) は口縁部に鋸歯状の突帯を連続的に貼付けているが、(80) は縄文地に突帯上は縄文、(81) は横ナデを行い突帯上に貝殻腹縁刺突、(82) は横位の貝殻条痕地に突帯上に工具による不規則な刺突が行われている。(83・84) は単位的に鋸歯状の突帯が貼付けられる。

c類 (85～110) は太めの突帯が貼付けられたものである。

(85) は鋸歯状の突帯が巡る点はb類と同様であるが、口縁部が外反する。(86) は突帯が連弧文状に貼付けられる。(87) は器面を丁寧に撫でたのちに、突帯文をモチーフ状に貼付ける。(88・89) は口縁部がやや内傾する器形を呈する。口縁は鋸歯状であり、幅広の貝殻腹縁刺突を持つ突帯が貼付けられる。(90) は口縁が大きく外反しており、単位的に突起が付く。外面には二条の太い突帯が付けられ、突帯上に貝殻腹縁が刺突される。(93・94) は工具による刻目突帯が行われている。(95) は内外面共に横位の貝殻条痕文が深く刻まれる。(96～100) は波状口縁を呈す。(96・97) は波頂部にU字状の突帯が貼付けられる。(98・99) の胴部には、鋭利な工具により渦巻き状の文様が描かれる。二条の突帯が波頂部で突起状に変化し、その部分に貝殻腹縁を深く刻む。口縁部は内傾し、胴部でやや括れる器形を呈する。外面の地文及び内面には、横位の貝殻条痕文が用いられる。焼成は粗悪である。(100) は内外面共に地文がナデであり、突帯上の刺突は突帯に対し平行である。(101～103) は垂下する突帯が貼付けられるものである。(101) は口縁端部に二条の突帯を貼付け、下位の突帯が垂下する。(102) は口縁端部の突帯から二条の突帯が垂下する。(103) は胴部片であるが、文様パターンは (102) と同様である。器面は全て撫でによる調整が行われている。(104～109) は口縁端部に突帯が貼付けられた一群である。(104) は太めの工具で刺突を施すほか、口唇部には二条の細い沈線が巡る。(105) の突帯上には、貝殻腹縁刺突が突帯に対し平行に刺突される。(107・108) の突帯は細めであり、突帯上には工具による刻目が施されるほか、口唇部にも刻みを行っている。(109) の突帯側面には貝殻腹縁による刻みが行われるが、突帯上面には細い工具により密に刺突される。(110) は口縁部にU字状の突帯が貼付けられ、内面にまで及ぶ。突帯は胴部にも横位に貼付けられ、断面が方形になるよう粗く調整される。突帯上には工具による刺突が施文される他、口縁直下及び口唇部にも刺突される。器面には貝殻による条痕文が深く刻まれる。胴部には他に二条の沈線が波状に施文されている。器形は頸部でわずかに括れる器形を呈し、口縁部はやや外反する。

d類 (111～115) は器面に押引文が施文されるものである。

(111) は口縁が「く」の字状に屈曲し、その上面に押引文が巡る。口縁には単位状に鋸歯状の突起が付けられ、この部分のみ沈線が施文される。(112) は変則的な鋸歯状の口縁となり、口縁が肥厚気味になる。押引は浅く微かに施文される。(114) は口縁部肥厚帯が明確に形成されている。

e類 (116) は口縁部肥厚帯に突帯が貼付けられるものである。

(116) の口縁部には肥厚帯が設けられ、肥厚帯上にM字状の突帯が貼付けられる。突帯上には貝殻腹縁によると思われる刺突が行われる。肥厚帯上には他に沈線のような凹部が横位に残されるが、最終的にナデによる調整を行っているため、意識して施文されたものか定かではない。

f類（117～123）は幅広の口縁部肥厚帯上に押引文または沈線文の施文されたものである。

（117）は押引文をモチーフ状に施文する。（118）は口縁が波状になり、文様帯が明確に形成されない。波頂部には刻目が施文される。（119）～（121）は、口縁部に亀甲状のモチーフが描出されるものである。どれも沈線の後にナデによる調整を行っている。（122）は外面に菱形の文様が深く刻まれる。（123）は内面にも浅い沈線が施文される。

その他の有文土器

以下の土器は縄文時代中期に該当すると思われるものの、上記の分類に当てはまらなかったものである。

（124）は口縁部が内湾し、外面に山形状のモチーフ、内面に波状の沈線が施文されるものである。（125・126）は貝殻状の自問の内面を沈線と沈線内刺突によって施文している。（127）はそれを外面に行う。（128・129）は外反する口縁部の内外面に一条の押引を行ったものである。（130）は口縁部が括れる器形を呈しており、細い沈線が微かに垂下する。焼成は良好である。（131）も器形は同様であるが、条痕地がそのまま残され、沈線も太い。上部には突帯が巡り、加えて焼成が粗悪である。（132）は口唇部と外面に施文される。（133）は外反する器形であり、連弧文状の沈線が巡る。（134）は口縁部に鋭利な沈線で三角形のモチーフが連続的に施文されている。（135）は口縁部に突帯を貼付け、その上部に刺突が巡る。（136）は大きく外反する口縁に刻目を施す。貝殻条痕が深く遺される。（137）は口縁に細い沈線を施文する。口唇部には指頭押圧を行っている。（138）は口縁部が肥厚気味になり、その部分に細い沈線を施文する。（139）は波状口縁になり、太めの沈線が密に施文される。器壁は厚く、焼成は粗悪である。（140）は横位の沈線が密に施文される。（142）は外面に撚糸文が施文される。（144）は外面に三条の突帯を貼付ける。口縁部には鋭利な沈線が斜位の格子目状に施文される。器形は口縁がラッパ状に開く。（145・146）は斜位の条痕文が施文される。

無文土器（148～161）

外面が基本的に無文の土器である。（148）は口縁部の条痕は横位であるが、頸部以下は斜方向になる。口唇部には沈線が二条巡る。また、単位的に山形の突起が付けられる。（149）は口唇部に円形の刺突が行われている。（150）は口唇部に格子目状の刻目が施文される。（152）は口縁部に突帯が貼付けられる。（154）は口縁が山形状になり、（155）は平口縁で、外面に縦位の条痕文が施文される。（157～161）は底部である。（157）は全面を縄文が巡り、底面は上げ底になる。（158）は底部の張出し部に刻目を設けたものである。（159）はそれが2列にわたって施文される。（160）は、底部が異常に厚手になり、側面が極度に薄手になる。底面の張出しが強く、直行気味に立ち上がる。（161）は底部が丸底になるものである。器面にはナデによる調整が行われる。

縄文時代後期の土器（162～170）

（162～164）は後期初頭の指宿式土器である。（162）は波頂部にあたる。（163・164）の器面には沈線の後にナデによる調整が施される。

（165・166）は市来式土器にあたる。（165）は平口縁であり、口縁部の肥厚帯に円形の刺突が行われる。（166）は口縁部断面形が三角形状を呈さず、やや「く」の字状になる。どちらも器面には、横位の条痕文が認められる。

（167・168）は丸尾式土器に該当する。どちらも波状口縁である。

（169）の外面には巻貝による疑似縄文が施文される。胴部上半に当たるのか、上部には無文帯があり、下にゆくほど張出す器形である。

（170）は前迫亮一氏により納屋向タイプと設定された土器である。器面は丁寧に撫でられており、口縁の肥厚気味になる箇所と胴部上半に、斜位の粗雑な沈線が施文される。　（金丸）

第3節　出土遺物（石　器）

石鏃（171～194）

全体で24点出土した。このうち、完成品は15点（うち完形品は9点）であり、残りは未製品である。全体的に小振りのものが多く、大小の変化に乏しい。⑽ はこのなかで傑出して大きく、基部には研磨が行われたようである。また、未製品を観察すると、製作に際しては側面調整を基部に先行していたことが窺える。

スクレイパー（195～200）

（195）はサイドに刃部調整を行ったものである。石器上部の調整により抉り状になるが、意図は希薄であるため、スクレイパーとして分類した。（196）はほぼ全縁にわたって調整が行われているが、スクレイパーとしての機能性は低く、石鏃の未製品とも考えられる。

石匙（201～204）

（202）は刃部調整を密に行ったものである。しかし抉りを製作する意図が希薄であり、あくまで刃部調整の延長として剥離を行っているように思われる。結果として機能性に乏しい形態であるため、スクレイパーの一種との見方も否定できない。（204）は縦匙となるが、側縁調整と平行して、尖端部の調整にも比重を置いているため、刺突具としての使用も考えられる。

石斧（205～208）

全て磨製石斧であるが、（205・207）のように剥離工程を経て製作されたものもある。（206）は刃部と末端部に集中的に磨きを行い作出されている。（208）を除けば全体的に小形である。

二次加工剥片（209～221）

（211）は、石鏃の欠損したものであるが、欠損部に剥離を行い再利用しようとしたものである。また、それ以外の（217）までの石器の二次加工は、おそらく石鏃を製作するためのものであろうが、これから石鏃を製作しても、小形のものしか作出しえない。こうした傾向が、出土石鏃が小形であることと関わりがあるように思われる。

使用痕剥片（222）

明確に使用痕といえるものは1点のみであった。裏面右側縁には小剥離上の使用痕が数ヶ所認められる。この部分は角度が比較的鋭利であるため、刃部として利用したと考えられる。

石核（223～227）

（223）は作業面を頻繁に転移しながら剥片を剥離していった石核である。（224）は両縁より剥離氏を行い打点を後退させたものである。作業面は一面のみである。ここまでの2点は剥離工程をこれ以上行うことが困難であるため、残核である。（225）は作業面と打面を後退させながら剥離を行う。（226）も同様の剥離工程によりものである。

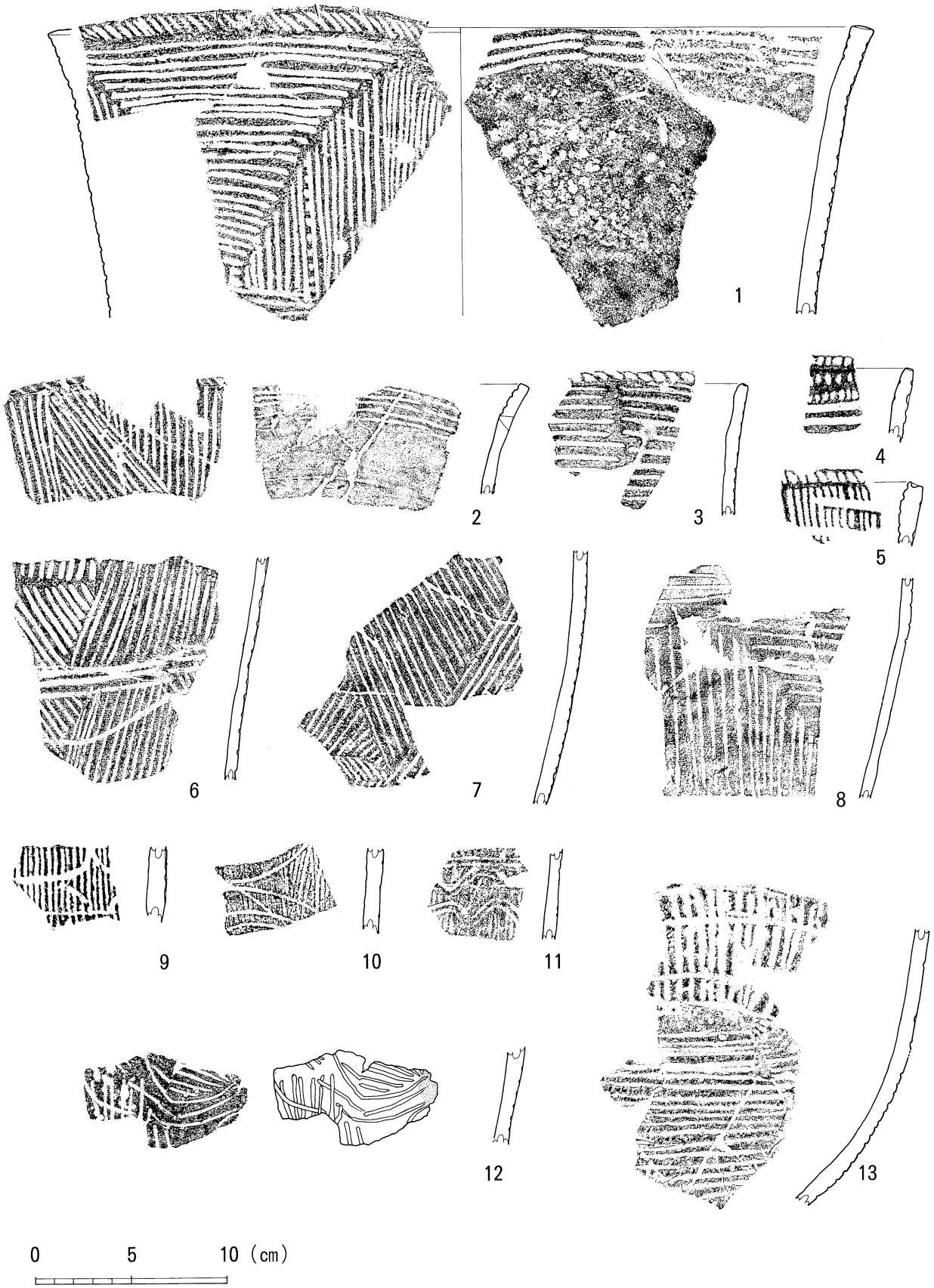
磨石（228～232）

（228）は全面に研磨痕が遺されており、頻繁に使用されたようである。（229）や（231）は部分的に敲打痕が認められる。（230）は敲打痕が周縁に巡っており、この部分を集中的に使用

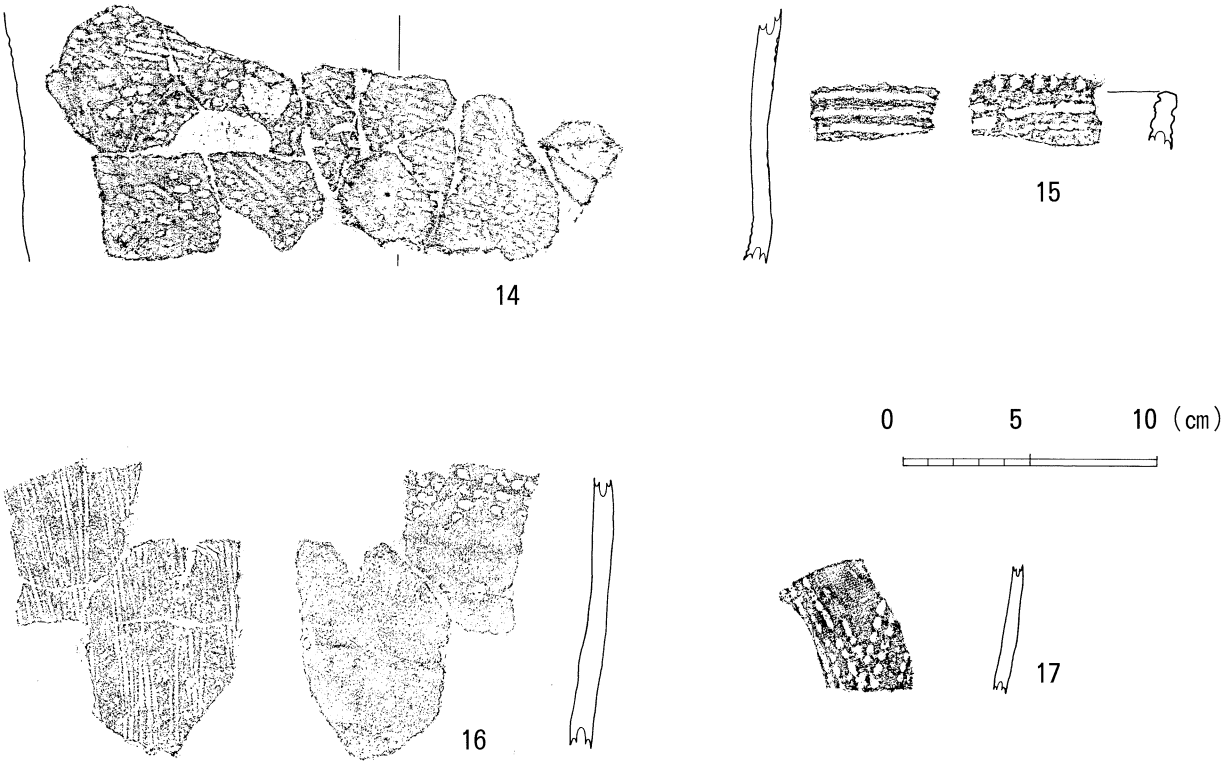
したことが窺える。

石皿（233・234）

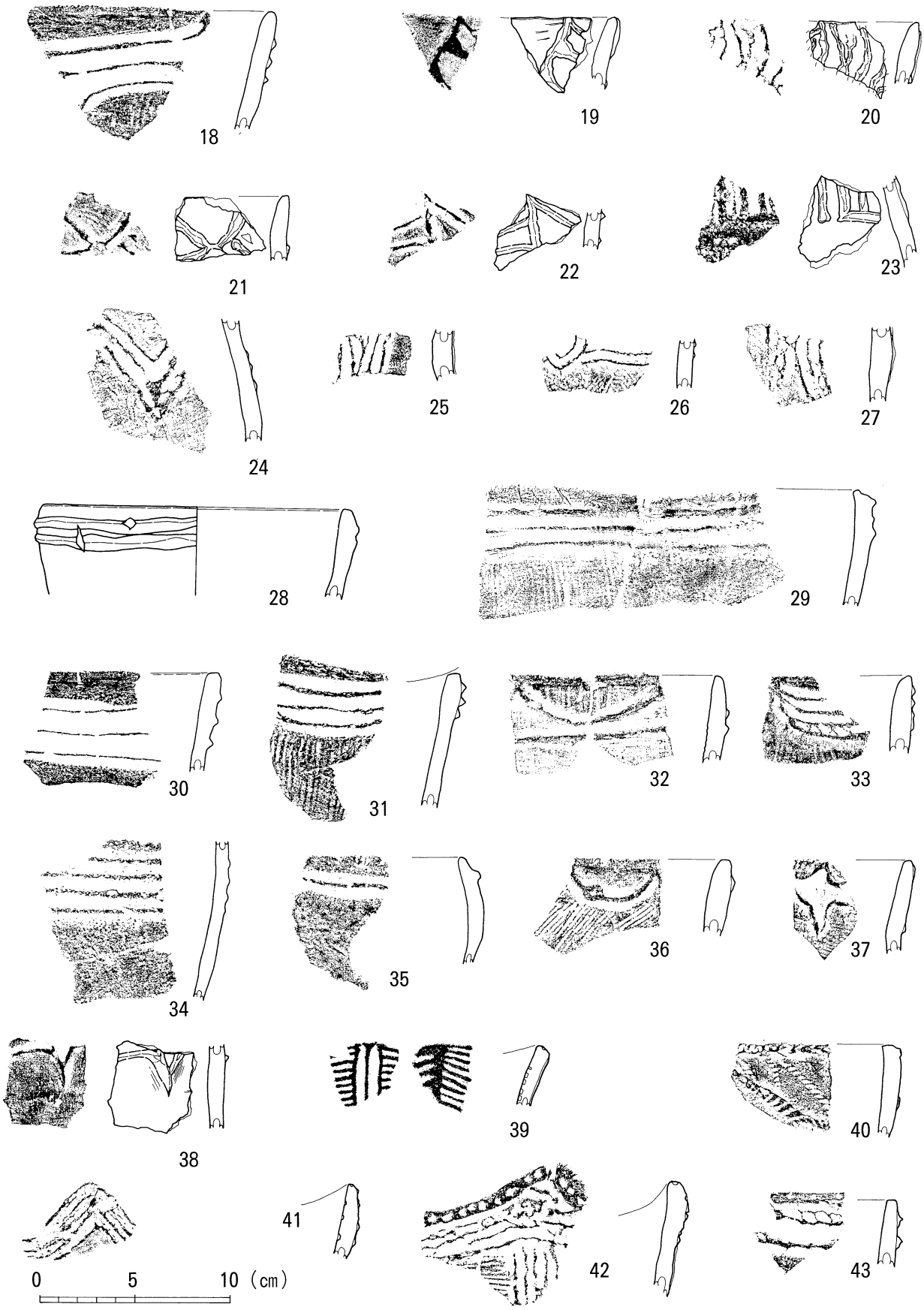
（233）は平坦部に敲打痕が散在するため、石皿として分類を行った。しかし周縁にも敲打痕が密に遺されるため、これ自体を大形の磨石として使用されたものと考えられる。（234）はローリングにより使用痕の類は確認できなかったが、凹みが明確に形成されており、これも石皿として用いられたようである。（金丸）



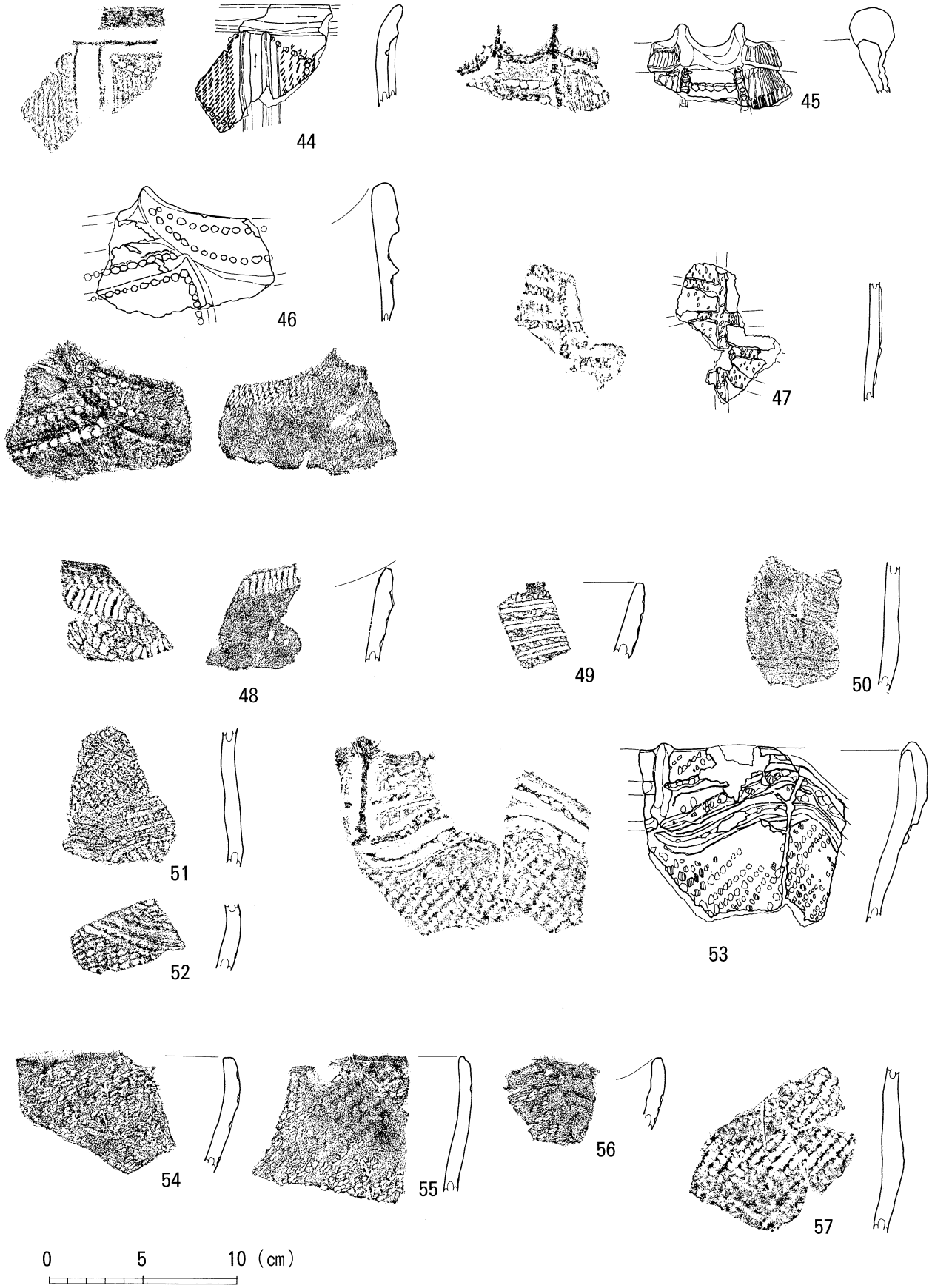
第３図　出土遺物実測図（縄文時代前期の土器）



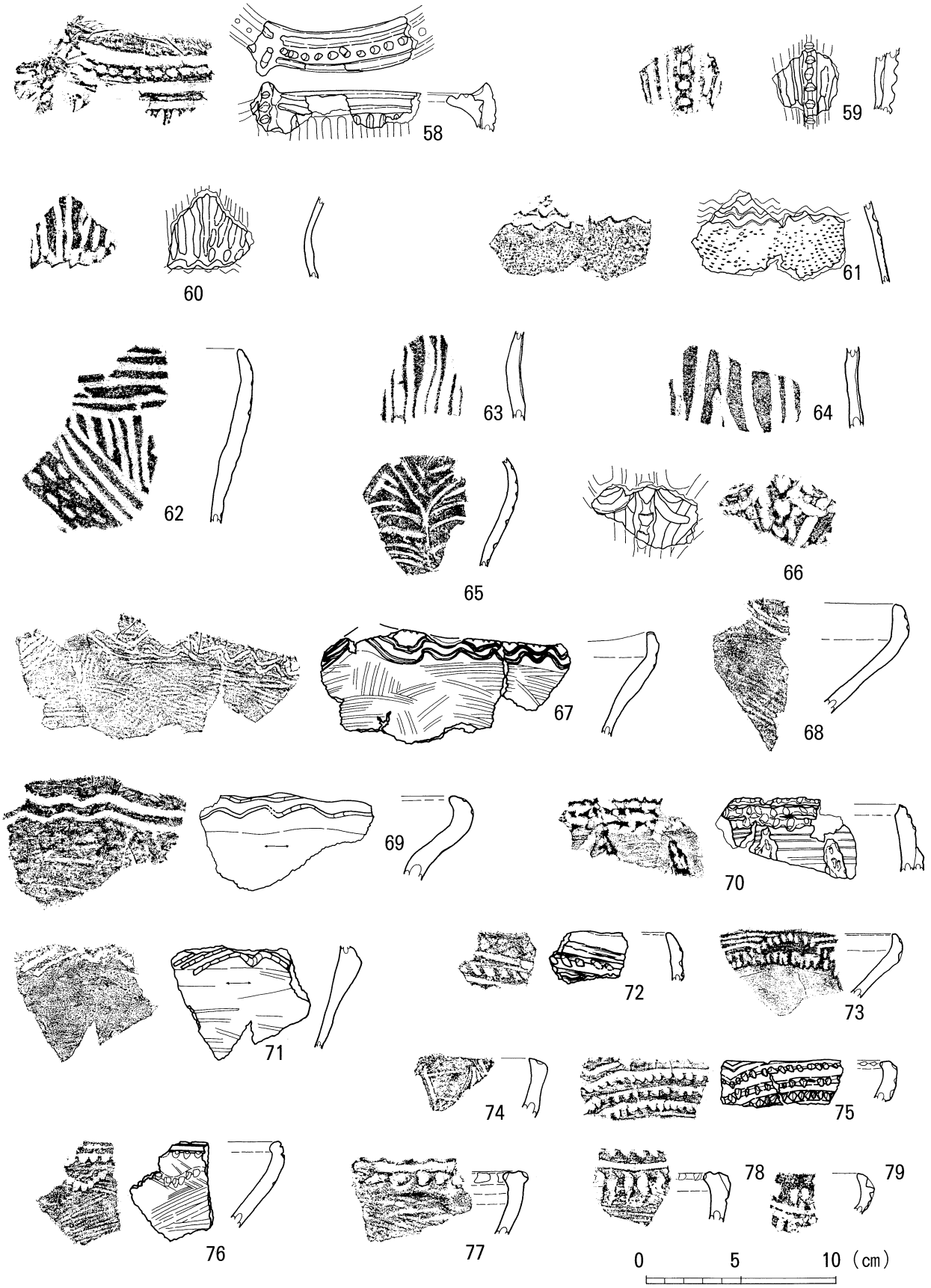
第４図　出土遺物実測図（縄文時代前期の土器）



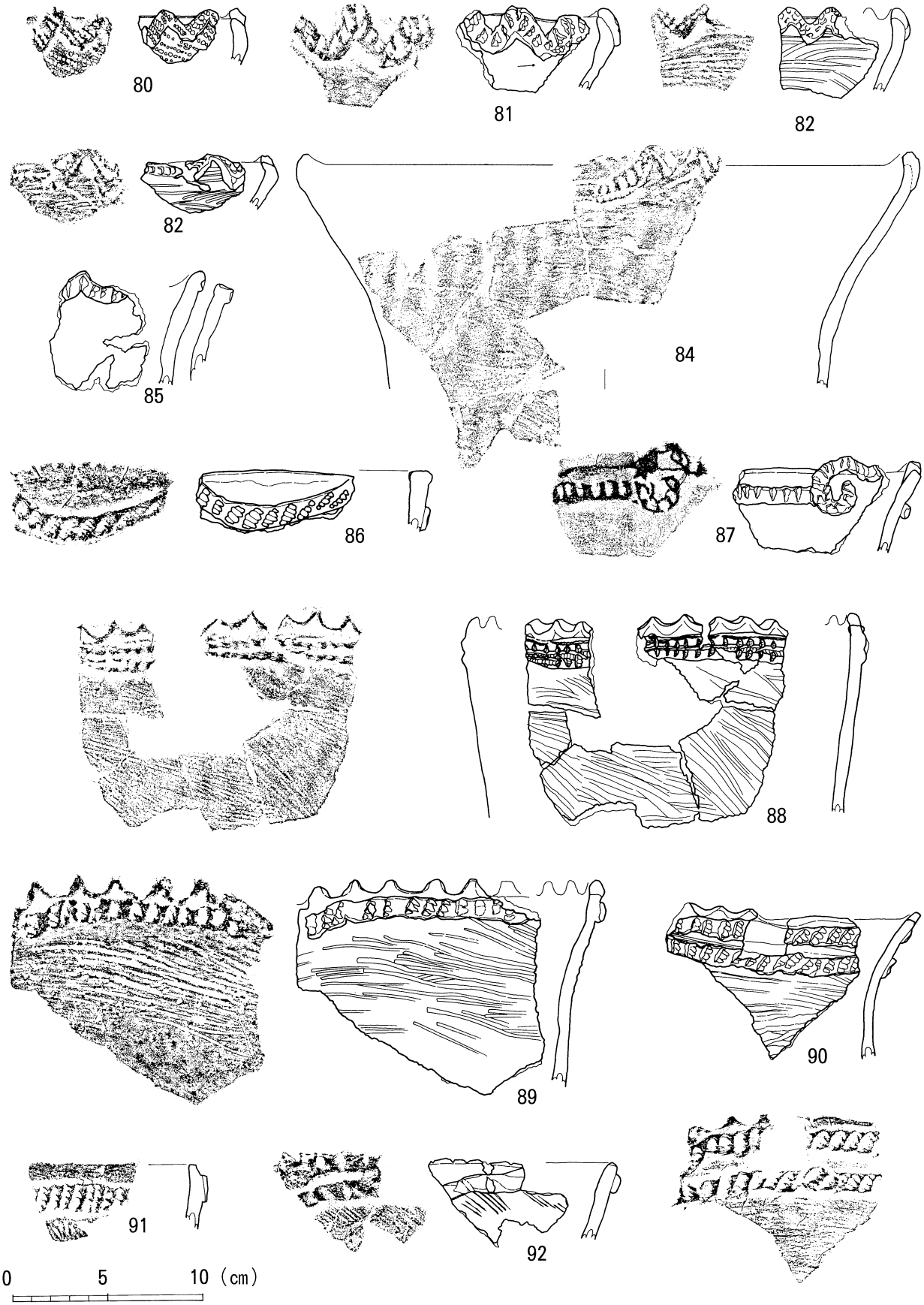
第５図　出土遺物実測図（縄文時代中期の土器）



第６図　出土遺物実測図（縄文時代中期の土器）

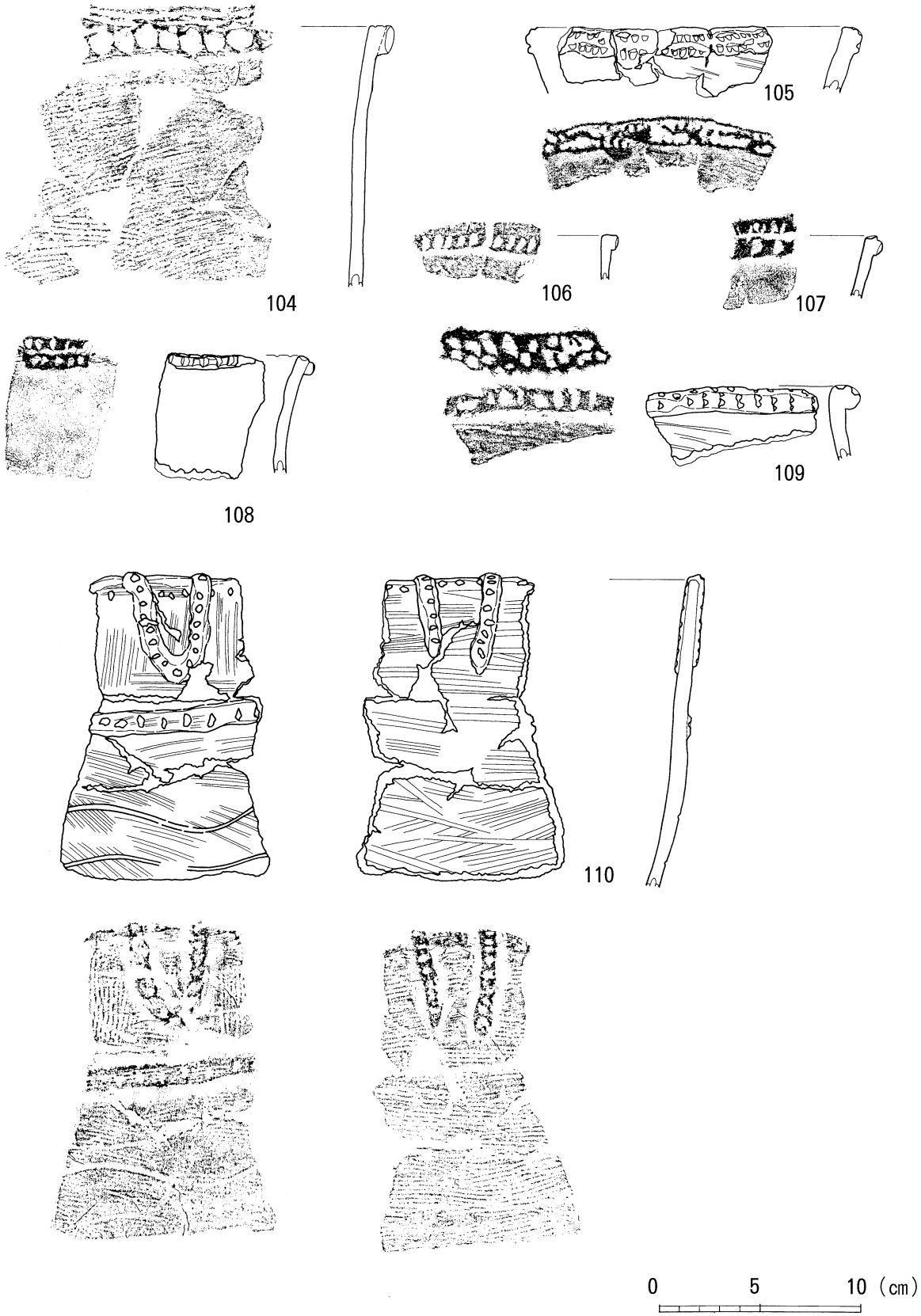


第７図　出土遺物実測図（縄文時代中期の土器）

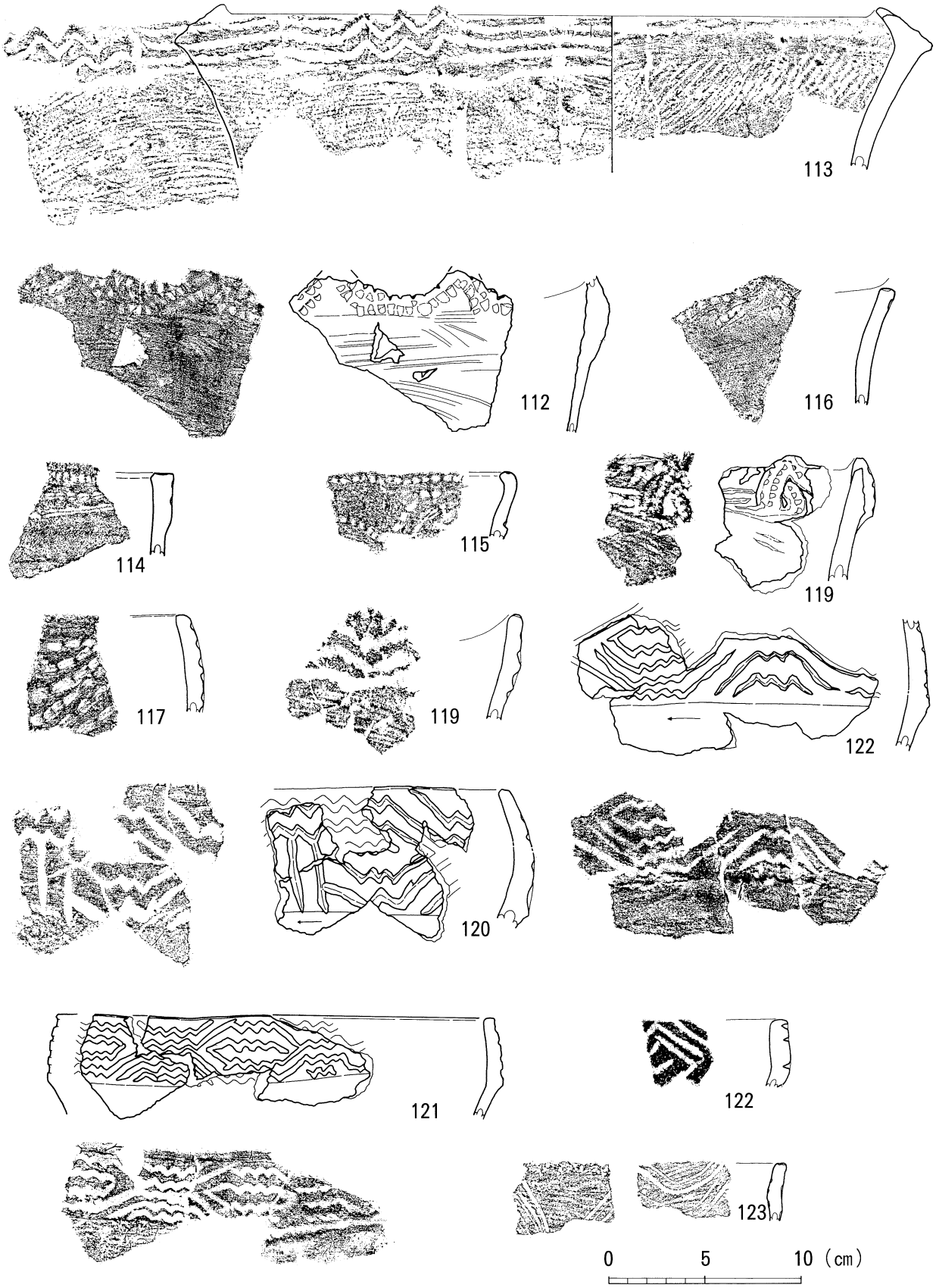


第８図　出土遺物実測図（縄文時代中期の土器）

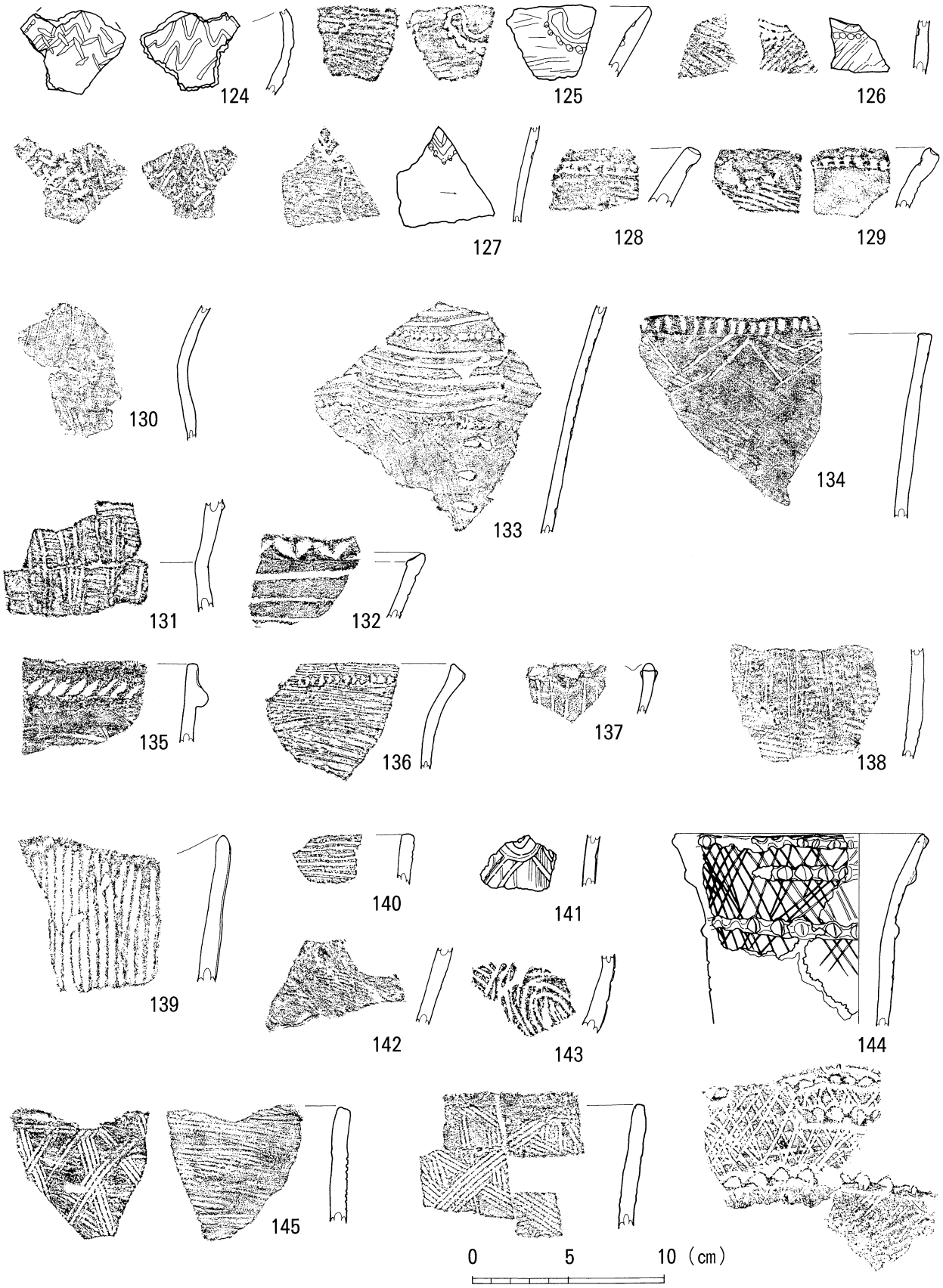
第９図　出土遺物実測図（縄文時代中期の土器）



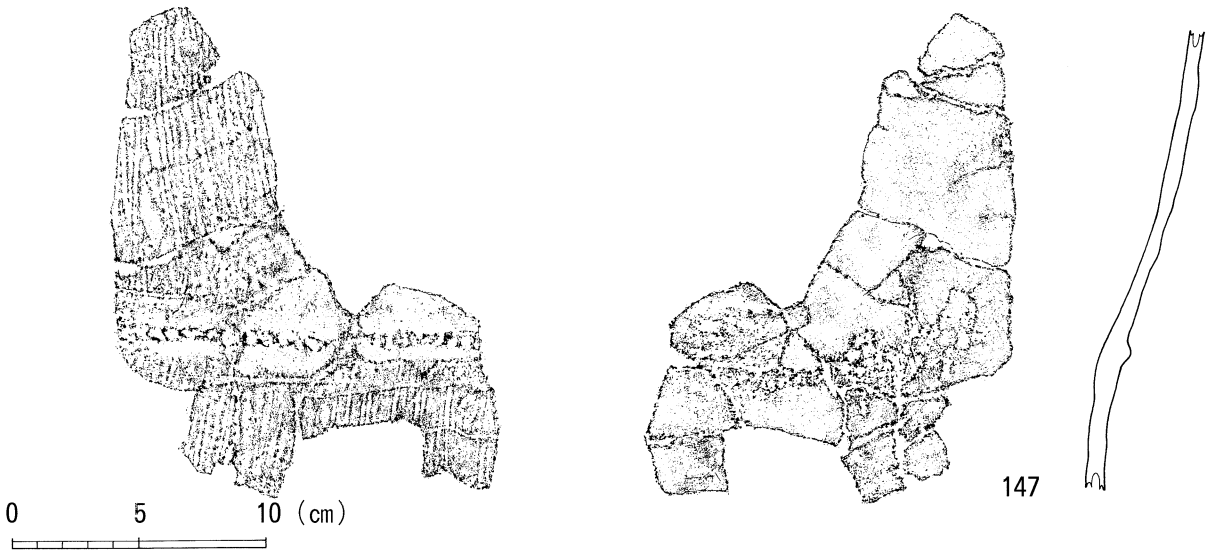
第10図　出土遺物実測図（縄文時代中期の土器）



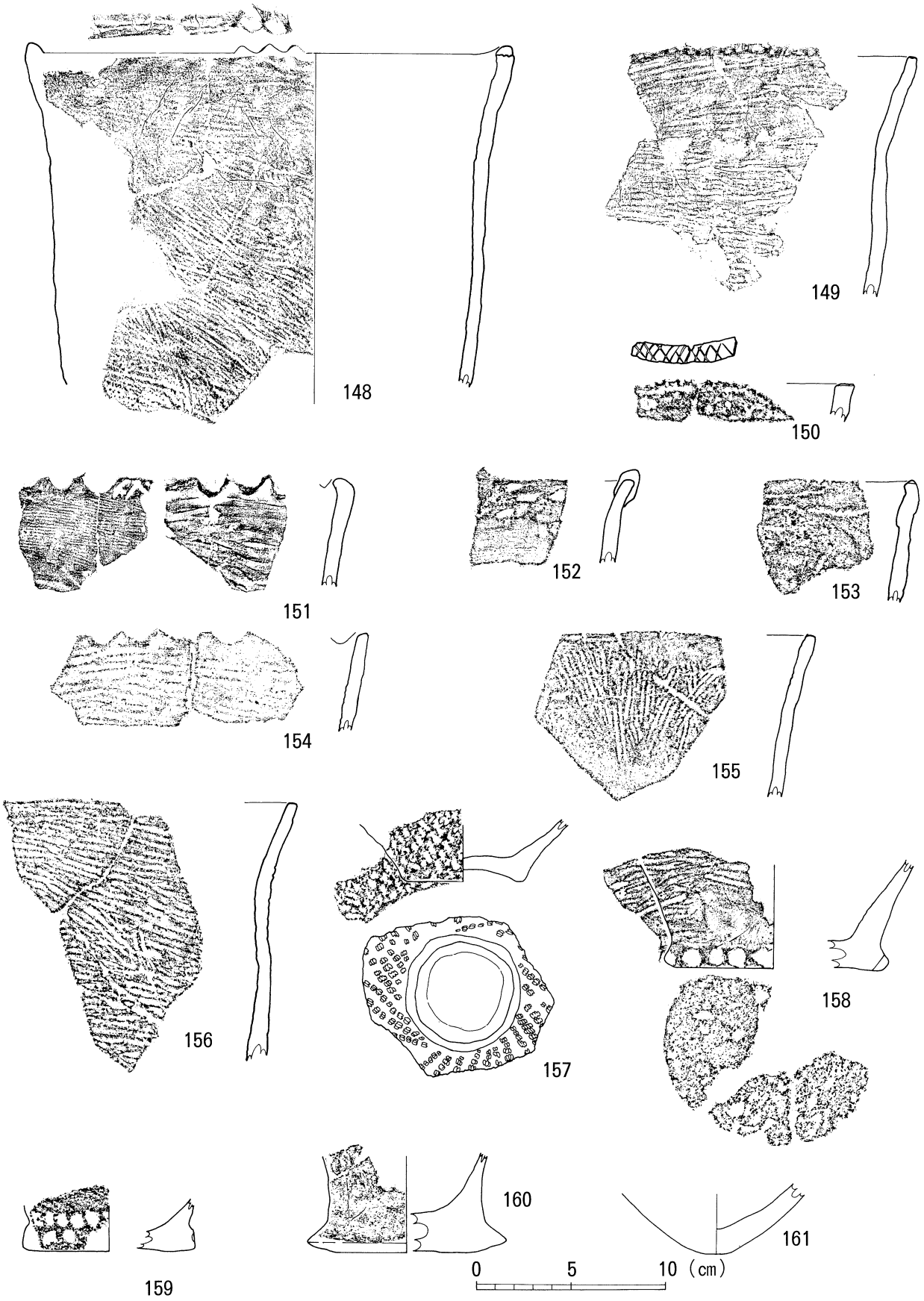
第11図　出土遺物実測図（縄文時代中期の土器）



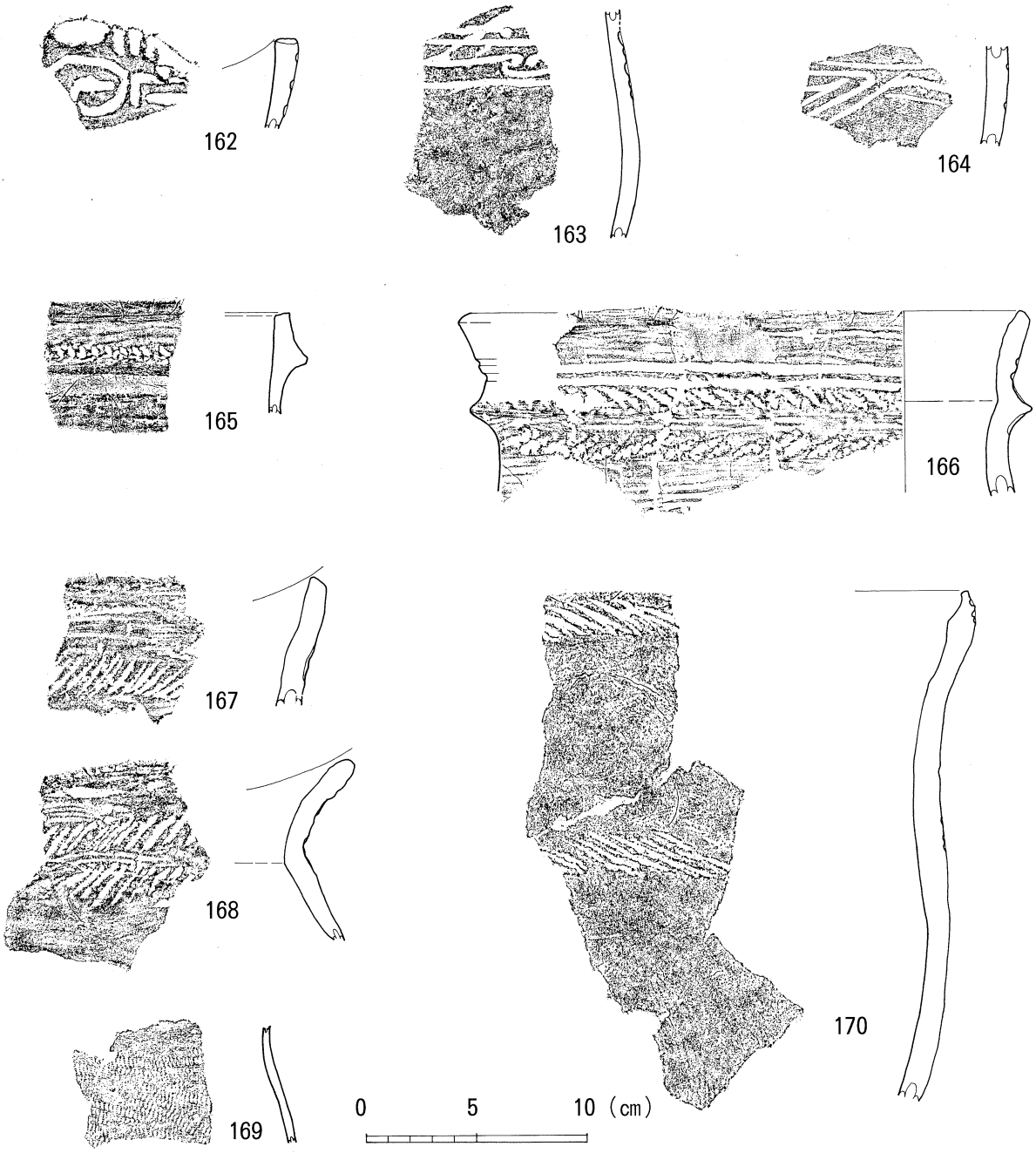
第12図　出土遺物実測図（縄文時代中期の土器）



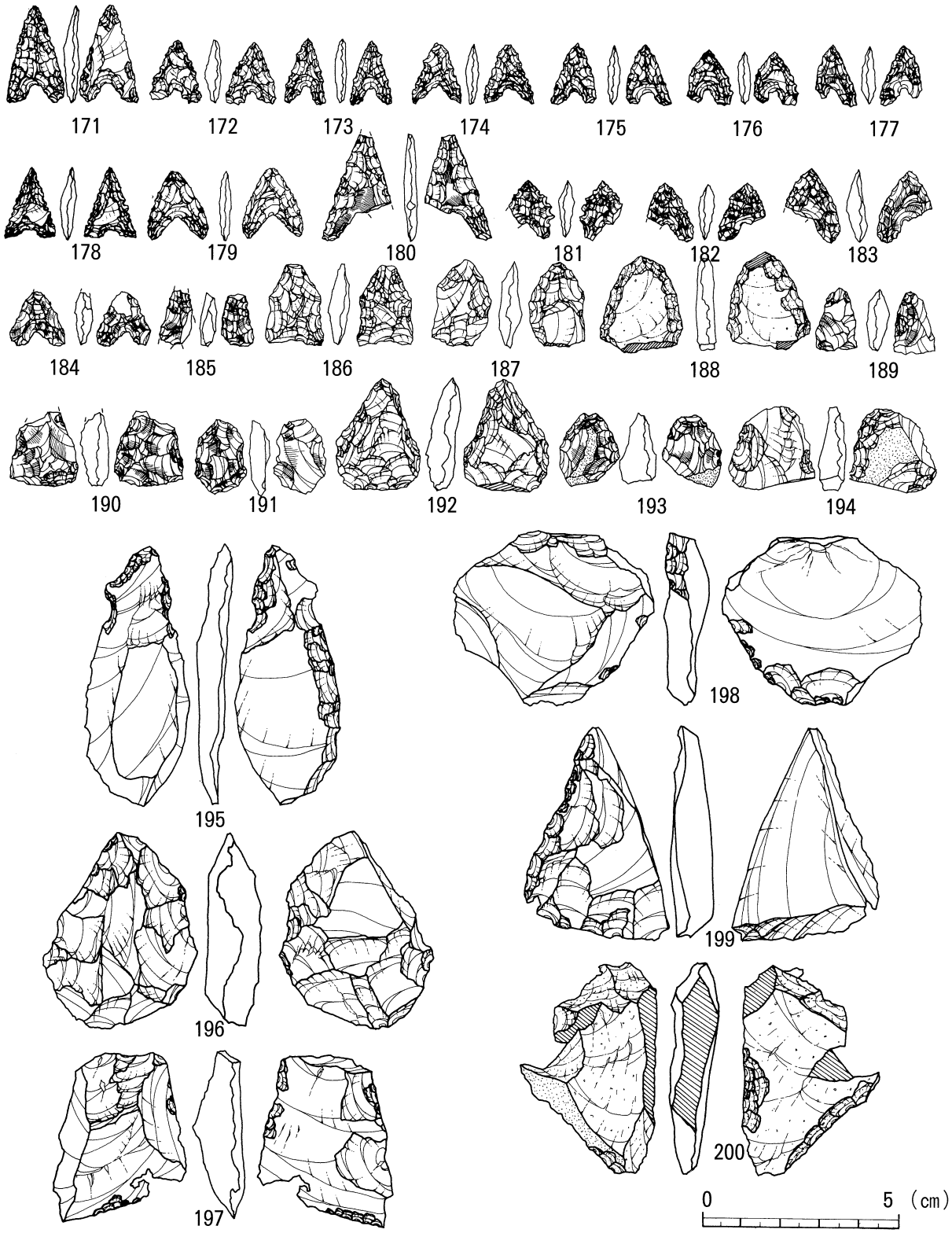
第13図　出土遺物実測図（縄文時代中期の土器）



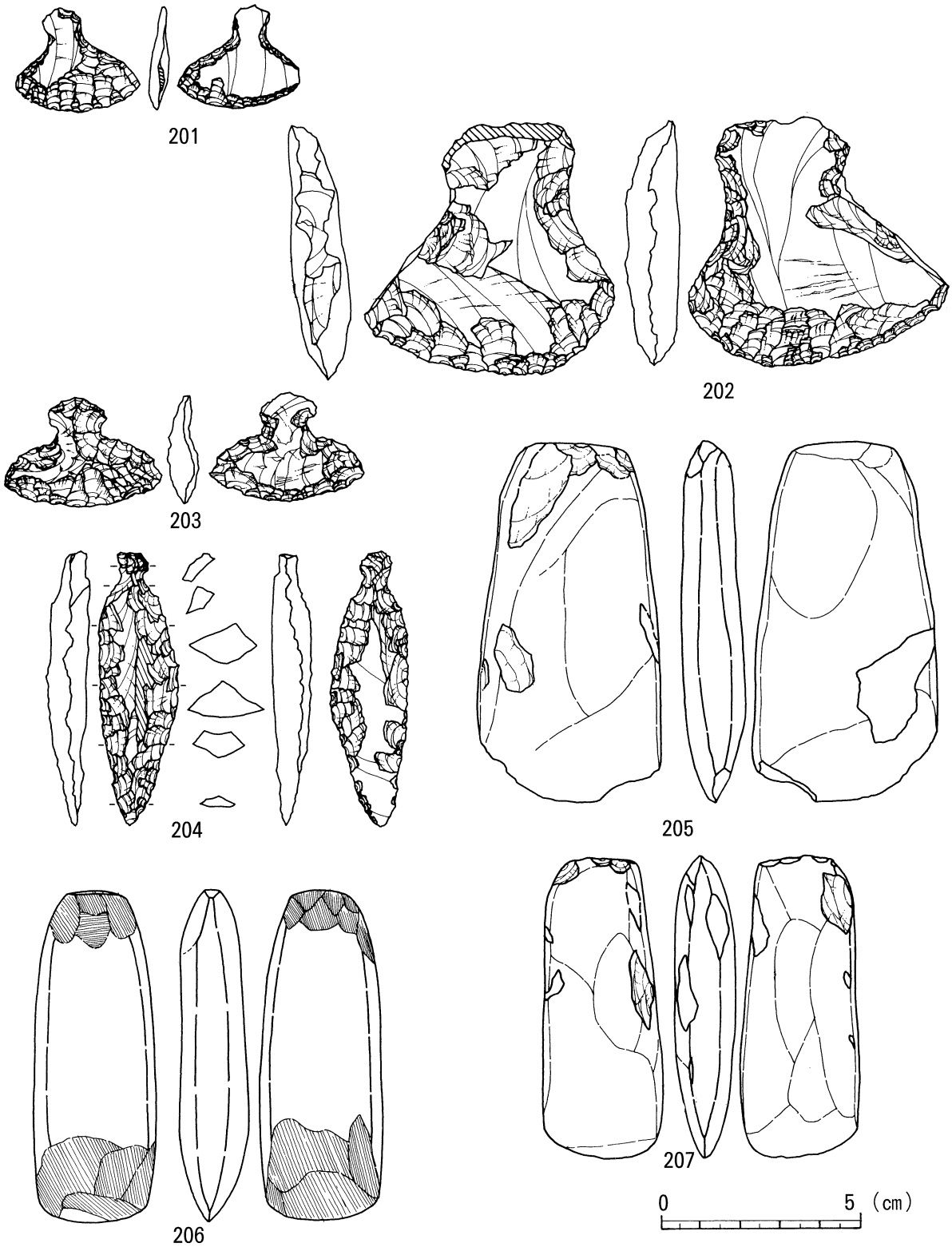
第14図　出土遺物実測図（縄文時代中期の土器）



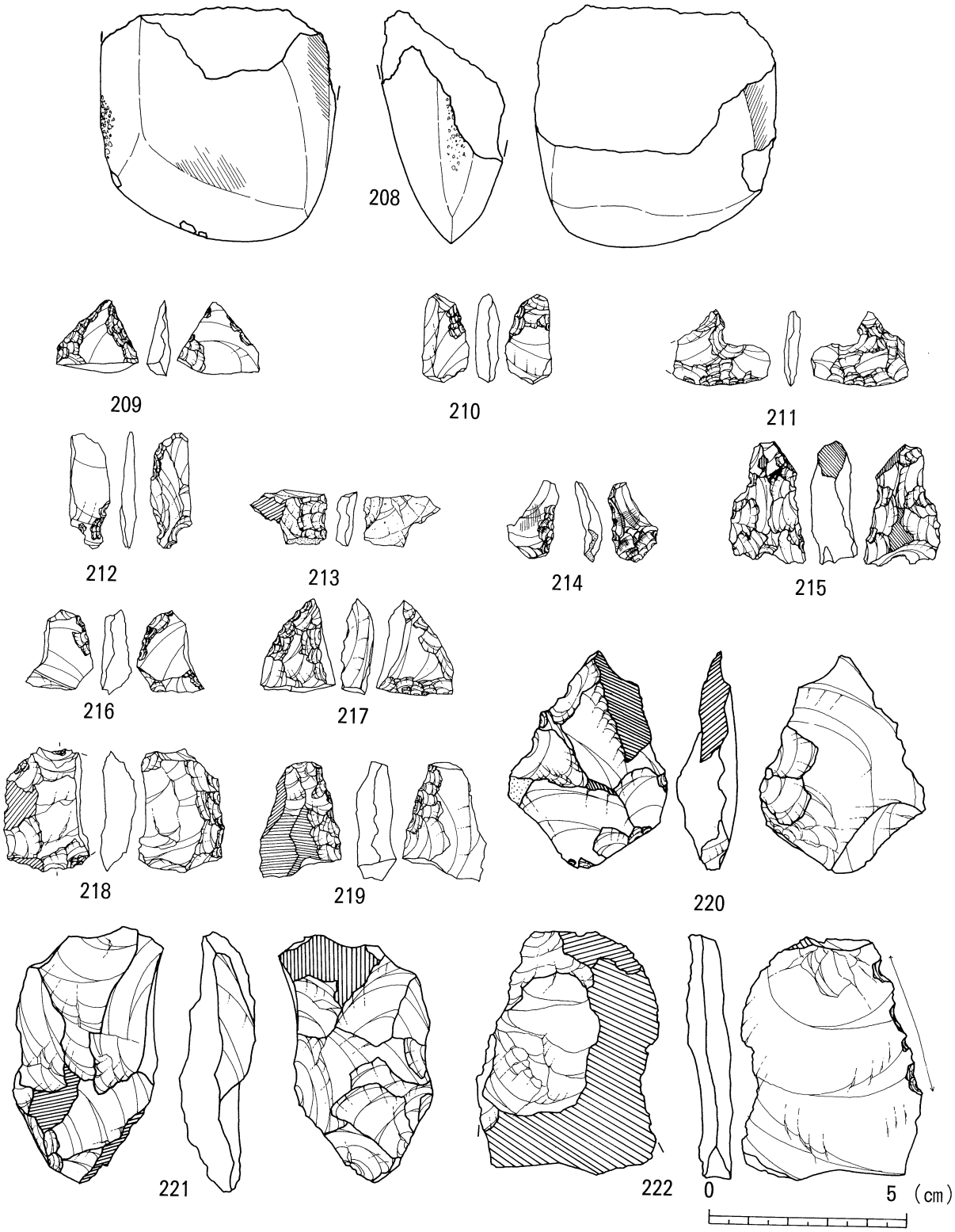
第15図　出土遺物実測図（縄文時代後期の土器）



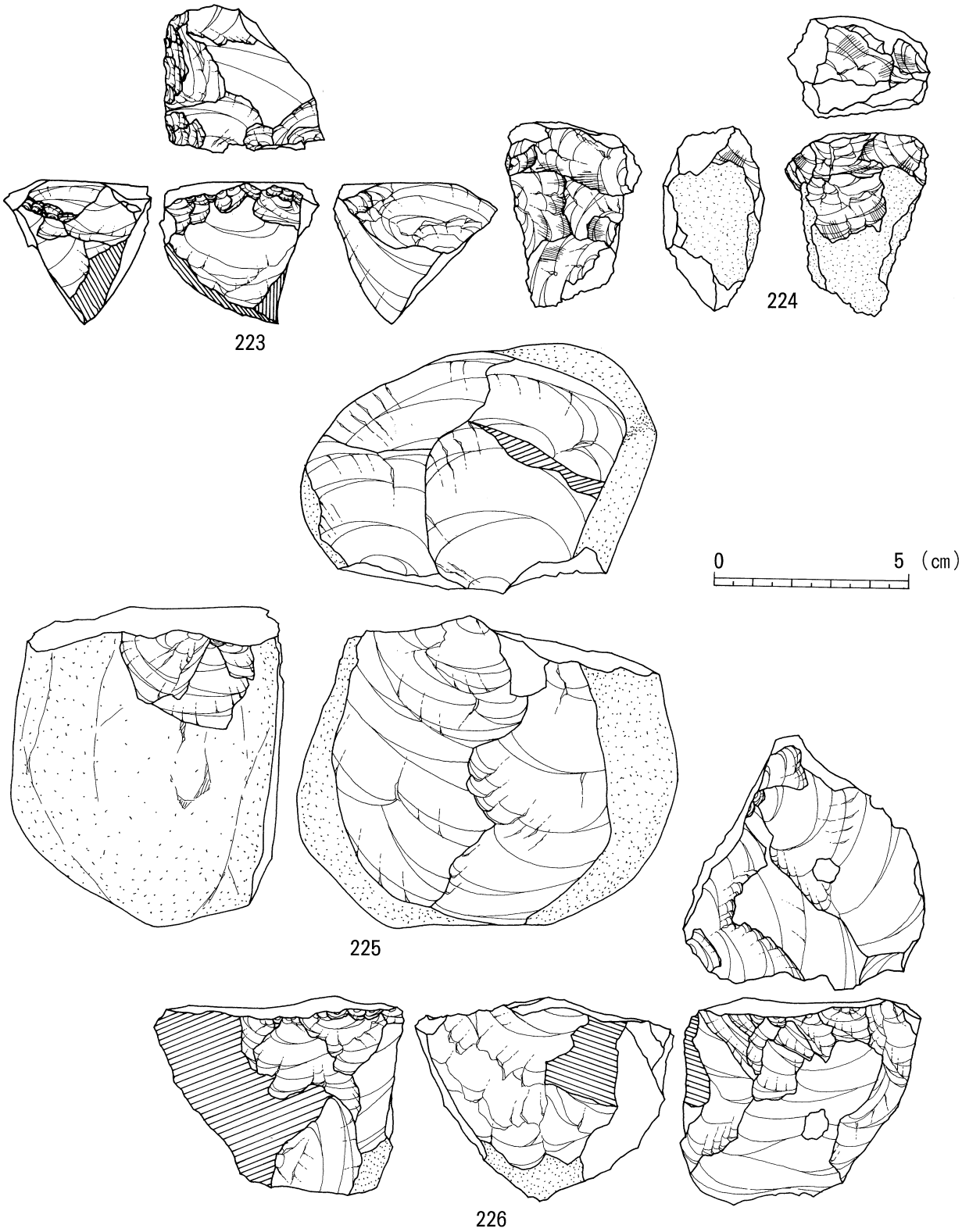
第16図　出土遺物実測図（縄文時代の石器）



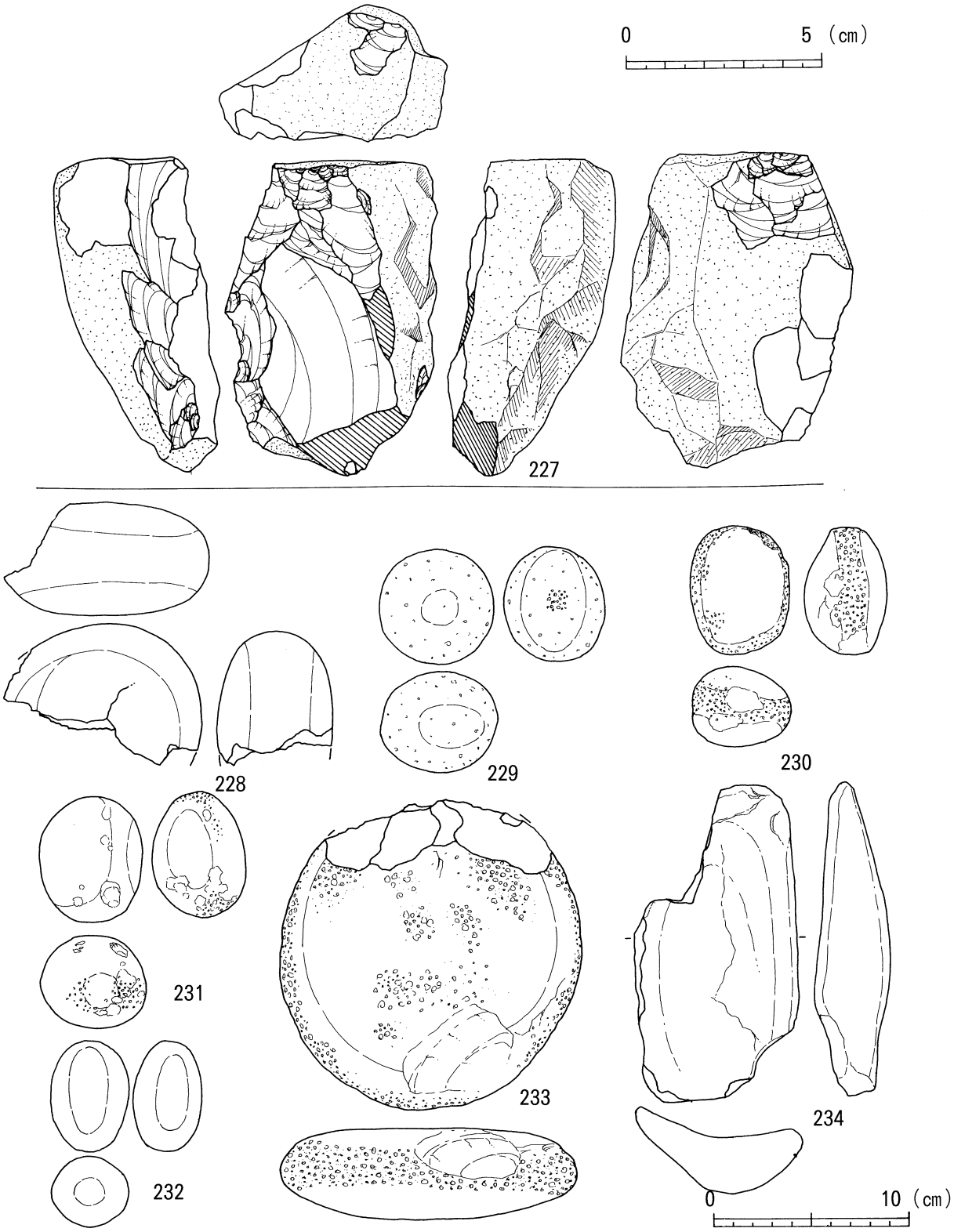
第17図　出土遺物実測図（縄文時代の石器）



第18図　出土遺物実測図（縄文時代の石器）



第19図　出土遺物実測図（縄文時代の石器）



第20図　出土遺物実測図（縄文時代の石器）

胎土(長石：A　角閃石：B　白色粒：C　赤色粒：D　砂粒：E　雲母片：F)
多量：多　中量：中　少量：少　僅少量：僅

番号	部　位	外　　面	内　　面	色　　調	胎　土	備　考
1	口縁部～	沈線→連点→粗いナデ	沈線→ナデ	10YR明黄褐6／6	A多B中E少	補修孔あり
2	口縁部	沈線→ナデ	沈線→ナデ	10YR明褐5／6	A中C少	補修孔あり
3	口縁部	沈線→ナデ	横位の丁寧なナデ	7、5YRにぶ橙5／4	A少B少C少	
4	口縁部	ナデ→沈線→連点	ナデ→押引	7、5YR明褐5／6	A僅B中C僅	
5	口縁部	沈線→ナデ	沈線→ナデ	2、5Y暗オリブ褐3／3	A少B中C中	
6	胴部	沈線→ナデ	ナデ	10YRにぶ黄橙6／4	A少C中	外面に煤付着
7	胴部	沈線→ナデ	横位のナデ	10YRにぶ黄褐4／3	A少B中C中	
8	胴部	沈線→ナデ	ナデ	7、5YR明褐5／6	A中B僅C中	
9	胴部	沈線→ナデ	ナデ	7、5YR灰褐5／2	A少B少C中	
10	胴部	縦位の沈線→沈線	横位の二枚貝条痕	10YR暗褐3／3	A小C中E少	
11	胴部	縦位の沈線→ナデ→波状の沈線	横位のナデ	7、5YR褐4／4	A小B僅C中	
12	胴部	沈線→入念なナデ	入念なナデ→沈線	5YR赤褐4／6	A僅C中E僅	
13	胴部～	沈線	横位のナデ	10YRにぶ黄橙7／4	A小B僅C多	
14	胴部	斜位の条痕→ナデ→連点	横位の条痕→横位のナデ	7、5YR黒褐3／2	A中B少C中	
15	口縁部	押引→ナデ	押引→ナデ	5YRにぶ赤褐4／3	C少F中	
16	頸～胴部	ナデ→縦位の条痕	入念なナデ→連点	10YR灰黄褐4／2	A中B少C多	
17	胴部	連点→ナデ	横位の条痕→ナデ	10YR灰黄褐5／2	A中B僅C少	外面に煤付着
18	口縁部	横二枚貝条→横ナデ→突帯貼付	横位の二枚貝条痕	7、5YRにぶ褐6／3	A僅B中C僅E中	外面に煤付着
19	口縁部	横位の条痕→ナデ→突帯貼付	横位の二枚貝条痕→ナデ	10YRにぶ黄橙6／3	A僅C中	外面に煤付着
20	口縁部	ナデ→突帯貼付	横位の条痕→ナデ	10YR灰黄褐5／2	A僅B僅C少	
21	口縁部	横位のナデ→突帯貼付	横位の二枚貝条痕→ナデ	5YRにぶ黄橙6／4	A僅B僅C僅F中	
22	胴部	ナデ→突帯貼付	横位の条痕→ナデ	7、5YR灰褐5／2	A中C中	
23	胴部	ナデ→突帯貼付	横位の条痕	10YR褐灰4／1	A中B中C僅E中	
24	胴部	ナデ→突帯貼付	横位の二枚貝条痕	5YR灰褐5／2	A中B僅C中	外面に煤付着
25	胴部	ナデ→突帯貼付	横位の二枚貝条痕→ナデ	10YR灰黄褐6／2	A中B中C中D僅	
26	胴部	斜方向条痕→横ナデ→突帯貼付	斜方向二枚貝条痕→ナデ	7、5YR灰褐5／2	A中B小C僅	外面に煤付着
27	胴部	斜方向条痕→ナデ→突帯貼付	横位の二枚貝条痕→ナデ	10YR灰黄褐5／2	A僅C中E中F中	内面に煤付着
28	口縁部	横位→縦位の条痕→突帯貼付	横位の二枚貝条痕→ナデ	7、5YR橙6／6	A中B中C僅	外面に煤付着
29	口縁部	縦位の条痕→突帯貼付	横位の二枚貝条痕→ナデ	7、5YR橙6／6	A中B中C中	
30	口縁部	横位のナデ→突帯貼付	横位の二枚貝条痕→横ナデ	7、5Yにぶ褐5／3	A僅B僅C僅	外面に煤付着
31	口縁部	縦二枚貝条痕→ナデ→突帯貼付	横位の粗い条痕	10YR黒褐3／1	A多B僅E中	外面に煤付着
32	口縁部	縦位の条痕→ナデ→突帯貼付	横位の二枚貝条痕→ナデ	10YRにぶ黄橙7／3	A中B僅C中	外面に煤付着
33	口縁部	横ナデ→突帯貼付	不定方向二枚貝条痕→ナデ	10YR浅黄橙8／3	A僅B中C僅	
34	頸～胴部	突帯貼付	不明	7、5YR橙7／6	A僅B僅E多	
35	口縁部	ナデ→突帯	不定方向条痕→ナデ	10YR灰黄褐5／2	A中B少C僅	外面に煤付着
36	口縁部	斜方向二枚貝条痕→突帯貼付	斜方向二枚貝条痕	10YRにぶ黄橙7／2	A中B僅C中E僅	
37	口縁部	横位の二枚貝条痕→突帯貼付	縦位の二枚貝条痕→ナデ	7、5YR灰褐4／2	A中C僅	外面に煤付着
38	胴部	突帯貼付→ナデ	横位の条痕→横位のナデ	7、5YR灰褐5／2	A中C中	
39	口縁部	ナデ→突帯貼付→沈線	ナデ→沈線	10YRにぶ黄褐5／3	A中B僅C少	
40	口縁部	横位の二枚貝条痕→突帯貼付	横二枚貝条痕→部分的ナデ	10YRにぶ黄橙6／3	A僅B中C中E僅	
41	口縁部	突帯貼付	二枚貝条痕→円形刺突	7、5YRにぶ橙7／3	A僅E多	
42	口縁部	横位の二枚貝条痕→突帯貼付	横位の二枚貝条痕	7、5YRにぶ橙6／4	A中E多F中	
43	口縁部	突帯貼付→ナデ→相交弧文	横位の二枚貝条痕→ナデ	2,5Y暗灰黄5／2	A僅B僅C中	

胎土(長石：A　角閃石：B　白色粒：C　赤色粒：D　砂粒：E　雲母片：F)
多量：多　中量：中　少量：少　僅少量：僅

番号	部　位	外　　面	内　　面	色　　調	胎　土	備　考
44	口縁部	縄文→突帯貼付→刺突	横位の丁寧なナデ	7、5YR橙6／6	A少E中G少	
45	口縁部	ナデ→突帯貼付→押引	横位の丁寧なナデ	2、5Y淡黄8／3	A僅C僅E中G僅	
46	口縁部	突帯貼付→ナデ→円形刺突	横位のナデ→縄文	10YR明黄褐7／6	A中C僅E中G僅	外面に煤付着
47	胴部	縄文→突帯貼付→突帯上縄文	粗いナデ	10YRにぶ黄橙6／4	A中B少C中	内面に煤付着
48	口縁部	粗い縄文→押引文	横位のナデ→押引	2、5Y暗灰黄5／2	C中D僅F少G僅	外面に煤付着
49	口縁部	粗い縄文→沈線文	横位のナデ	10YRにぶ黄橙6／3	A中B僅C僅D僅	
50	胴部	粗い縄文→沈線	横位の条痕→ナデ	10YRにぶ黄橙6／3	C多F僅G中	
51	胴部	粗い縄文→沈線	横位の条痕→ナデ	10YRにぶ黄橙6／3	C多F僅G中	外面に煤付着
52	胴部	粗い縄文→沈線	横位の条痕→ナデ	10YRにぶ黄橙6／3	C多F僅G中	
53	口縁部～	ナデ→粗い縄文→突帯貼付	横位の入念なナデ	10YR灰黄褐4／2	A中B僅C中E僅	
54	口縁部	ナデ→粗い縄文	横位の入念なナデ	10YR黄褐4／2	A中B僅E僅	外面に煤付着
55	口縁部	ナデ→粗い縄文	横位の入念なナデ	10YR灰黄褐5／2	A中B僅C僅E僅	外面に煤付着
56	口縁部	ナデ→粗い縄文	横位の入念なナデ	2、5Y灰黄褐4／2	A中B僅C僅	
57	口縁部～	ナデ→粗い縄文→突帯貼付	横位の入念なナデ	10YR灰黄褐4／2	A中B僅C中E僅	
58	口縁部	突帯貼付→ナデ→沈線・連点	入念なナデ	5YR灰褐5／2	C僅E中	
59	胴部	突帯貼付→ナデ→沈線	入念なナデ	5YR灰褐5／2	C僅E中	
60	胴部	ナデ→沈線	入念なナデ	5YR灰褐5／2	C僅E中	
61	胴部	ナデ→沈線・縄文→ナデ	入念なナデ	5YR灰褐5／2	C僅E中	
62	口縁部～	ナデ→沈線	横位の条痕→横位のナデ	2、5Y暗灰黄4／2	A少C中	
63	胴部	ナデ→沈線	横位のナデ	7、5YR黒褐3／1	A中C僅E僅	内外面に煤付着
64	胴部	ナデ→沈線	横位のナデ	7、5YR黒褐3／1	A中C僅E僅	内外面に煤付着
65	口縁部～	沈線→ナデ	横位の条痕→横位のナデ	5Yオリーブ黒3／1	A少C中	内外面に煤付着
66	胴部	突帯貼付→ナデ→沈線	横位のナデ	7、5YR灰褐4／2	A中C少	内外面に煤付着
67	口縁部	不定方向条痕→ナデ→沈線	斜方向条痕→粗い横ナデ	5YR橙6／6	A僅B中C僅	
68	口縁部	斜方向条痕→ナデ→押引	横位の二枚貝条痕→横ナデ	2、5Y暗灰黄4／2	A中C中E僅	
69	口縁部	横位の条痕→押引→横位のナデ	横位のナデ	2、5Y黄灰5／1	A多E中	
70	口縁部	横位の条痕→突帯貼付→刺突	横位の条痕→横位のナデ	7、5YR灰褐6／2	A中B僅C中	外面に煤
71	頸～胴部	横位の条痕→横位のナデ→押引	横位の二枚貝条痕→横ナデ	2、5Y黄灰4／1	A中B僅C少	
72	口縁部	ナデ→沈線→刺突	横位のナデ	7、5YRにぶ橙7／4	C中F中G中	
73	口縁部	横条痕→横ナデ→沈線・条痕	横位のナデ	7、5YRにぶ褐5／3	A中B僅C僅E僅	
74	口縁部	ナデ→沈線	横位の二枚貝条痕→横ナデ	10YRにぶ黄橙6／4	A少C僅E僅	
75	口縁部	横位のナデ→沈線→刺突	横条痕→横ナデ→貝殻刻目	5YRにぶ赤褐5／3	A中B僅F僅	
76	口縁部	斜位の条痕→沈線→刺突	斜位の条痕→ナデ	10YRにぶ黄橙6／4	A中B僅C中	外面に煤付着
77	口縁部	斜位の条痕→ナデ→沈線→刺突	横位の条痕→横ナデ→刺突	7、5Yにぶ褐5／3	A中B僅C中E中	
78	口縁部	横条痕→横ナデ→貝殻腹縁刺突	横二貝条→貝刺突→横ナデ	7、5YR褐4／3	A中B僅C中E僅	
79	口縁部	ナデ→沈線・連点	横位のナデ	7、5YR橙6／6	A僅C僅D僅E少	
80	口縁部	縄文→突帯貼付→突帯上縄文	横位のナデ	10YRにぶ黄橙7／2	A中B僅C僅E僅	外面に煤付着
81	口縁部	ナデ→突帯貼付→貝殻腹縁刺突	横位の条痕	10YR褐灰5／1	A中B僅C中D僅	外面に煤付着
82	口縁部	横二枚貝条痕→突帯貼付→刺突	横位の二枚貝条痕→横ナデ	10YR灰黄褐5／2	A中B僅C僅E中	外面に煤付着
83	口縁部	横位の条痕→突帯貼付→刺突	横位のナデ	7、5YRにぶ橙7／4	A中B僅C中	
84	口縁部～	横条痕→ナデ→突帯→刺突	横位の条痕→ナデ	10YRにぶ黄橙7／4	A少B中C中	
85	口縁部	斜二貝条→ナデ→突帯→貝刺突	横位の二枚貝条痕→ナデ	10YR褐灰5／1	A中C中E中	外面に煤付着
86	口縁部	ナデ→突帯→貝殻腹縁刺突	横位の条痕→横位の磨き	10YR褐灰4／1	A中B中C中	

胎土(長石：A　角閃石：B　白色粒：C　赤色粒：D　砂粒：E　雲母片：F)
多量：多　中量：中　少量：少　僅少量：僅

番号	部　位	外　　面	内　　面	色　　調	胎　土	備　考
87	口縁部	横位のナデ→突帯貼付→刺突	横位の条痕→横位のナデ	10YRにぶ黄褐5／3	A中B僅C中E僅	外面に煤付着
88	口縁部～	斜位条痕→ナデ→突帯→貝刺突	横位の二枚貝条痕→横ナデ	7、5YR灰褐4／2	A僅B中C中E僅	
89	口縁部～	ナデ→斜二貝条→突帯→貝刺突	横位の二枚貝条痕→横ナデ	7、5YRにぶ褐5／4	A中B中C中	
90	口縁部	横二条→横ナデ→突帯→貝刺突	横位の条痕→ナデ	10YRにぶ黄褐5／4	A僅B僅C僅	外面に煤付着
91	口縁部	斜二枚貝条痕→突帯→貝殻刺突	横位の二枚貝条痕→横ナデ	10YR暗褐3／3	A僅B中E僅	
92	口縁部	斜位の条痕→ナデ→突帯貼付	横位の二枚貝条痕	5YR橙7／6	A中B僅C中E中	
93	口縁部	斜位の条痕→ナデ→突帯貼付	横位の条痕→横位のナデ	5YRにぶ赤褐4／3	A中B多C中E僅	
94	口縁部	横条→横ナデ→突帯→指頭押圧	横位の条痕→横位のナデ	10YR灰黄褐6／2	A中B中C中	外面に煤付着
95	口縁部	突帯→横二枚貝条痕→貝殻刺突	横位の二枚貝条痕→ナデ	5YR明赤褐5／8	A中C少	
96	口縁部	ナデ→突帯貼付→貝殻腹縁刺突	斜位の条痕→ナデ	7、5YR褐4／4	A中C少E僅	
97	口縁部	横条痕→横ナデ→突帯→貝刺突	斜位の条痕→ナデ	7、5YRにぶ褐5／3	A僅B僅E中	
98	口縁部～	斜二条→突帯→貝刺突→沈線	横位の二枚貝条痕	10YR灰黄褐4／2	A僅B中C中D僅	外面に煤付着
99	口縁部～	斜二条→突帯→貝刺突→沈線	横位の二枚貝条痕	10YR灰黄褐4／2	A僅B中C中D僅	外面に煤付着
100	口縁部	ナデ→突帯貼付→貝殻腹縁刺突	横位の二枚貝条痕→横ナデ	7、5YRにぶ褐5／3	A少B中C中E多	
101	口縁部	ナデ→突帯→貝殻腹縁刺突	斜位の二枚貝条痕	7、5YRにぶ褐5／4	A僅C僅E僅	
102	口縁部	横位のナデ→突帯→刻目	横位の二枚貝条痕	7、5YRにぶ褐6／3	A中B中C中E僅	
103	胴部	ナデ→突帯貼付→刻目	横位の条痕→ナデ	5YRにぶ赤褐5／3	A少B少C中D少	
104	口縁部～	横条痕→突帯→ナデ→指頭押圧	横位の条痕→横位のナデ	7、5YR褐4／6	A少C中	
105	口縁部	斜位条痕→横ナデ→突帯→刺突	横位の二枚貝条痕→ナデ	10YRにぶ黄橙7／4	A僅B中C中E中	
106	口縁部	横位のナデ→突帯→刻目	横位のナデ	10YRにぶ黄橙6／3	A少B少C中	
107	口縁部	横位の磨き→突帯→刻目	横位の磨き	7、5YRにぶ橙7／9	A中B僅C中	
108	口縁部	横位のケズリ→突帯貼付→刻目	横位のケズリ	10YR灰黄褐4／2	A僅B僅C僅E中	
109	口縁部	横位の条痕→突帯貼付→刺突	横位の二枚貝条痕→横ナデ	7、5YRにぶ褐5／3	A少B中C中E多	
110	口縁部～	突帯→刺突→横二貝条→沈線	横二枚貝条痕→突帯→刺突	5YR暗赤褐3／3	A中B僅C中D僅	
111	口縁部	横位の二枚貝条→横ナデ→押引	横位の二枚貝条痕→横ナデ	7、5YR橙6／6	A中C少E中	
112	口縁部	斜位二枚貝条痕→横ナデ→連点	横位の二枚貝条痕→横ナデ	7、5YR橙7／6	A少B僅C中	
113	口縁部	横位二枚貝条痕→横ナデ→押引	横位のナデ	2、5Y淡黄8／3	A少B少C僅E僅	
114	口縁部	横位のナデ→押引	横位のナデ	7、5YRにぶ褐5／4	A中B僅C中	
115	口縁部	横位のナデ→押引	横位のナデ	7、5YR橙6／6	A少B僅C中	
116	口縁部	斜方向ナデ→突帯貼付→貝刺突	横位の条痕→横位のナデ	7、5YRにぶ褐5／3	A中B中C中E僅	
117	口縁部	横位のナデ→押引→ナデ	横位の入念なナデ	2、5Y黄灰6／1	A少C中	
118	口縁部	沈線→押引→ナデ	横位の二枚貝条痕→横ナデ	2、5Y黄灰5／1	A少B僅C少	
119	口縁部	沈線→横位のナデ	横位の二枚貝条痕→横ナデ	7、5YR灰褐4／2	A多B僅C僅E僅	
120	口縁部	沈線→横位のナデ	横位の二枚貝条痕→横ナデ	7、5YR褐灰4／1	A中C僅E中	
121	口縁部	横位のナデ→沈線→ナデ	横位のナデ	7、5YR褐灰4／1	A中C僅E中	
122	口縁部	横位のナデ→鋭利な沈線	横位のナデ	10YR浅黄橙8／3	A中B僅C僅	
123	口縁部	横位の条痕→横位のナデ→沈線	横位の条痕→横ナデ→沈線	5YR橙6／6	A少B僅C中	
124	口縁部	沈線→横位のナデ	横位の入念なナデ→沈線	5YR明赤褐5／8	A少B僅C少	内面に煤付着
125	口縁部	横位の条痕→ナデ	横条痕→横ナデ→沈線刺突	7、5YR橙6／6	A僅B僅C中D僅	
126	胴部	斜位の条痕→ナデ	横条痕→横ナデ→沈線刺突	10YRにぶ黄褐4／3	A少C少	
127	胴部	横位の条痕→沈線→刺突→ナデ	横位の二枚貝条痕→横ナデ	5YR暗赤褐3／6	A中B僅C少	
128	口縁部	横位のナデ→押引	横位のナデ	7、5YR浅黄橙8／4	A少C少D少	
129	口縁部	斜位の二枚貝条痕→ナデ	横位のナデ→押引	7、5YRにぶ橙6／4	A中C少E僅	

胎土(長石：A　角閃石：B　白色粒：C　赤色粒：D　砂粒：E　雲母片：F)
多量：多　中量：中　少量：少　僅少量：僅

番号	部　位	外　　面	内　　面	色　　調	胎　土	備　考
130	胴部	横位の入念なナデ→沈線	横位の入念なナデ	10YRにぶ黄橙6／4	A僅E少G少	
131	胴部	横位の条痕→突帯→ナデ→沈線	横位の条痕→横位のナデ	10YRにぶ黄褐5／3	A中B少E中	
132	口縁部	斜位の条痕→貝殻腹縁刺突	斜方向条痕	7.5YRにぶ褐5／3	A中B僅C多	
133	胴部	縦位の条痕→ナデ→沈線	斜位の丁寧なナデ	10YR黒褐2／2	A中B少C中	
134	口縁部～	斜位の条痕→横位のナデ→沈線	斜位の条痕→ナデ	7.5YRにぶ橙6／4	A少B僅C中E少	
135	口縁部	横条痕→突帯→ナデ→貝殻刺突	横位のナデ	2.5Y暗灰黄4／2	A中C少	内面に煤付着
136	口縁部	横位のナデ→沈線	横位の条痕→横位のナデ	7.5YR褐4／3	A中B僅C中	
137	口縁部	横位の粗いナデ→沈線	横位のナデ	2.5Y暗灰黄4／2	A中C僅E少	
138	胴部	横位の二枚貝条痕→沈線→ナデ	横二枚貝条痕→横位のナデ	7.5YRにぶ褐5／4	A少B少C中	
139	口縁部	沈線文	横位のナデ	2.5Y暗灰黄4／2	A中B僅C多	内面に煤付着
140	口縁部	丁寧なナデ→沈線	横位のナデ	10YR黒褐3／1	A中C多F中	
141	胴部	縦位の条痕→沈線	横位のナデ	7.5YRにぶ褐5／4	A中C少E少G僅	
142	胴部	ナデ→撚糸	不明	10YRにぶ黄橙6／3	A少B僅C少E僅	
143	胴部	沈線文	横位の条痕→ナデ	7.5YRにぶ褐5／4	C中D少F多	
144	口縁部～	横ナデ→鋭利沈線→突帯→刻目	入念なナデ	10YRにぶ黄橙7／4	A中B少C少	
145	口縁部	条痕文	横位の条痕	7.5YRにぶ橙6／4	A少C少E僅	
146	口縁部	条痕文	横位の条痕	7.5YR褐4／4	A少C中E少	
147	胴部	縦位の条痕→突帯→刻目→ナデ	ナデ	10YR灰褐5／2	A少B少C中E少	
148	口縁部～	斜方向条痕→ナデ	横位の条痕→ナデ	5YRにぶ赤褐5／3	A少B中C少	
149	口縁部～	斜方向条痕→ナデ	横位の条痕→ナデ	5YRにぶ赤褐5／3	A少B中C少	
150	口縁部	ナデ	横位のナデ	7.5YR橙6／6	A僅B少C中	
151	口縁部	横位の条痕→沈線	横位のケズリ	5YRにぶ赤褐4／9	A少C僅	
152	口縁部	横位のナデ→突帯貼付	横位のナデ→突帯貼付	10YR黒褐3／2	A少B中C中	
153	口縁部	なし	横位の条痕→横位のナデ	10YR黒褐3／2	A少B少C少	内面に煤付着
154	口縁部	横位の二枚貝条痕→ナデ	横位の二枚貝条痕	7.5YRにぶ褐6／3	A中B僅C少	
155	口縁部	縦位の条痕	ナデ→横位の条痕	7.5YRにぶ褐6／3	A少B僅C中	外面に煤付着
156	口縁部～	横位の条痕	横位の二枚貝条痕	7.5YRにぶ褐6／3	A少B僅C中	外面に煤付着
157	底部	縄文→ナデ	粗いナデ	2.5Y淡黄8／3	A僅	
158	底部	横位の条痕→刻目→ナデ	横位の条痕	5YRにぶ橙6／4	A中C中	内面に朱付着
159	底部	ナデ→押引	横位の条痕→ナデ	7.5YRにぶ橙6／4	A少B僅C中E少	底部に白色付着
160	底部	縦位のナデ	縦位の条痕→磨き	10YRにぶ黄橙7／2	A多B少C少	底部に白色付着
161	底部	ナデ	縦位の条痕→ナデ	10YRにぶ黄橙6／3	A少B僅C少	
162	口縁部	横位のナデ→沈線	横位のナデ	10YRにぶ黄橙7／4	A少B中C少E中	
163	胴部	横位のナデ→沈線	横位の入念なナデ	5YR明赤褐5／8	A中B僅C少	
164	胴部	横位のナデ→沈線	横位の入念なナデ	5YR明赤褐5／8	A少C中	
165	口縁部	横位の条痕→横位のナデ→刺突	横位の条痕→横位のナデ	7.5YR明褐5／6	A中B少C中	
166	口縁部	横二枚貝条→沈線→ナデ→刺突	横位の条痕→横位のナデ	5YR橙6／6	A少C少E僅	
167	口縁部	横位のナデ→貝殻腹縁刺突	横位の条痕→横位粗いナデ	7.5YRにぶ橙6／4	A少C少E中	
168	口縁部	横条痕→横ナデ→貝殻腹縁刺突	横条痕→横位のナデ	5YR橙6／6	A少B少C中	
169	頸～胴部	横入念なナデ→巻貝疑似縄文	丁寧な磨き	5YR赤褐4／6	A僅C少	
170	口縁部～	横位入念なナデ→貝殻腹縁刺突	磨き	5YR赤褐4／6	A僅C少	

No.	器　種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石　材	備　考	No.	器　種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石　材	備　考
171	石鏃	2,5	1,5	0,4	チャート		203	石匙	2,7	3,9	0,8	チャート	
172	石鏃	1,6	1,4	0,4	チャート		204	石匙	6,8	2,0	1,0	流紋岩	
173	石鏃	1,7	1,1	0,3	頁岩		205	石斧	9,0	4,6	1,6	硬質頁岩	
174	石鏃	1,5	1,3	0,4	流紋岩		206	石斧	8,3	3,1	1,8	頁岩	
175	石鏃	1,6	1,1	0,3	流紋岩		207	石斧	7,5	3,0	1,5	頁岩	
176	石鏃	1,4	1,2	0,4	頁岩		208	石斧	6,0	6,0	3,0	火成岩系	
177	石鏃	1,6	1,1	0,4	黒耀石		209	二次加工剥片	1,9	2,1	0,6	流紋岩	刃部のみ
178	石鏃	1,8	1,3	0,5	チャート		210	二次加工剥片	2,3	1,7	0,6	流紋岩	
179	石鏃	1,2	1,5	0,3	安山岩質		211	二次加工剥片	1,9	2,5	0,4	チャート	
180	石鏃	2,7	1,7	0,3	硬質頁岩	尖･片脚部欠	212	二次加工剥片	2,9	1,1	0,4	チャート	石鏃再加工
181	石鏃	1,5	1,2	0,4	黒耀石	片脚部欠損	213	二次加工剥片	1,4	1,9	0,5	安山岩質	
182	石鏃	1,5	1,2	0,4	黒耀石	片脚部欠損	214	二次加工剥片	2,0	1,3	0,7	黒耀石	
183	石鏃	1,9	1,4	0,6	黒耀石	片脚部欠損	215	二次加工剥片	3,1	1,9	1,2	蛋白石	
184	石鏃	1,4	1,4	0,5	黒耀石	尖端部欠損	216	二次加工剥片	2,0	1,7	0,8	チャート	
185	石鏃	1,4	0,9	0,4	黒耀石	尖･両端部欠	217	二次加工剥片	2,4	1,9	0,8	流紋岩	
186	石鏃	2,0	1,5	0,5	チャート	未製品	218	二次加工剥片	3,2	2,2	0,9	チャート	
187	石鏃	2,2	1,5	0,5	硬質頁岩	未製品	219	二次加工剥片	2,9	2,1	1,1	蛋白石	
188	石鏃	2,4	2,1	0,5	安山岩質	未製品	220	二次加工剥片	5,5	4,0	1,5	流紋岩	
189	石鏃	1,6	1,0	0,7	黒耀石	未製品	221	二次加工剥片	6,6	3,8	1,9	蛋白石	
190	石鏃	1,9	1,7	0,8	黒耀石	未製品	222	使用痕剥片	6,2	4,6	1,3	硬質頁岩	
191	石鏃	1,9	1,4	0,5	黒耀石	未製品	223	石核	3,6	4,0	4,3	流紋岩	
192	石鏃	2,9	2,1	0,9	流紋岩	未製品	224	石核	4,8	3,5	2,6	黒耀石	
193	石鏃	1,8	1,6	0,9	黒耀石	未製品	225	石核	8,1	9,8	6,5	流紋岩	
194	石鏃	2,1	2,2	0,6	流紋岩	未製品	226	石核	5,2	6,6	6,1	硬質頁岩	
195	スクレイパー	6,7	2,7	0,9	流紋岩		227	石核	8,1	5,5	4,2	火山岩系	
196	スクレイパー	5,0	4,0	1,4	流紋岩		228	磨石	4,8	7,6	4,5	火山岩系	
197	スクレイパー	4,3	3,3	1,3	蛋白石		229	磨石	4,5	4,4	4,2	砂岩	
198	スクレイパー	4,3	5,2	1,2	流紋岩		230	磨石	5,0	3,8	3,3	砂岩	
199	スクレイパー	5,4	3,8	1,1	流紋岩		231	磨石	5,0	4,0	3,6	砂岩	
200	スクレイパー	5,4	3,5	1,3	安山岩質		232	磨石	4,2	3,0	2,7	砂岩	
201	石匙	2,6	3,1	0,5	チャート		233	石皿	12	11	3,5	砂岩	
202	石匙	6,3	6,3	1,4	流紋岩		234	石皿	11	6,5	3,5	砂岩	

第Ⅲ章　地質とテフラ

第1節　はじめに

田野町一帯のローム層（赤土）や黒ボク土などの火山灰土中には、霧島火山や桜島火山などを起源とする多くのテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が認められる。これらのテフラの多くについては、すでに岩石記載的特徴が把握されており、また噴出年代についても放射性年代測定法や考古遺物との層位関係から推定されている。これらのテフラを年代指標として利用することにより、遺跡の遺物包含層の堆積年代や遺構の構築年代を推定することができる。「火山灰編年学（テフロクロノロジー）」と呼ばれるこの方法は、テフラの多い南九州地方において最も有効な編年学的方法として活用できる。

さて河岸段丘面上に位置する本野遺跡の発掘調査では、縄文時代前期～中期を中心とする多くの遺物が検出された。そこで野外地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を合わせて行い、すでに噴出年代が明らかにされている示標テフラの層位について記載を行うことにした。

第2節　地　質

(1)　Dグリッド東壁

遺物が多く検出された本地点の土層を図1に示す。ここでは下位より褐色土（層厚10cm以上）、黒褐色土（層厚69cm）、成層したテフラ層（層厚29cm）、黒褐色土（層厚24cm）、黄色軽石層（層厚7cm）、黄色軽石混じり褐色土（層厚7cm）、黒褐色土（層厚12cm）、黄色軽石に富む褐色土（層厚3cm）、黒褐色土（層厚14cm）、白色軽石に富む黒褐色土（層厚11cm）、黒色土（層厚19cm）の連続が認められる。

成層したテフラ層は、下部の火山豆石を含む黄色軽石層（層厚5cm）と上部の橙色細粒火山灰層（層厚24cm）からなる。下部に含まれる軽石の最大径は4mm、火山豆石の最大径は3mmである。このテフラは、その層相から約6,300年前に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，町田・新井，1978）に同定される。

(2)　Cグリッド北壁

Dグリッドより一段高い段丘面に位置する本地点では、礫層の上位に下位より黄褐色土（層厚14cm）、黒褐色土（層厚24cm）、粒径のよく揃った黄色軽石層（層厚15cm）、葉理が発達した黄橙色砂層（層厚39cm）、暗褐色土（層厚23cm）、黄褐色土（層厚32cm）、暗褐色土（層厚38cm）、黄色軽石および白色粗粒火山灰混じり暗褐色土（層厚12cm）、黒褐色土（層厚9cm）、成層したテフラ層（層厚28cm）の連続が認められる（図2）。最上位の成層したテフラ層は、Dグリッド同様K-Ahに同定される。

第3節　テフラ検出分析

(1)　分析の目的と分析試料

K-Ah以外に認められた軽石層をはじめとする合計9点のテフラ試料についてテフラ検出分析を行い、テフラ粒子とくに軽石の特徴から示標テフラとの同定を試みた。分析試料の層位は図1および図2に示した。

(2) 分析方法

テフラ検出分析は、次の手順で行われた。

1）試料10ｇを秤量。

2）超音波洗浄装置により、泥分を除去。

3）恒温乾燥器により80℃で恒温乾燥。

4）実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

(3) 分析結果

1）Ｄグリッド東壁

テフラ検出分析の結果を、表５に示す。K-Ahとその上位の黄色軽石層との間の層準（試料番号４，６，８）には、スポンジ状に発泡した細粒の白色軽石がごく少量認められるものの、顕著なテフラの降灰層準を示すようなものは認められなかった。黄色軽石層（試料番号３）の中には、スポンジ状によく発泡した最大径5.2㎜の黄色軽石がとくに多く含まれている。斑晶鉱物に斜方輝石や単斜輝石が認められた。その上位の軽石に富む褐色土（試料番号２）の中にも、スポンジ状によく発泡した最大径1.4㎜の細粒の黄白色軽石が含まれているがその量は少ない。また斑晶鉱物に斜方輝石や単斜輝石が認められた。軽石の岩相から、この軽石は下位の黄色軽石層の軽石に由来すると考えられる。最上位の白色軽石に富む黒色土（試料番号１）には、最大径2.9㎜のスポンジ状によく発泡した軽石が多く含まれれている。軽石の中には繊維束状によく発泡し、光沢のある軽石も少量認められる。軽石の斑晶鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が認められた。

2）Ｃグリッド北壁

Ｃグリッドで認められた段丘礫層の黄褐色土（試料番号３）の中から、軽石は検出されなかった。ごく少量の透明の平板状のいわゆるバブル型ガラスが含まれている。その上位の黄色軽石層（試料番号２）の中には、最大径6.1㎜の黄色軽石が多く含まれている。軽石は繊維束状またはスポンジ状によく発泡している。ただし非常に淘汰が良いことから、水流による二次堆積層の可能性も完全に否定することはできない。K-Ahの下位にある黄色軽石および白色粗粒火山灰を多く含む暗褐色土（試料番号１）には、あまり発泡の良くない最大径1.3㎜の白色軽石が含まれている。

第４節　屈折率測定

(1) 測定試料と方法

明らかに降下テフラ層と判断されるＤグリッド試料番号３およびテフラ検出分析により検出されたテフラ試料（Ｄグリッド試料番号１）、さらにＣグリッド試料番号１の３試料について位相差法（新井，1972）により屈折率の測定を試みた。

(2) 結　果

測定結果を、表２に示す。Ｄグリッド試料番号１の火山ガラスの屈折率（n）は1.510-1.514、斜方輝石の屈折率（γ）は1.707-1.712である。このテフラは、層位や軽石の特徴さらに火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率などから、桜島火山から1471（文明３）年に噴出した桜島－文明軽石（Sz-3，町田・新井，1992）に同定される。Ｄグリッド試料番号３の火山ガラスの屈折率（n）は1.508-1.511、斜方輝石の屈折率（γ）は1.723-1.728である。このテフラは、

層位や軽石の特徴さらに火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率などから、霧島火山御池火口から約3,000年前に噴出した霧島－御池軽石（Kr-M, 町田・新井, 1992）に同定される。

Cグリッド試料番号1に含まれる斜方輝石の屈折率（γ）は、1.708-1.715（モードは1.709-1.714）であった。

第5節　小　結

野外地質調査およびテフラ検出分析さらに屈折率測定を行った結果、Dグリッドにおいて下位より鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約6,300年前）、霧島－御池軽石（Kr-M、約3,000年前）、桜島－文明軽石（Sz-3、1471年）の3層のテフラが検出された。本野遺跡において縄文時代前期から中期にかけての遺物の包含層は、鬼界アカホヤ火山灰の上位で霧島－御池軽石の下位にある。

Cグリッドにおいて鬼界アカホヤ火山灰の下位に認められた黄色軽石と白色粗粒火山灰の起源については、現在までのところ不明である。霧島火山東麓地域では、従来鬼界アカホヤ火山灰の下位に浦牟田スコリア（UMS, 井ノ上, 1988）とその下位の霧島－瀬田尾軽石（STP, 井ノ上, 1988）の存在が知られている。これらのうち下位にある霧島－瀬田尾軽石の直下の腐植層からは、9,130±830y.B.P.の14C年代が得られている（井村・古賀, 1992）。しかし現在までのところ、Cグリッド試料番号1に含まれる斜方輝石の屈折率に一致するテフラは知られていない。またCグリッド試料番号2の軽石の起源についても不明である。

田野町の地形の生い立ちや遺跡の立地を考える上でも、今後さらに詳細なテフラの層序学的調査と岩石記載的研究が望まれる。　（株式会社古環境研究所）

参考文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254-269.

井村隆介・古賀政行（1992）霧島火山および入戸火砕流の14C年代．火山，第2集，37，p.99-102.

井ノ上幸造（1988）霧島火山群高千穂複合火山の噴火活動史．岩鉱，83，p.26-41.

町田　洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山　灰．第四紀研究，17，p.143-163.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

表6　本野遺跡のテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色	軽石の最大径
Dグリッド	1	＋＋＋	白	2.9
	2	＋	白	1.4
	3	＋＋＋＋	黄白	5.2
	4	＋	白	1.3
	6	＋	白	1.2
	8	－	－	－
Cグリッド	1	＋＋	白	1.3
	2	＋＋＋	黄白	6.1
	3	－	－	－

＋＋＋＋：とくに多い，＋＋＋：多い，＋＋：中程度，
＋：少ない，－：認められない．最大径の単位は，mm.

表7　本野遺跡の屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス（n）	斜方輝石（γ）
D	1	1.510-1.514	1.707-1.712
D	2	1.508-1.511	1.723-1.728
C	1	－	1.708-1.715（1.709-1.714）

（）はモード.

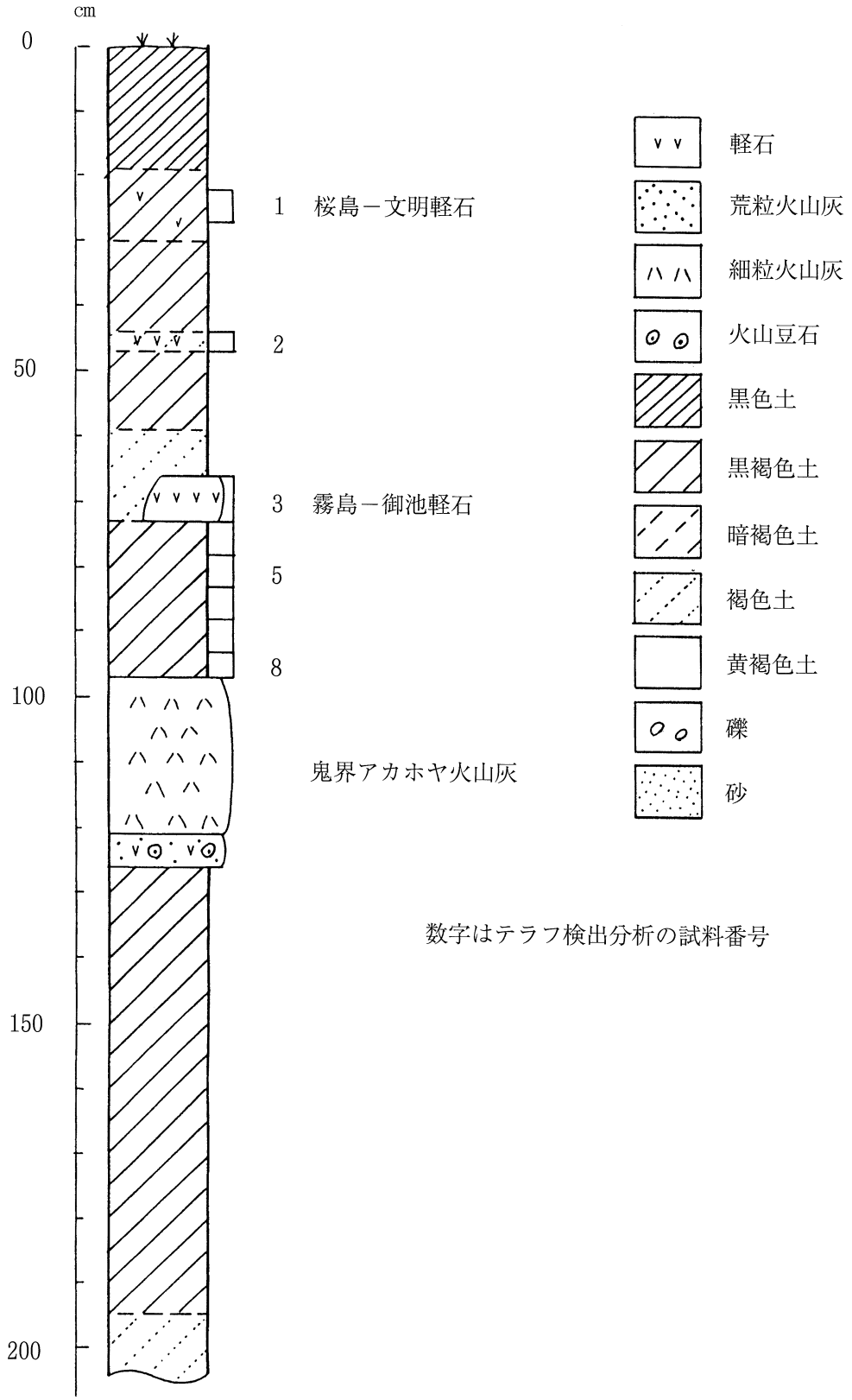


図１　Ｄ区東壁の土層柱状図

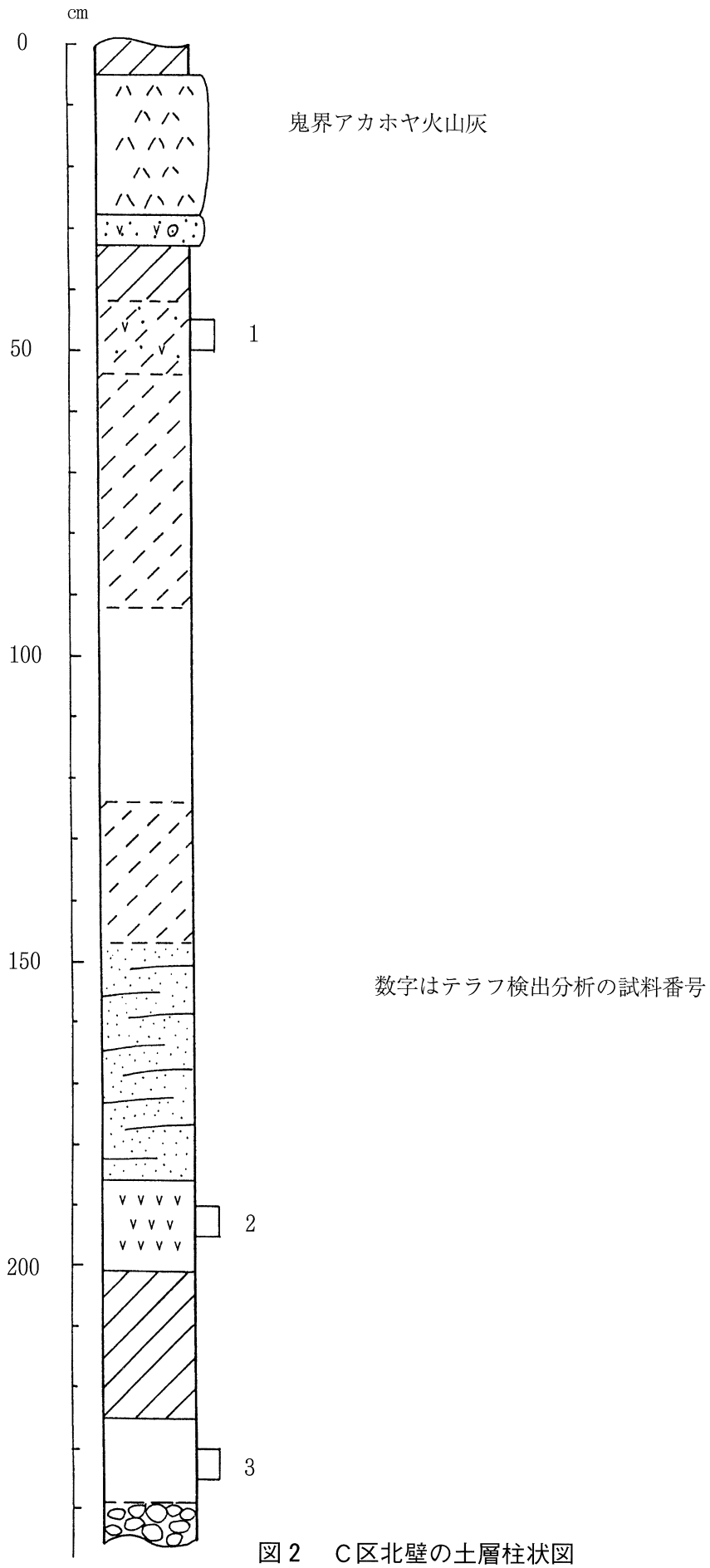


図 2　C区北壁の土層柱状図

第Ⅳ章　植物珪酸体分析

第1節　はじめに

植物珪酸体は、植物体内で形成されたガラス質の細胞であり、植物が枯れた後も微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定、および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987a）。

本章では、植物珪酸体分析を用いて、本野遺跡におけるイネ科栽培植物の検討、および遺跡周辺の古植生・古環境の推定を試みた。

第2節　試　料

試料は、Dグリッド東壁地点の現表土からおよそ2.0m深までの層準について、およそ10～20㎝間隔で採取された。採取層準の詳細については第Ⅰ章を参照されたい。

第3節　分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）」をもとに、次の手順で行った。

(1)　試料の絶乾（105℃・24時間）

(2)　試料約1ｇを秤量，ガラスビーズ添加（直径約40μｍ，約0.02ｇ）
　※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量

(3)　電気炉灰化法による脱有機物処理

(4)　超音波による分散（300W・42KHz・10分間）

(5)　沈底法による微粒子（20μｍ以下）除去，乾燥

(6)　封入剤（オイキット）中に分散，プレパラート作成

(7)　検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10-5ｇ）をかけて、単位面積で層厚１㎝あたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキの値を用いた。その値はそれぞれ2.94（種実重は1.03）、12.2、6.31、1.24である（杉山・藤原，1987）。タケ亜科については数種の平均値を用いて葉身重を算出した。ネザサ節の値は0.24、クマザサ属は0.22、メダケ節は0.08、マダケ属は0.23である（杉山，1987b）。

第４節　分析結果および考察

(1)　イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネをはじめ、オオムギ族（ムギ類が含まれる）、キビ族（ヒエやアワ、キビなどが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、トウモロコシ属、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）などがある。本遺跡の試料からは、このうちのイネおよびキビ族が検出された。

イネは、現耕作土の試料１および桜島－文明軽石（1471年）混層の試料３から検出された。密度は前者で2,100個／ｇ、後者で1,400個／ｇといずれも低い値であるが、これらの層準の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

キビ族は、現耕作土（試料１）および桜島－文明軽石直下層（試料４）で検出された。密度は1,000個／ｇ前後と低い値である。同族にはヒエやアワ、キビなどの栽培種が含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態からこれらの栽培種とイヌビエやエノコログサなどの野・雑草とを識別するのは困難である（杉山ほか，1988）。このことから、各層準でヒエやアワが栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌビエなどの野・雑草に由来するものである可能性も否定できない。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、不明としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

(2)　古植生および古環境の推定

Ｄグリッド東壁地点の現表土からおよそ2.0m深までの土層について分析を行った。以下に、その結果とそこから推定される堆積当時の植生と古環境について述べる。

最下部の褐色土（試料17）では、タケ亜科B1タイプ（クマザサ属など）が約２万個／ｇと多量に検出された。また、ウシクサ族（ススキ属やチガヤ属など）やイネ科Ｂタイプ（ウシクサ族型）も見られた。黒（暗）褐色土の中位（試料15）でもこれとほぼ同様の結果であるが、鬼界アカホヤ火山灰（約6,300年前）の直下層（試料13）ではタケ亜科B1タイプ（クマザサ属など）は減少し、かわってウシクサ族（ススキ属やチガヤ属など）やタケ亜科A1aタイプ（ネザサ節など）の増加傾向が認められた。

鬼界アカホヤ火山灰の直上層（試料11）では、タケ亜科A1aタイプ（ネザサ節など）が大幅に増加しており、密度は約９万個／ｇにも達している。また、ウシクサ族（ススキ属やチガヤ属など）やイネ科Ｂタイプ（ウシクサ族型）なども検出され、植物珪酸体総数も大幅に増加している。植物体量の推定値ではタケ亜科A1aタイプ（ネザサ節など）が圧倒的に卓越しており、ウシクサ族（ススキ属やチガヤ属など）がこれに次いで多くなっている（表２）。このようなタケ亜科A1aタイプ（ネザサ節など）の卓越は、その後も現表土に至るまでおおむね継続されている。

霧島－御池軽石（約3,000年前）の直上層（試料８）ではブナ科のシイ属などの照葉樹起源の植物珪酸体が出現しており、現表土まで継続して検出されている。また、桜島－文明軽石（1471年）直下層（試料４）では上述のようにキビ族が出現し、桜島－文明軽石混層（試料３）ではイネが出現している。現表土（試料１）ではシバ属やタケ亜科B2タイプ（メダケ節など）、同A2タイプ（マダケ属など）も検出された。

以上の結果から、本遺跡における堆積当時の植生と環境について推定すると次のようである。

最下部の褐色土から黒（暗）褐色土の中位にかけての堆積当時は、クマザサ属を主体としススキ属やチガヤ属なども見られるイネ科植生が継続されたものと推定される。タケ亜科植物のうち、A1aタイプ（ネザサ節など）とB1タイプ（クマザサ属など）は一般に相反する出現傾向を示し、前者は温暖の、後者は寒冷の指標となっている。ここでは、後者のクマザサ属が卓越していることから、当時は比較的寒冷な気候条件であったものと推定される。

鬼界アカホヤ火山灰（約6,300年前）直下層ではなんらかの原因でクマザサ属が減少し、かわってススキ属やチガヤ属を主体とし、ネザサ節なども見られるイネ科植生に移行したものと考えられる。ネザサ節はクマザサ属よりも比較的温暖なところに生育していることから、この頃に寒冷から温暖への気候変化があった可能性が考えられる。

その後、鬼界アカホヤ火山灰の堆積によって当時の植生は一時的に破壊されたと考えられるが、ネザサ節は比較的早い時期に再生して、圧倒的に卓越したものと推定される。このように、ネザサ節が繁茂するような状況は比較的最近まで継続されたものと推定される。　霧島－御池軽石（約3,000年前）の堆積以降は、遺跡周辺でシイ属などの照葉樹が見られるようになったものと推定される。このように、本遺跡では照葉樹は気候の温暖化よりもかなり遅れて出現しているが、今後の周辺の調査によって、台地上における照葉樹林の分布拡大の様相が明らかにされるものと期待される。

桜島－文明軽石（1471年）の堆積前後からは稲作が開始されたものと推定されるが、その栽培形態は遺跡の立地条件や植物珪酸体組成などから畑稲作（陸稲）であった可能性が考えられる。

タケ亜科植物のうち、マダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用なものが多く、道具や生活用具、食用などとしての利用価値が高いが、これらの植物が現れるのは比較的最近のことと考えられる。

参考文献

杉山真二．1987a．遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点．植生史研究，第2号：27-37

杉山真二．1987b．タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号：70-83.

杉山真二・藤原宏志．1987．川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析．赤山－古環境編－．川口市遺跡調査会報告，第10集，281-298.

杉山真二・松田隆二・藤原宏志．1988．機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追究のための基礎資料として－．考古学と自然科学，20:81-92.

藤原宏志．1976．プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9:15-29.

藤原宏志．1979．プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（0.sativa L）生産総量の推定－．考古学と自然科学，12:29-41.

（株式会社　古環境研究所）

表８　Ｄ区東壁地点の植物珪酸体分析結果

（単位：×100個／ｇ）

分　類　群	1	3	4	6	8	9	11	13	15	17
イネ科										
イネ	21	14								
キビ族（ヒエ属など）	14		7							
ヨシ属			7						7	
ウシクサ族（ススキ属など）	157	57	37	89	93	36	29	108	44	27
シバ属	7									
Ａタイプ（キビ族型）	41	7					14	14	30	
Ｂタイプ（ウシクサ族型）	2363	156	276	267	143	165	101	135	111	67
Ｃタイプ（ウシクサ族型－大型）	7	21				22			7	7
タケ亜科										
Ａ１ａタイプ（ネザサ節など）	527	616	425	801	365	711	882	41	7	
Ｂ１タイプ（クマザサ属など）	14	28	7	30	29	36	29	74	193	200
Ｂ２タイプ（メダケ節など）	14	7								
Ａ２タイプ（マダケ属など）	7									
未分類等	137	191	194	460	236	316	361	27	52	40
その他のイネ科										
表皮毛起源	27	35	15	22	14	7	7		30	13
棒状珪酸体（維管束細胞起源等）	369	276	276	393	136	201	130	223	156	280
茎部起源	7	7								
未分類等	745	595	716	809	694	876	687	574	496	527
樹木起源										
Ａタイプ（シイ属）	14	7	15	15	14					
Ｂタイプ（コナラ属－アカガシ亜属？）	14									
Ｃタイプ（イスノキ属）	7	7	15							
その他	27	21	7	30	7					
植物珪酸体総数	2387	2046	1998	2916	1733	2370	2241	1196	1133	1161

表9　D区東壁における主な分類群の推定生産量

（単位：kg／m²・cm）

分　類　群	1	3	4	6	8	9	11	13	15	17
イネ科										
イネ	0.60	0.42								
キビ族（ヒエ属など）	1.67		0.91							
ヨシ属			0.47						0.47	
ウシクサ族（ススキ属など）	1.95	0.70	0.46	1.10	1.15	0.45	0.63	1.34	0.55	0.33
タケ亜科										
Ａ１ａタイプ（ネザサ節など）	1.26	1.48	1.02	1.92	0.88	1.71	2.12	0.10	0.02	
Ｂ１タイプ（クマザサ属など）	0.03	0.06	0.02	0.07	0.06	0.08	0.06	0.16	0.42	0.44
Ｂ２タイプ（メダケ節など）	0.01	0.01								
Ａ２タイプ（マダケ属など）	0.02									

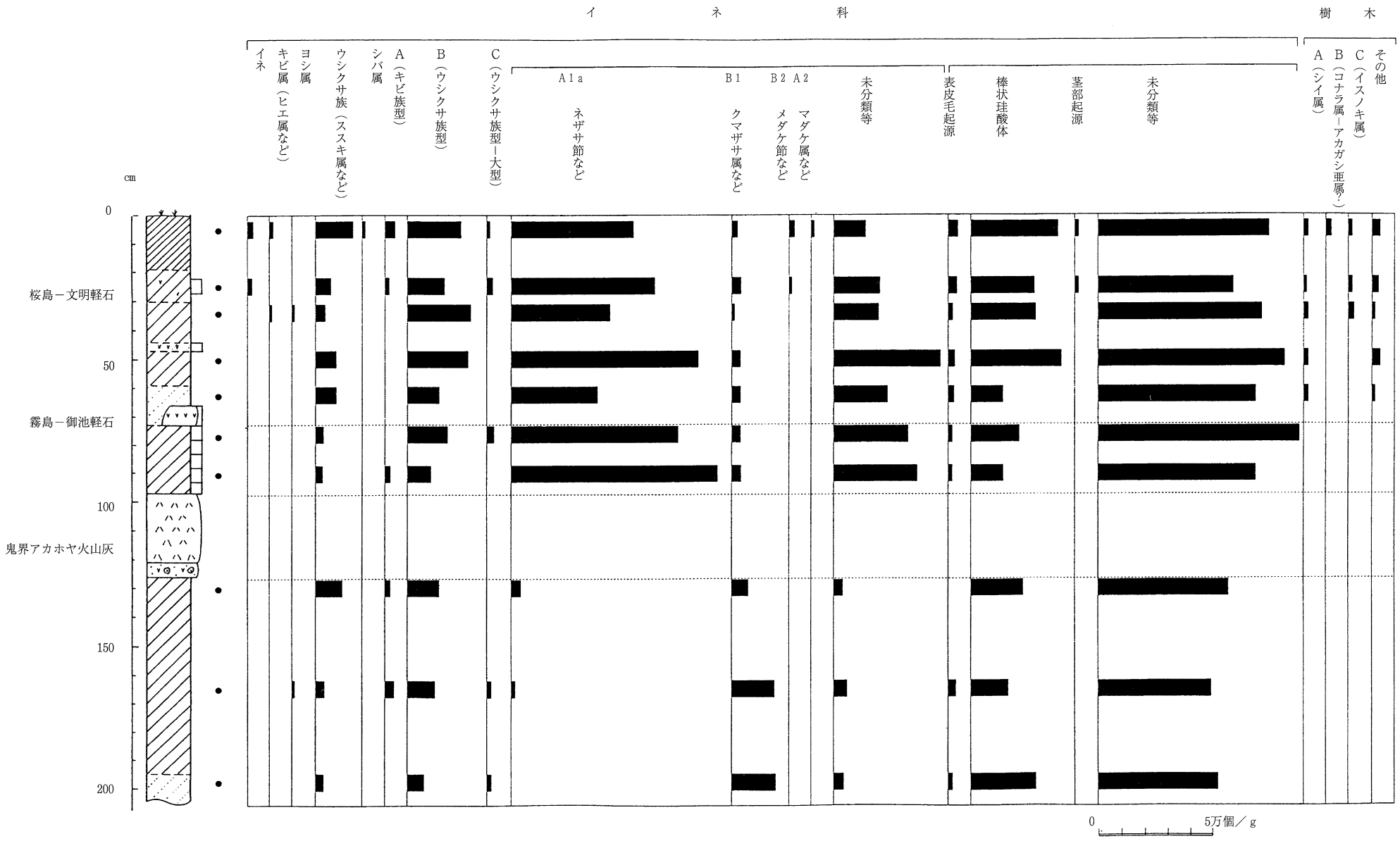


図３　Ｄ区東壁の植物珪酸体分析結果

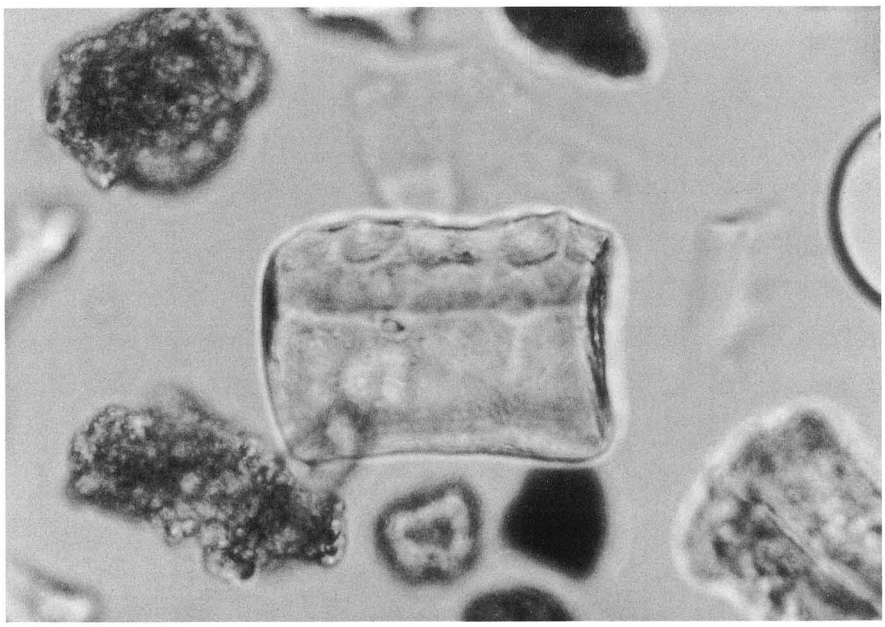
植物珪酸体の顕微鏡写真

（倍率はすべて400倍）

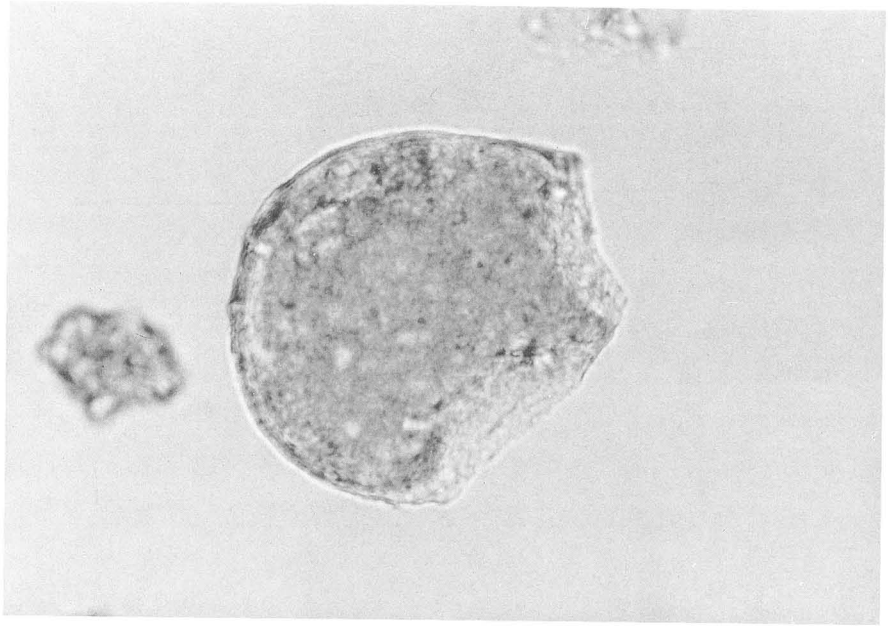
No.	分　類　群	試料名
1	イネ	1
2	イネ	1
3	キビ族（ヒエ属など）	1
4	ヨシ属	4
5	ウシクサ族（ススキ属など）	1
6	イネ科Ａタイプ（キビ族型）	13
7	イネ科Ｃタイプ（ウスクサ族型－大型）	3
8	タケ亜科Ａ１ａタイプ（ネザサ節など）	3
9	タケ亜科Ｂ１タイプ（クマザサ属）	17
10	タケ亜科Ｂ１タイプ（クマザサ属）	15
11	タケ亜科Ｂ２タイプ（メダケ属など）	3
12	タケ亜科Ａ２タイプ（マダケ属など）	1
13	表皮毛起源	4
14	棒状珪酸体	17
15	棒状珪酸体	15
16	樹木Ａタイプ（シイ属）	1
17	樹木Ａタイプ（シイ属）	6
18	樹木Ｂタイプ（コナラ属－アカガシ亜属？）	1
19	樹木Ｃタイプ（イスノキ属）	4
20	樹木（タブ？）	1
21	樹木	3

1

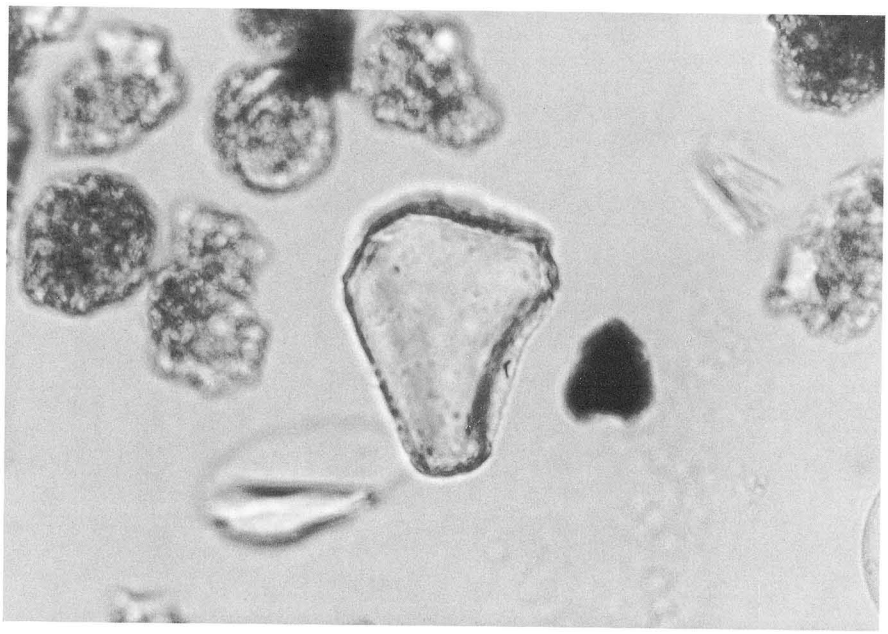
2



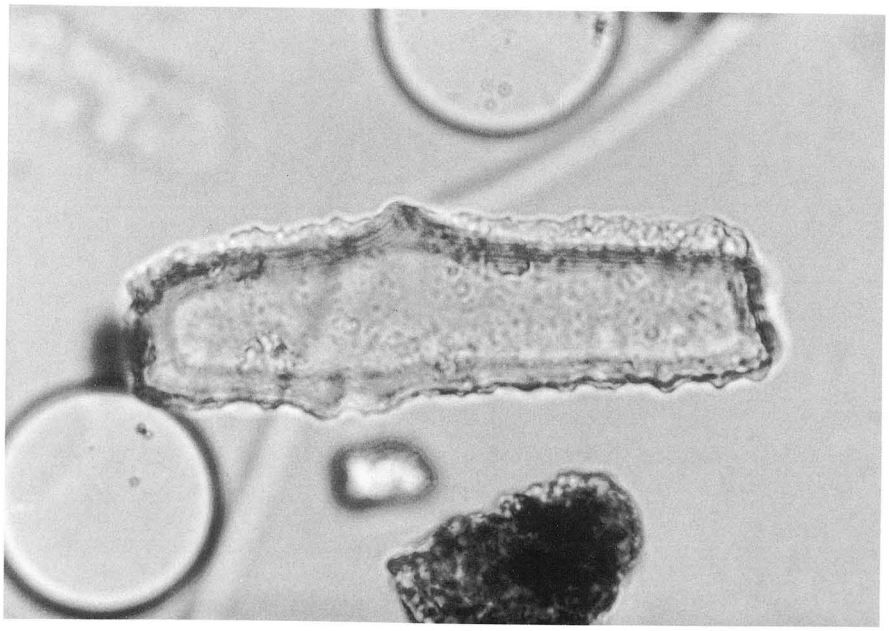
3



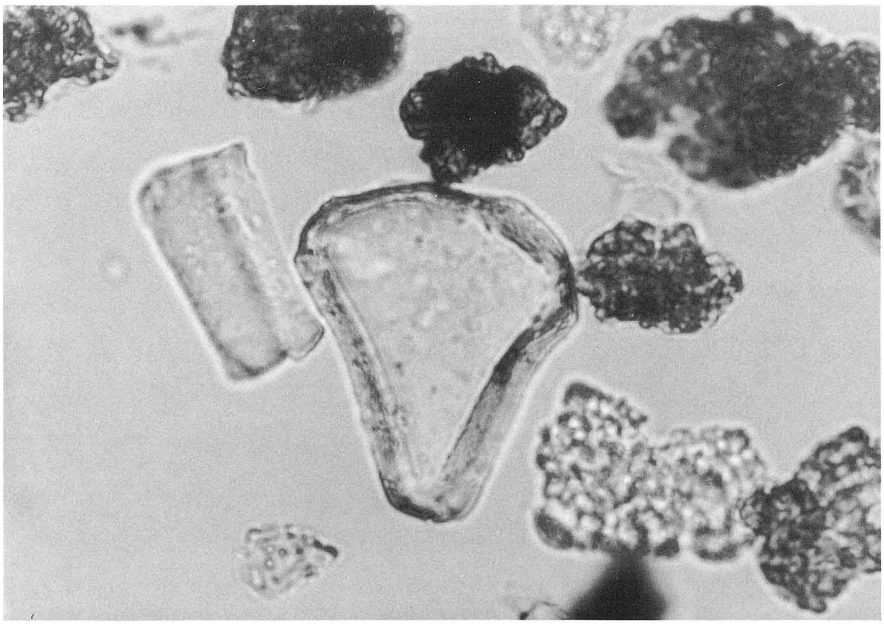
4



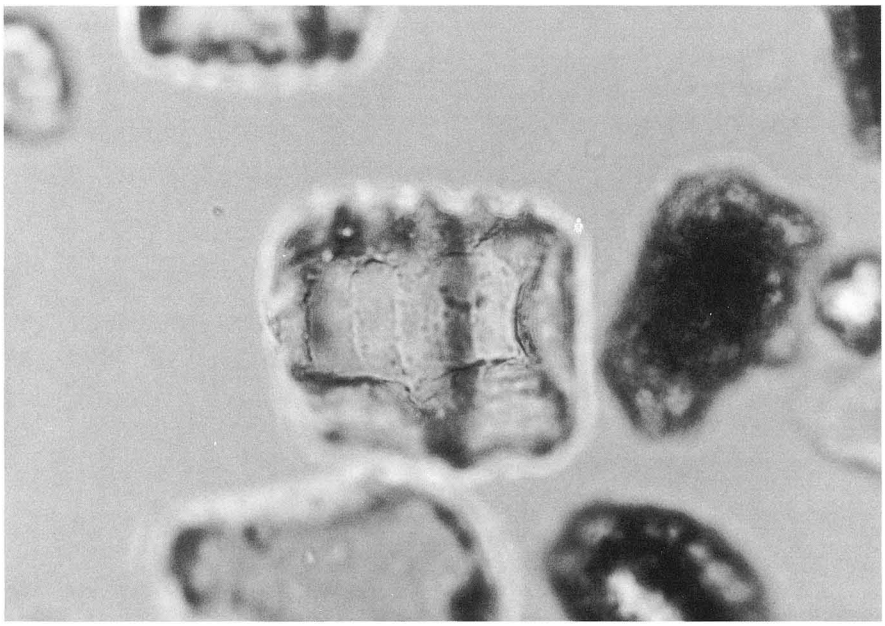
5



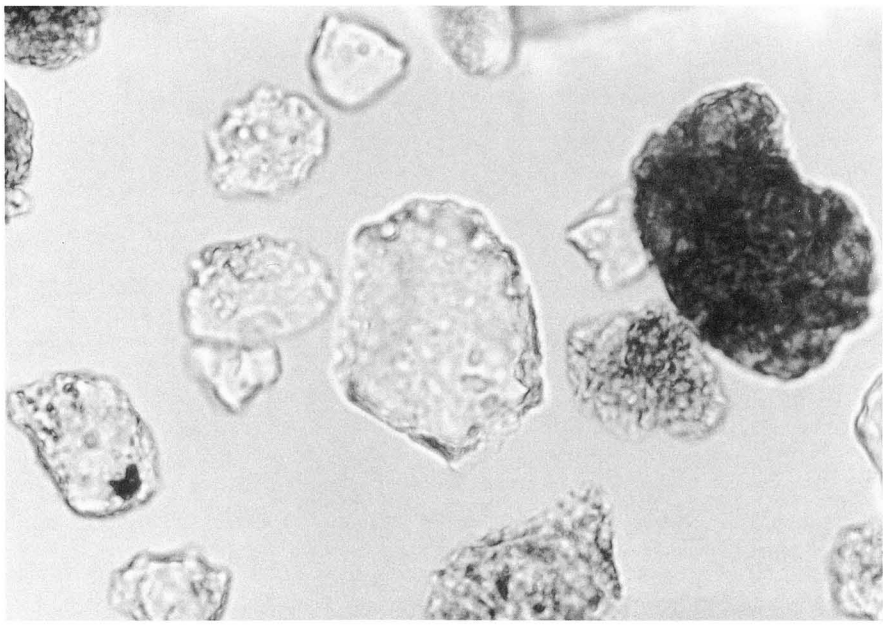
6



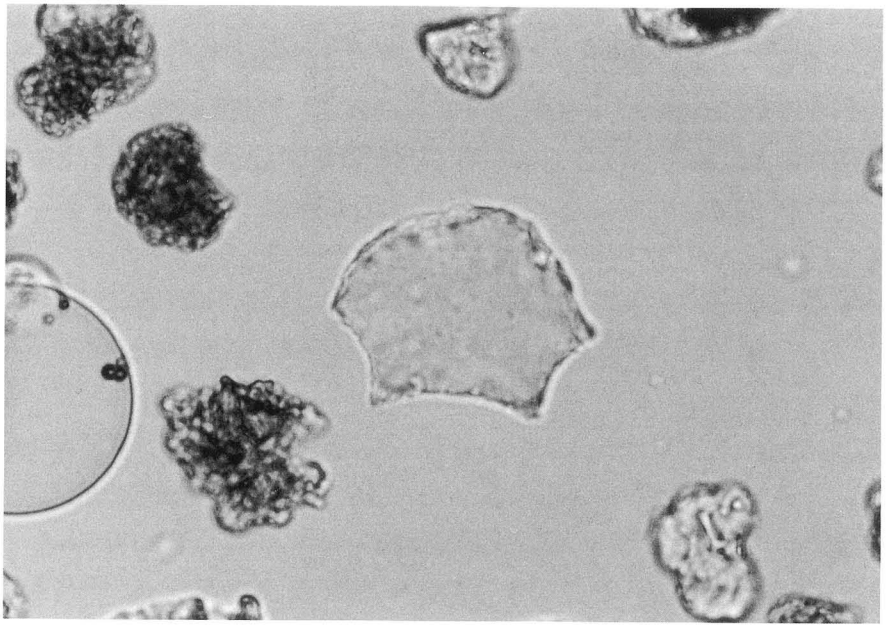
7



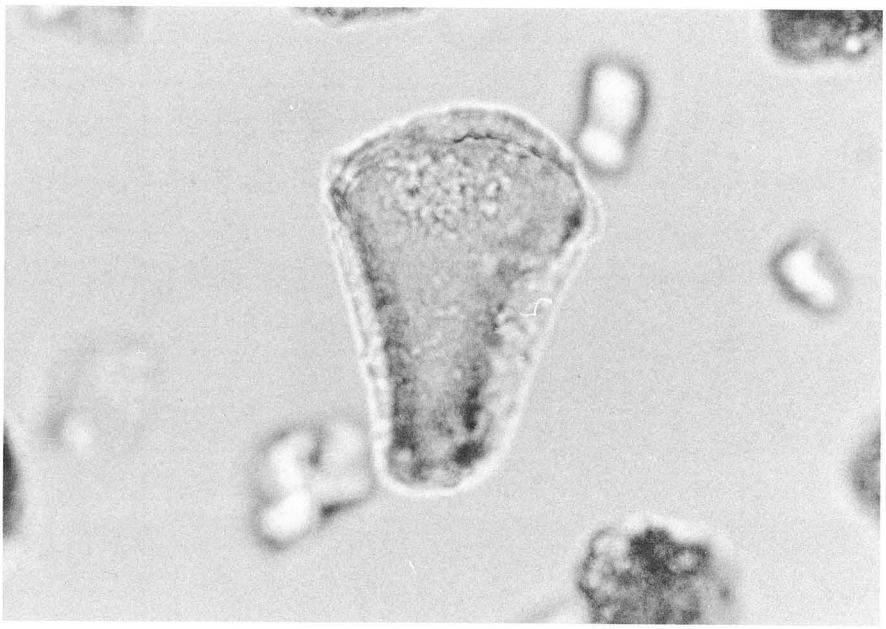
8



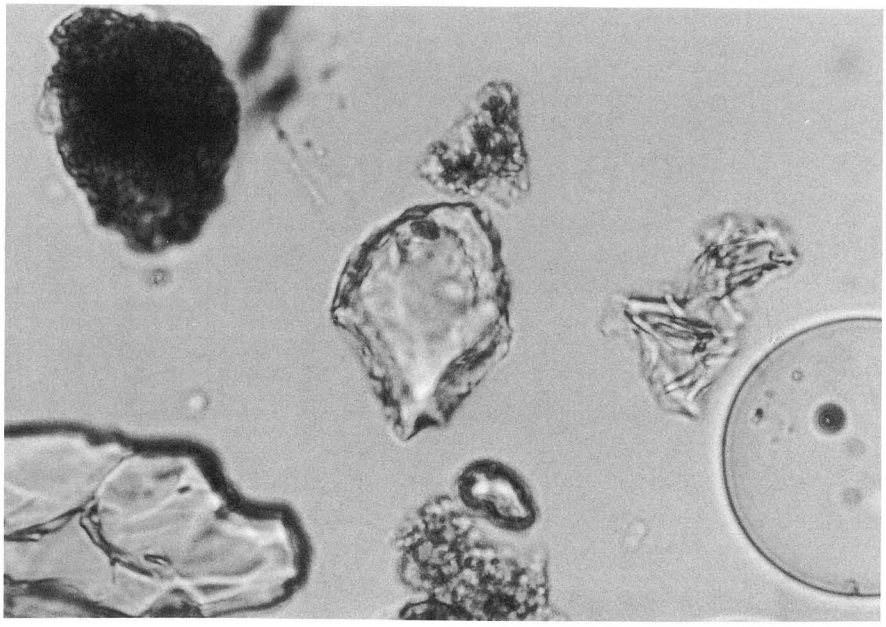
9



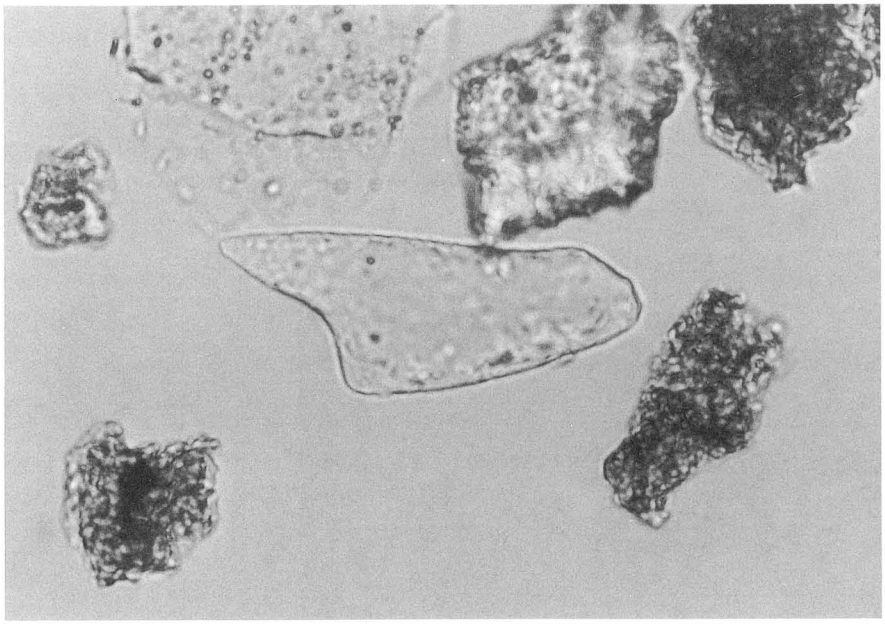
10



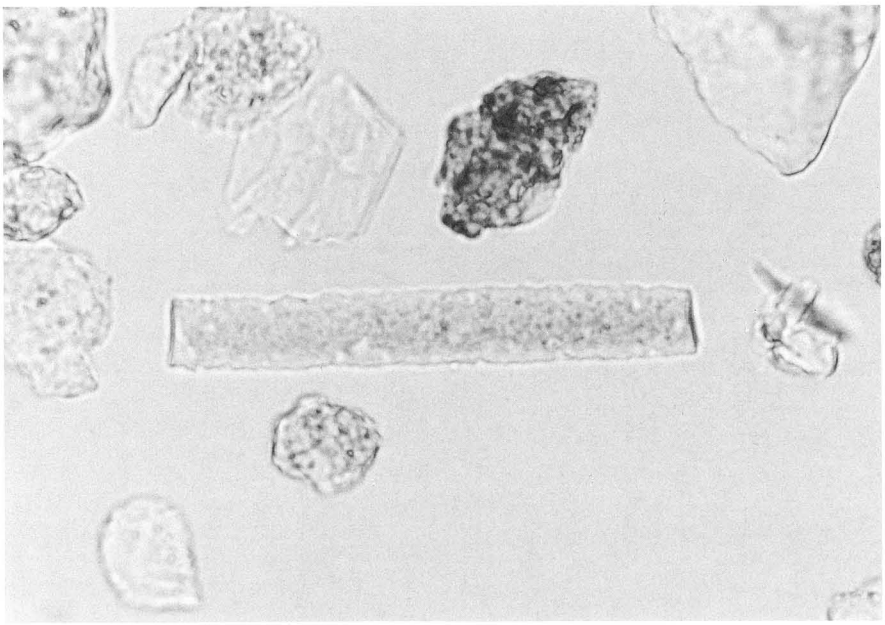
11



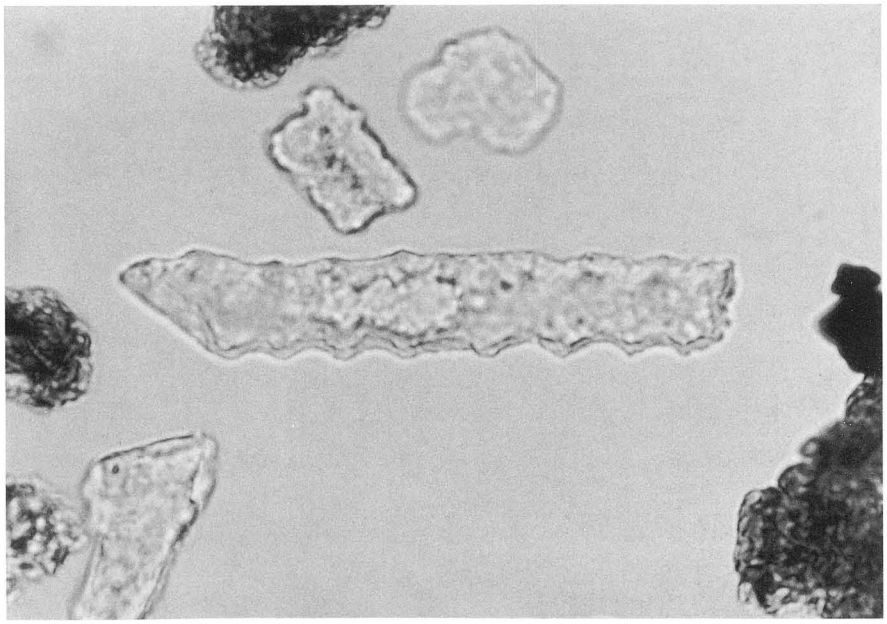
12



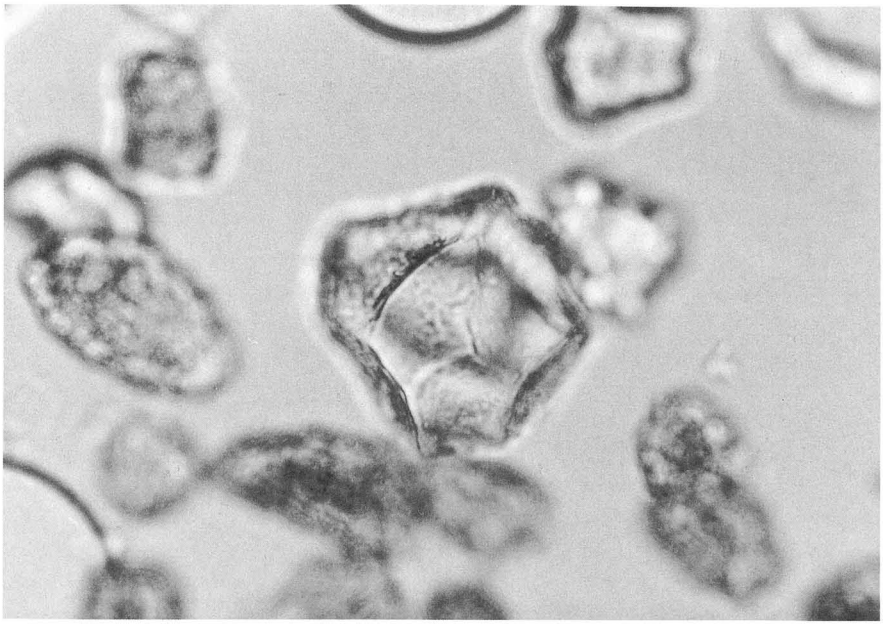
13



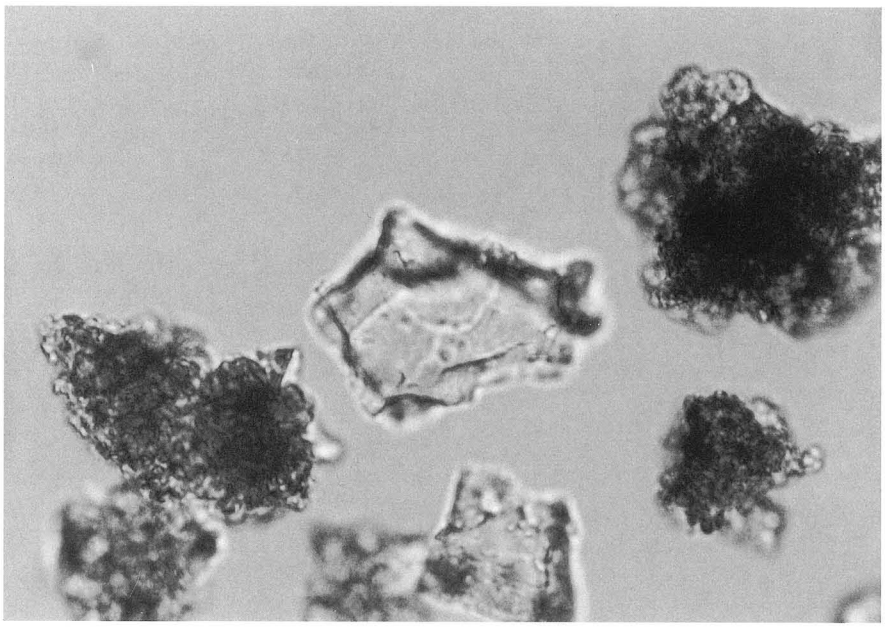
14



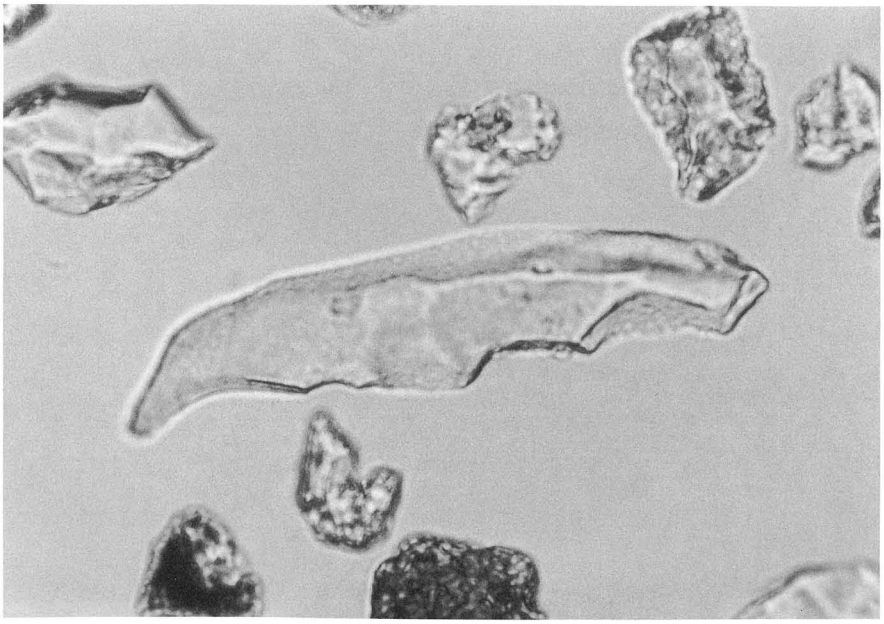
15



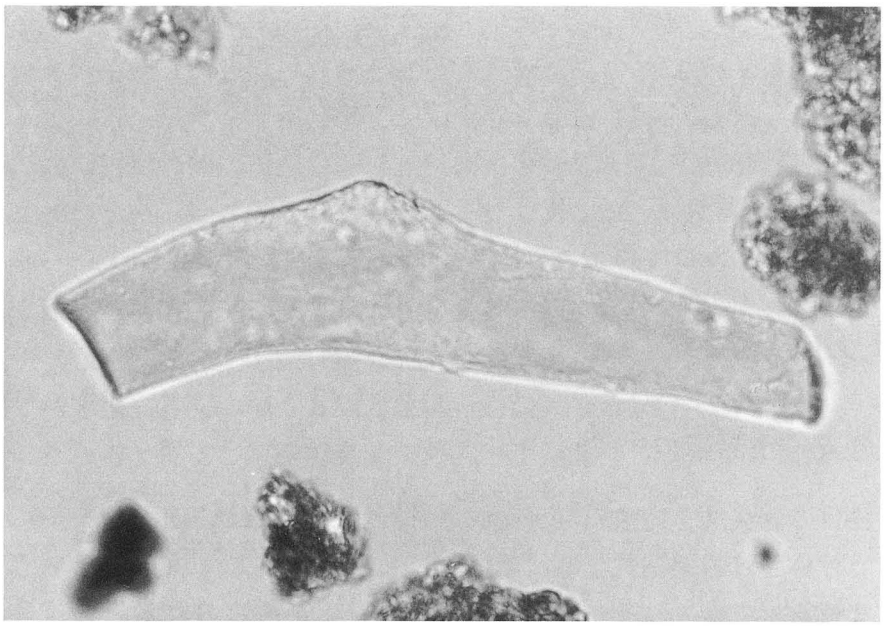
16



17

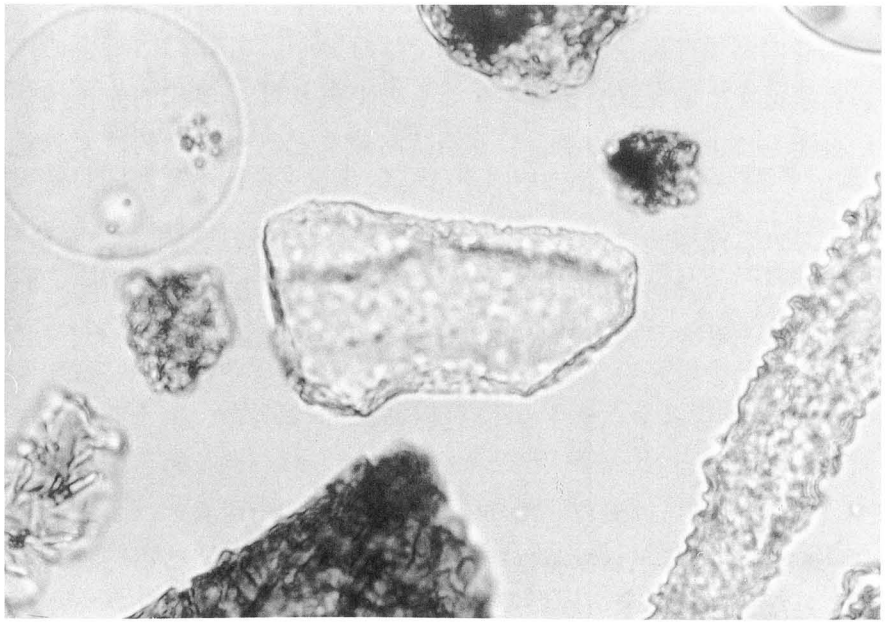


18



19

20



21

第Ⅴ章　まとめ

第1節　曽畑式土器について

タイプ別に分類した中ではもっとも多く出土している。器形は全て深鉢形を呈す。これらは沈線で区画を構成する（1～4・6～8）と、沈線を縦位に連続的に施文し、地文としている（5・9～11）に大きく二分できる。また、⑿は、器面に朱が付着しており特徴的である。

第2節　尾田式土器に類似する土器について

当遺跡からは、器面に浅目の刺突文を施す一群が確認された。これらは、南九州一円において広くみられ、西北九州で呼称される尾田式土器に類似する。相違点として押引きという本来の施文手法とは異なり刺突連点状であり、その刺突が粗大になる点が挙げられる。当遺跡からはこの土器の出土は少量であったが、(14・17）は南九州でこれまで広く確認されているものである。⒂は押引文になるという点で本来の尾田式土器に近いが、粗大であり、文様が深く施文される点で異なる。⒃は内面に刺突文が巡り、外面には深い条痕文が施文され、深浦式土器に含まれるという指摘もある。他に町内では、七野第4遺跡においても少量ながら確認されているほか、天神河内第1遺跡のD類もそれにあたり、その中でb類とされた一群は西北九州で尾田式と呼称される土器に酷似する。なお、当遺跡では、突帯貼付の行われる土器は確認されなかった。

第3節　刻目のない突帯文土器について

a・b類（18～27）は細目の突帯が数本単位で貼付けが行われている。類例として、鹿児島県志布志町野久尾遺跡で凸帯文土器とされたものがある。これも、内外面に貝殻条痕文を残すものである。しかし、当遺跡においてa類とb類に細分したように、二つに分類が可能である。主に横方向の条痕を地文とし、細かな突帯を変則的に貼付け、胴部の張りが強くなるものと、地文に縦方向の条痕文を多用し、口縁に平行する突帯を数条貼り付け、口縁が内湾ないしは内傾する器形のものである。両者の関係は現在のところ定かではないが、b類の口縁部の内湾が瀬戸内地域の縄文中期初頭に隆盛する船元式を祖形とするものであれば、年代的先後関係としてa類→b類という変遷が推測されよう。その場合、a類は前期末として編年的にずれ込むことも考えられる。

c類は中期初頭に位置付けられる深浦式に該当するものである。(40）は、胴部にロッキングが行われている。こうした土器は、天神河内第1遺跡でも確認されている。また、(41～43）は突帯が数条張り付けられるものであるが、内面の一部に円形の刺突が施文されるため、(40）と同様に深浦式に類するものとした。

第4節　船元式土器について

a・b類は九州内で見られる船元式土器にあたる。これは口縁がキャリパー状になり、縄文若しくは撚糸文の地文のうえに沈線や押引文、円形の刺突によって文様が描出される一群であ

る。その中で（44）は、口縁部に無文帯を形成し、口縁が外反するなど、他の類例とは若干異なっている。また、それは縄文が施文されない（45）についても言えることである。（46）は波状口縁や円形の刺突などから、鹿児島県金峰町上水流遺跡に類例を求めることができる。（48）の文様パターンは一般的な船元式のそれであるが、外反する口縁など、独自の特徴も見受けられる。

c類は全面に縄文を施文し、場合よっては突帯が貼付けられるものである。全体的に縄文は粒子が粗く、施文する際に深く施文される箇所と殆ど縄文が見られない箇所が混在し、同じ施文手法を用いるものでもb類とは明らかに異なる。

これらの土器は、町内では天神河内第1遺跡や二ツ山第3遺跡で少量ながら確認されたほか、近隣の清武町では辻遺跡などからも出土している。また、県内に目を転じると、北方町の笠下遺跡・笠下下原遺跡や、西郷村内野々遺跡など、県北部にも出土例があるが、主に県南部に分布の中心があるように思われる。これらの縄文系土器については、かつてはそのまま船元式として処理されてきたが、地域間の土器研究が進展する中で、瀬戸内地方の研究者から、九州地方で出土する縄文系の土器は、瀬戸内地方の船元式とは属性が異なるという指摘を受けている。瀬戸内で九州地方に酷似した特徴を備えた例が確認されない以上、こうした船元式土器の相違は、九州内における船元式土器の変化と考えるのが妥当であろう。以上の背景によって製作された九州的船元式土器がa類及びb類であると思われる。なおc類は、a・b類の影響によって成立したのであろうが、具体的な相関関係については結論を出すには至らなかった。今後の調査例に期待するものである。

第5節　春日式土器・大平式土器について

a類は施文部位が胴部にまで及ぶもので、東　和幸氏の設定する北手牧段階に該当する。東氏はこの土器を瀬戸内の船元Ⅲ式土器と併行関係で捉えている。また、矢野健一氏は船元Ⅲ式E類と同タイプと論じている。この段階の土器、中でも同一個体である（58～61）と（65）、後述する（130）は、器形のみならず、器壁、焼成、胎土共に他の春日式土器とは明らかに異なった属性を持つ。もしこれらの特徴が瀬戸内の船元式に起因するものであるとすれば、土器製作技術の広汎な地域においての交流を想定することができよう。しかし、このような特異な土器がある一方で、（62～64・66）といった、後の春日式土器に類似した属性を持つ土器もあり、春日式土器の成立を考察する上で興味深い。

b類は口縁部が内湾するもので、東氏の設定する前谷段階及び轟木ヶ迫段階に相当する。当遺跡の出土資料中、前谷段階に比定し得るものは、（67～70・74・75・79・80）であり、残りが轟木ヶ迫段階相当と考えられる。（72・76）には（75）と同様の沈線内刺突が行われているが、東氏も述べているようにこの手法は前谷段階から南宮島段階まで広く用いられているため、時期を決定し得るものではない。また、（81・82）の突帯のモチーフは（80）と同様であるが、突帯が太いうえに、前谷段階特有の突帯上を平たくする手法が見られないため、前谷段階よりも後出のものと考えた。

c類は太めの突帯が貼付けられたもので、東氏の設定する轟木ヶ迫段階及び南宮島段階に比定できる。このうち（87）は、轟木ヶ迫遺跡では出土していないものの、えびの市上田代遺跡において類似する資料が報告されている。（88・89）も口縁部の形態から轟木ヶ迫段階にあたる

と思われる。また、口縁端部に貼付けられる一群のうち（107・108）は、口唇部にまで刻目が行われる。この手法は轟木ヶ迫遺跡でも確認され、同段階に位置づけが可能である。その他については、南宮島段階に相当するものと思われる。中でも（93・94）は突帯上を指頭状に押圧している。これは南宮島遺跡の資料中に類例を見出だすことができる。ただ、この両段階については典型例を除いて分類が困難であるため、断定は避けたい。（98・99）は、外反気味の器形になる点は南宮島的であるが、口縁部でやや内湾しており、轟木ヶ迫段階である可能性も否定できない。これらの胴部は鋭利な工具によって、渦巻き状の文様が描かれている。同様の手法はこれまで報告された春日式土器には見ることはできない。しかし、南島に目を向けると、奄美大島の下山田Ⅱ遺跡や面縄第4貝塚の出土資料中に、類似した文様を見ることができる。春日式土器の分布は広汎な地域にわたり、事実面縄第4貝塚でも春日式土器は出土している。筆者は実物を観察していないため漠然とした推測でしかないのだが、春日式の広汎な分布圏の中で、土器製作の情報交流が行われた結果、このような土器が成立したのではないだろうか。更に、春日式に後続する大平式土器の文様には連続的な押引文や沈線文、櫛状の鋭利な工具により亀甲状の文様が描出される。このモチーフは春日式土器の流れの中でも説明可能であるが、文様モチーフに限ればこうした南島の土器を祖形とした方がスムースに流れるように思われる。これまで、春日式土器の研究は瀬戸内編年との対比が主であり、近年に至って阿高式土器様式との相関に論点が移行しているが、今後は南島の土器との関係も考慮する必要があるのではないだろうか。

（110）のU字状の突帯は、上田代遺跡の出土資料中にも類例があるが、この資料は口縁部に肥厚帯を形成せず、また胴部に波状の沈線が巡る。この波状の沈線は天神河内第1遺跡にて類例があるが、この土器の時期や、製作された背景については、今のところ不明である。

d類は器面に押引文が施文されたものである。（111）は口縁部が僅かではあるが鋤先状を呈し屈曲する。南宮島遺跡の資料中に類例があり、同段階に位置づけられる。この押引文施文の一群には、口縁部に肥厚帯を設けるものが多く、こうした資料は東氏の言う中尾田Ⅲａ類に該当する。

e類は口縁部肥厚帯に突帯が貼付けられるものである。（116）は口縁部にM字状の突帯が貼付けられたものである。これもd類と同じく中尾田Ⅲ類に相当し、東氏の細分によればb類となる。中尾田Ⅲ類は、中尾田遺跡第Ⅲ層の出土遺物を基に設定された一群であり、時期的には春日式の南宮島段階に後続する。口縁部に肥厚帯を設ける点が大前提であるが、当遺跡の土器は明確な形で肥厚帯を形成せず特徴的である。

f類は幅広の口縁部肥厚帯上に押引文または沈線文の施文されたもので大平式にあたる。この中で（118）は大平式にはない波状口縁を呈す点や、口縁肥厚帯が不明瞭である点から、大平式の前段階のものと考えられる。大平式土器については、時期的位置付けについてこれまでさまざまな議論が交わされてきたが、東氏や徳永貞紹氏の研究の結果により、現在では中尾田Ⅲ類に後続する中期の土器と考えるのが一般的である。

第6節　その他の有文土器について

（124）は口縁部が内湾する。こうした器形は春日式土器に多く、同型式のなかに含まれると考えられる。（125～127）の沈線内刺突は春日式土器に見られる技法であるが、この技法のみではどの段階に相当するか比定はできない。（130）は器形が胴部で括れているだけでなく、調整や焼成も特徴的であり、春日式土器のなかの北手牧段階に相当する。（132）の口唇部の施文は南宮島段階で行われる。外面にまでこうして施文されたものは報告例がないが、やはり春日式に含まれるものと思われる。（133）は、連弧文状のモチーフが描出されている。大きく外反する器形や、こうした文様モチーフは春日式のなかに例を見ることができる。口縁部が残存しないため時期的には不明瞭であるが、春日式のなかでも前半である可能性が高い。（134）は、口縁部が内湾せずそのまま外反する。東氏はこの土器を、春日式の終末期と位置づけている。（135）のように突帯を口縁に貼付け、その上部に刺突を行う手法は南宮島段階に見られる。（138）は、肥厚帯が不明瞭であるために断定しがたいが、大平式土器の、施文具が櫛描き状になるものに類似する。（144）は、口縁部に鋭利な沈線が格子目状に描かれるものである。こうした類例の土器は、鞍谷遺跡ほか、前谷遺跡でも報告されている。また、仁田尾遺跡では、押引文と融合した資料が確認されている。おそらくこれも中期に位置づけられるものと考えられる。

第7節　縄文時代後期の土器について

（162～164）は指宿式土器にあたる。町内では、丸野第2遺跡で大量に報告例がほか、青木遺跡でも多くの資料が出土している。

（165・166）は市来式土器にあたる。このうち（166）は口縁部断面形態が「く」の字状を呈している点で、市来式に後続する丸尾式土器の影響を思わせる。しかし、沈線が市来式と同様に太めであることから、両型式の過渡的なものであると判断したい。

（167・168）は口縁部が大きく外反し、波状口縁を呈する。丸尾式に相当すると思われるが、口縁の屈曲自体が消失しており、丸尾式のなかでも最終末期に属するものであろう。

（169）は、外面に巻貝による疑似縄文が施文される。胴部がやや膨らみ、頸部には無文帯が形成されるようである。このように巻貝による疑似縄文のみを施文するものは県内に数例ほど確認される。尚、後期においてこのような施文手法を行う土器型式としては、後期中葉に北部～中九州で成立した北久根山式土器が挙げられる。この土器型式は、県内では数えるほどしか出土していない。沈線が施されないため断定はできないが、北久根山式に含まれるものか、あるいはその影響を受けて成立したものと考えられる。ちなみにこの型式は、町内では丸野第2遺跡に報告例がある。

（170）は、口縁部と胴部に直線状の沈線を粗雑に施文する点において納屋向タイプに該当する。これは、市来式、丸尾式に後続する時期とされる。しかし、口縁部の施文帯が納屋向タイプのそれよりも明確であるほか、粗雑な沈線などは、北方町速日峰遺跡で出土した北久根山式土器にも類似している。納屋向タイプと北久根山式土器は、従来の編年案では時期的に重複しない。なぜこうした属性の類似が生じるのか、今後検討が必要である。

第8節　結　語

以上のように、本野遺跡の縄文時代の出土遺物は、前期から中期中葉に至るまで、殆ど全ての時期の遺物が安定して出土している。しかし、一つ一つの時期を取り上げて見ると、出土量は少量のみに留まっており、一つの集団の使用する土器の量としてはかなり貧弱である。これらを考え合わせると、この遺跡は、あくまで短期間居住する事を前提としたキャンプサイトであった事が推測される。ただし、長期にわたって、殆ど途切れる事なく遺物が出土していることを考えると、周期的な移動生活を行う際のサイクルに組み込まれていた可能性が高い。また、後期に至って出土量が激減するのは、それが一つの集団における定期的な移動形態によるものではなく、ごく少人数による、ごく一過性の野営地であったためと考えられる。また、以上のような状況のためか、出土する石器が全体的に小振りであることも特徴的である。

（金丸）

第8節　おわりに

近年は各地で縄文時代集落跡の調査が実施されており、町内でも隣接する高野原遺跡において後期末の竪穴式住居群を伴う資料が出土したほか、丸野遺跡で後期、二ツ山第3遺跡で中期の竪穴式住居が検出された。現時点の宮崎県下における縄文時代の研究は、どちらかと言えば遺物論に偏りがちな傾向にあり、集落論の検討に取り組む必要性を感じる。次年度は『高野原遺跡・本野遺跡』調査報告書刊行を予定しており、このことを念頭において慎重に取り組みたい。

末尾になりましたが、現地調査及び報告書の執筆にあたり多くの方々より貴重なご指導ご助言を賜りましたこと、ここに記名して感謝申し上げます。　（森田・金丸）

池田　朋生　　今田　秀樹　　岩永　哲夫　　桒畑　光博　　新東　晃一　　長野　真一
長浜　正明　　東　　和幸　　岩元　秋見　　（敬称略）
宮崎県立埋蔵文化財センター　宮崎県文化課　鹿児島県立埋蔵文化財センターほか

（註1）東　和幸氏のご指摘による。
（註2）このb類の土器については、桒畑氏や東氏より遺跡内で船元式と共伴する例が多いという傾向が出されている。
（註3）鹿児島県末吉町桐木遺跡（現在調査中）では、a類の土器が良好な状態で出土しており、器形や文様構成を考察するうえで好材料といえる。
（註4）東　和幸「春日式土器」『縄文時代』第10号　縄文時代研究会　1999
（註5）東氏や新東晃一氏からも、同様なご意見を頂いた。

参考文献（敬称略・順不同）

東　和幸「春日式土器の型式組列」『鹿児島考古』第23号鹿児島県考古学会　1989
東　和幸「鹿児島県における縄文中期の様相」『南九州縄文通信』№5　南九州縄文研究会　1991
東　和幸「春日式土器と並木式土器・阿高式土器」『南九州縄文通信』№8　南九州縄文研究会　1994
東　和幸「春日式土器」『縄文時代』第10号　縄文時代研究会　1999
徳永貞紹「並木式土器の成立とその前夜」『牟田裕二君追悼論集』牟田裕二君追悼論集刊行会　1994
矢野健一「縄文時代中期後葉の瀬戸内地方」『江口貝塚Ⅰ』愛媛大学法文学部考古学研究室　1993
矢野健一「北白川C式併行期の瀬戸内地方の土器」『古代吉備』　第16集　1994
桒畑光博「南部九州における縄文時代前期末から中期前葉の土器について」『鹿児島考古』第27号鹿児島県考古学会　1993
伊藤慎二「種子島出土の琉球系縄文土器」『南九州縄文通信』№10　南九州縄文研究会　1996
茂山　護「串間市大平出土の縄文式土器」『九州考古学』1　九州考古学会　1957
桒畑光博「春日式土器二例」『宮崎考古』№15　宮崎県考古学会　1997
前迫亮一「異系統土器文化の接点」『南九州縄文通信』№6　南九州縄文研究会　1992
田野町教育委員会「丸野第2遺跡」『田野町文化財調査報告書第11集』1990
田野町教育委員会「二ツ山第3遺跡」『田野町文化財調査報告書第15集』1992
田野町教育委員会「七野第4遺跡」『田野町文化財調査報告書第25集』1997
宮崎県教育委員会「天神河内第1遺跡」『大淀川右岸農業水利事業国営天神ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1991
えびの市教育委員会「田代地区遺跡群」『えびの市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集』　1997
清武町教育委員会・清武町土地開発公社「辻遺跡」『清武工業団地造成工事埋蔵文化財発掘調査報告書』1980
北方町教育委員会「笠下遺跡」『北方町文化財調査報告書第1集』1990
北方町教育委員会「笠下下原遺跡」『北方町文化財調査報告書第4集』1992
金峰町教育委員会「上水流遺跡」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』（9）1998
松山町教育委員会「前谷遺跡」『松山町埋蔵文化財発掘調査報告書』（1）1986
大根占町教育委員会「轟木ヶ迫遺跡」『大根占町埋蔵文化財発掘調査報告書』（1）1988
姶良町教育委員会「南宮島遺跡」『姶良町都市計画事業に伴う埋蔵文化財報告書』1977
志布志町教育委員会「野久尾遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告書』1979
伊仙町教育委員会「面縄貝塚群」『伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書』（3）1985
鹿児島県教育委員会「下山田Ⅱ遺跡　和野トフル墓」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(45) 1988
福岡市教育委員会「四箇遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第199集』1989

調査着手前全景（南西上空から）

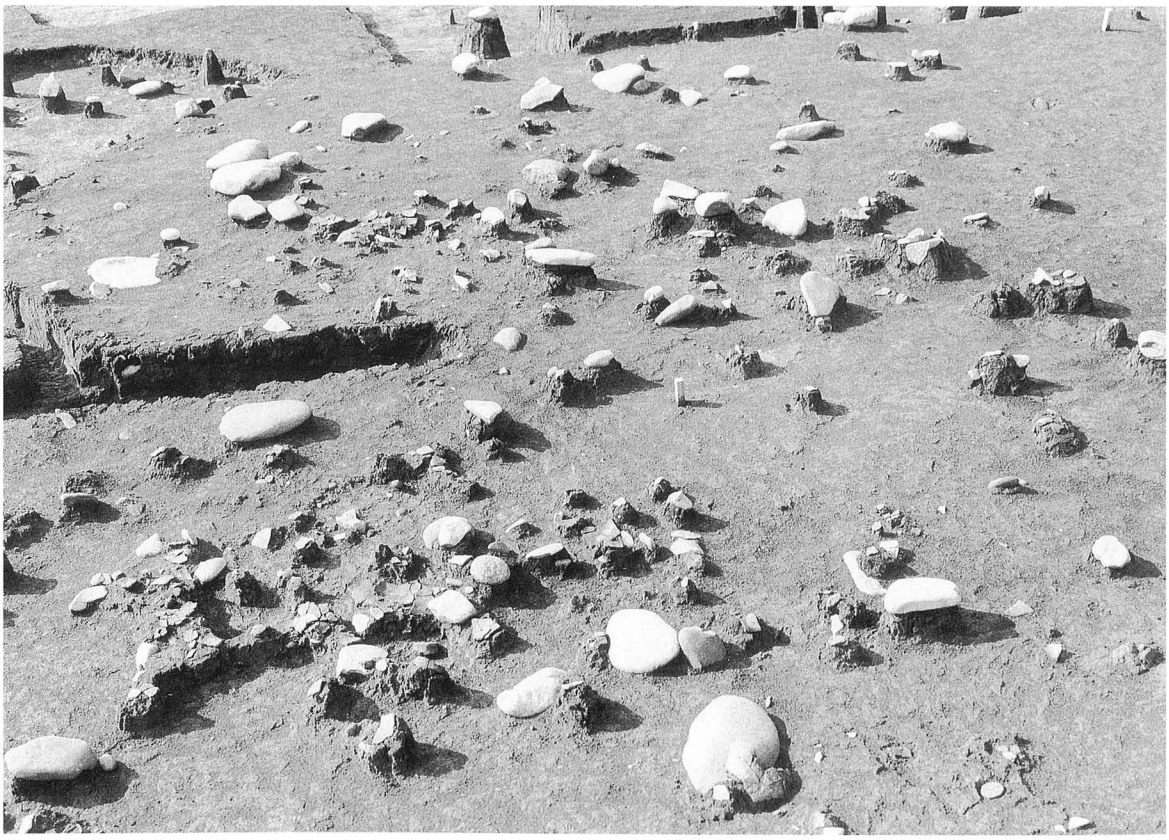
調査状況遠景（西上空から）

図版2

E、F区調査状況（上空から）

A区調査状況（北東から）

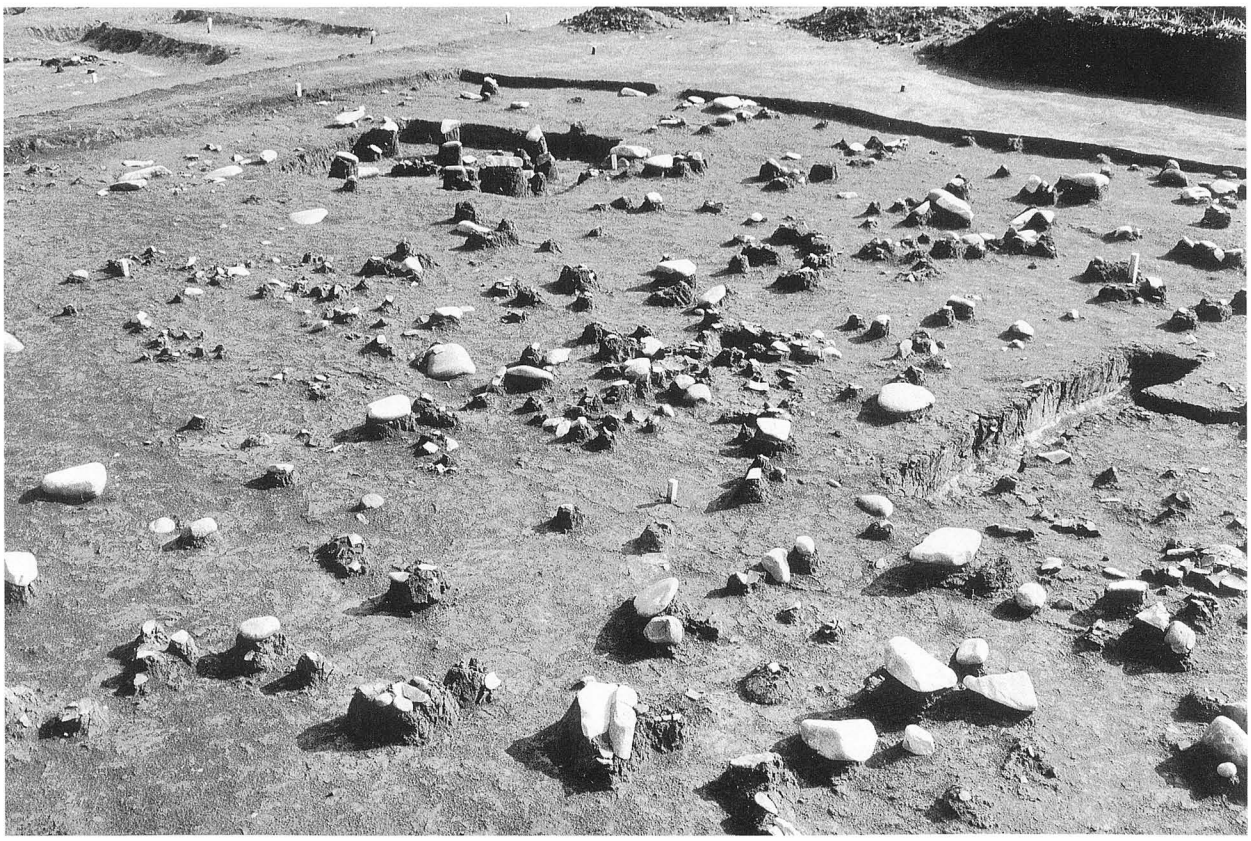
B区調査状況（東から）



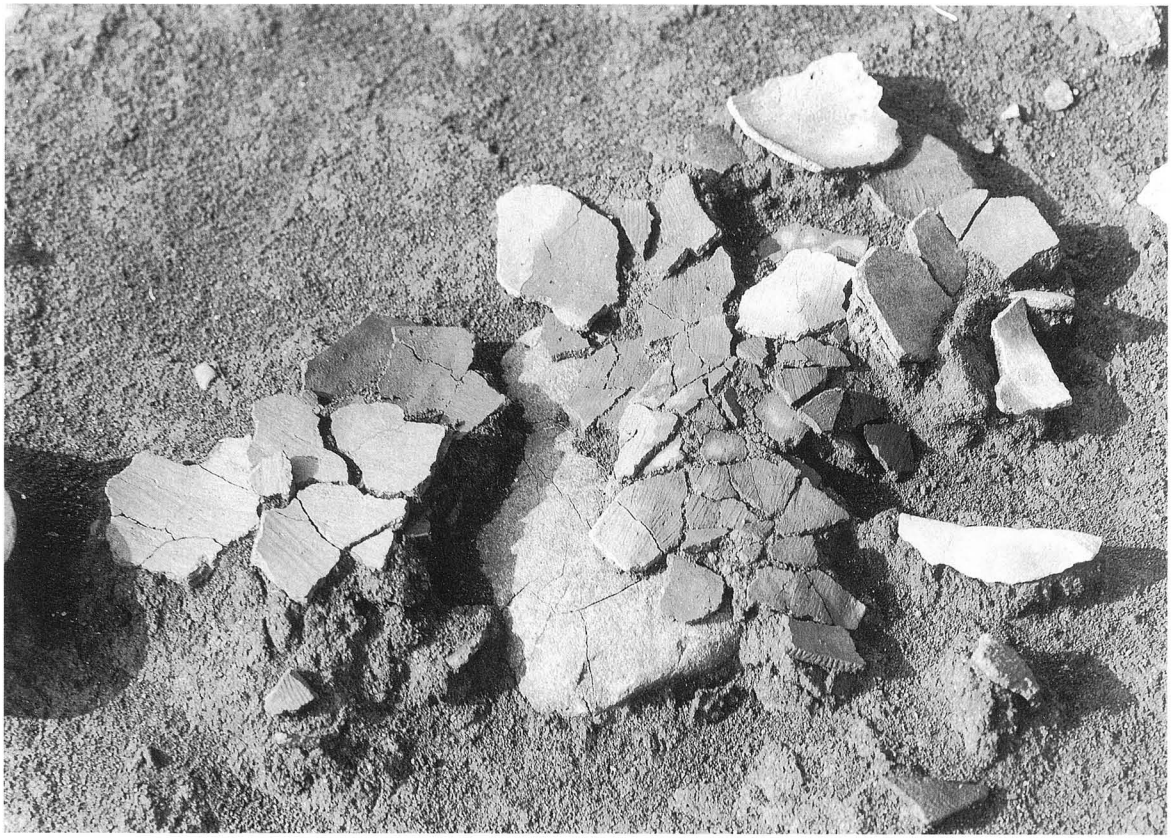
F区遺物出土状況（西から）

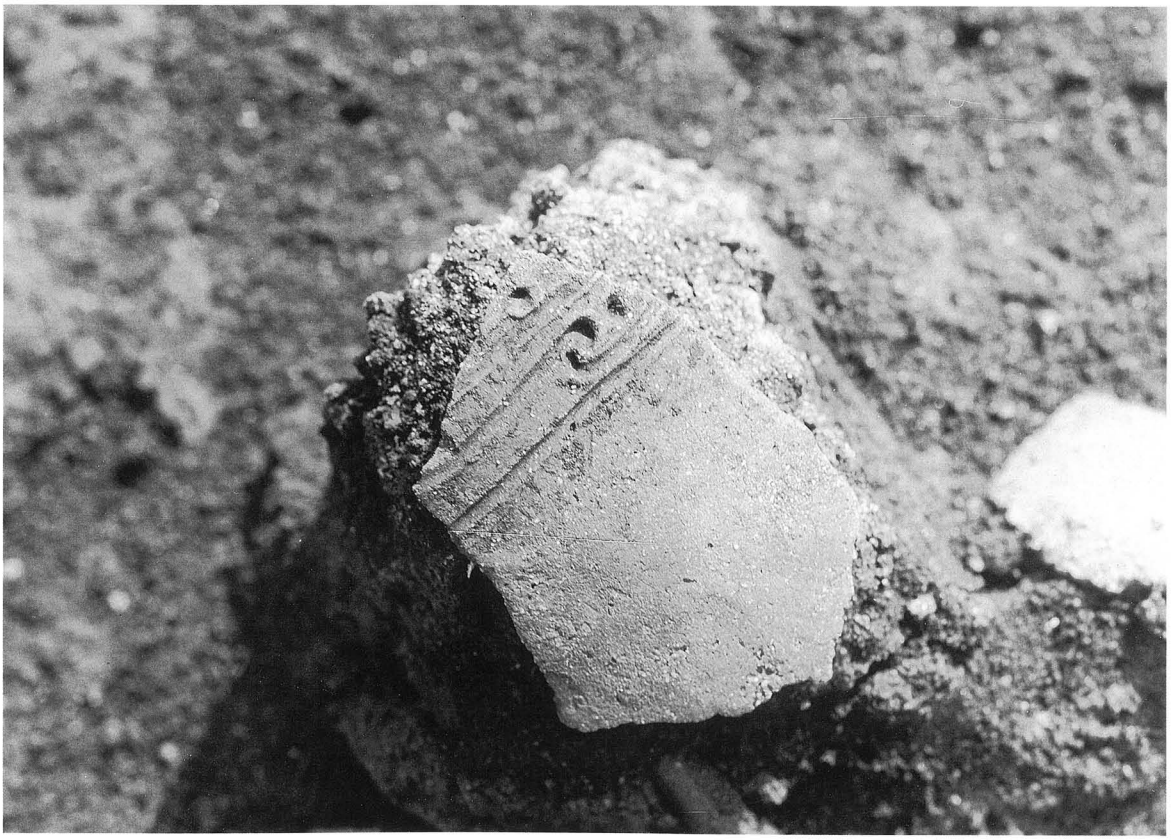
図版4

F区遺物出土状況（北西から）



F区遺物出土状況（東から）

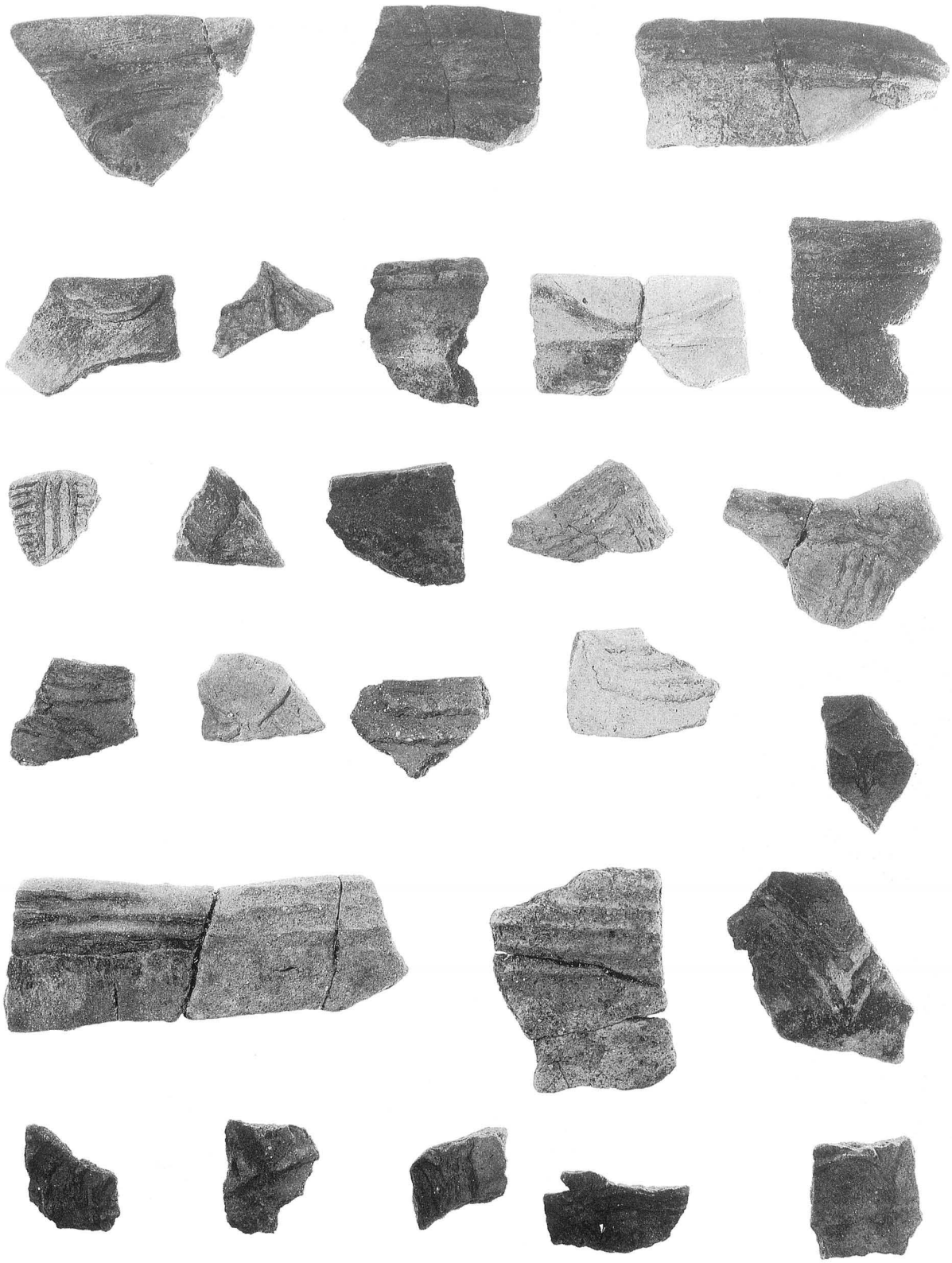




F区縄文土器出土状況

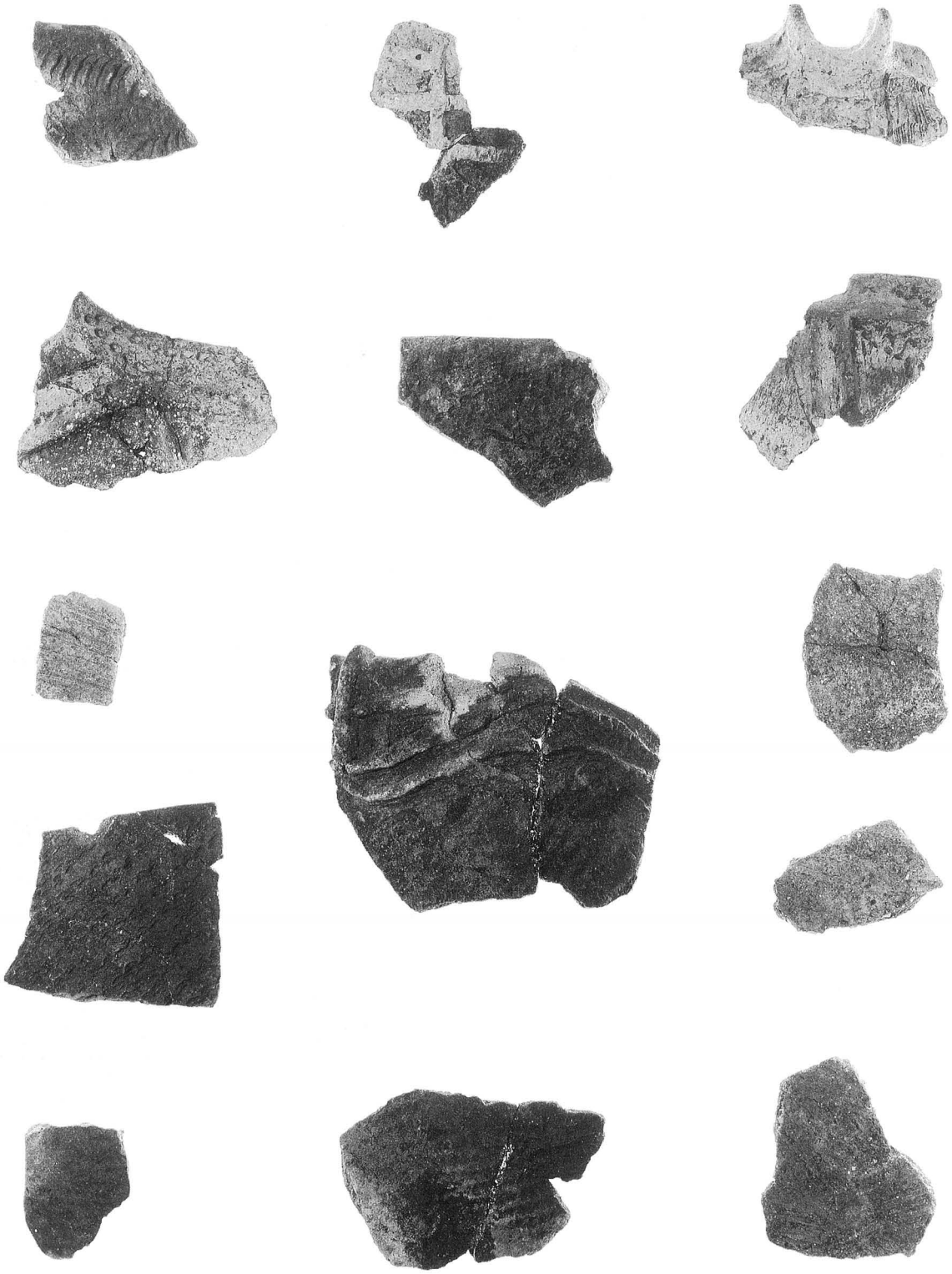
図版6

縄文時代前期の土器

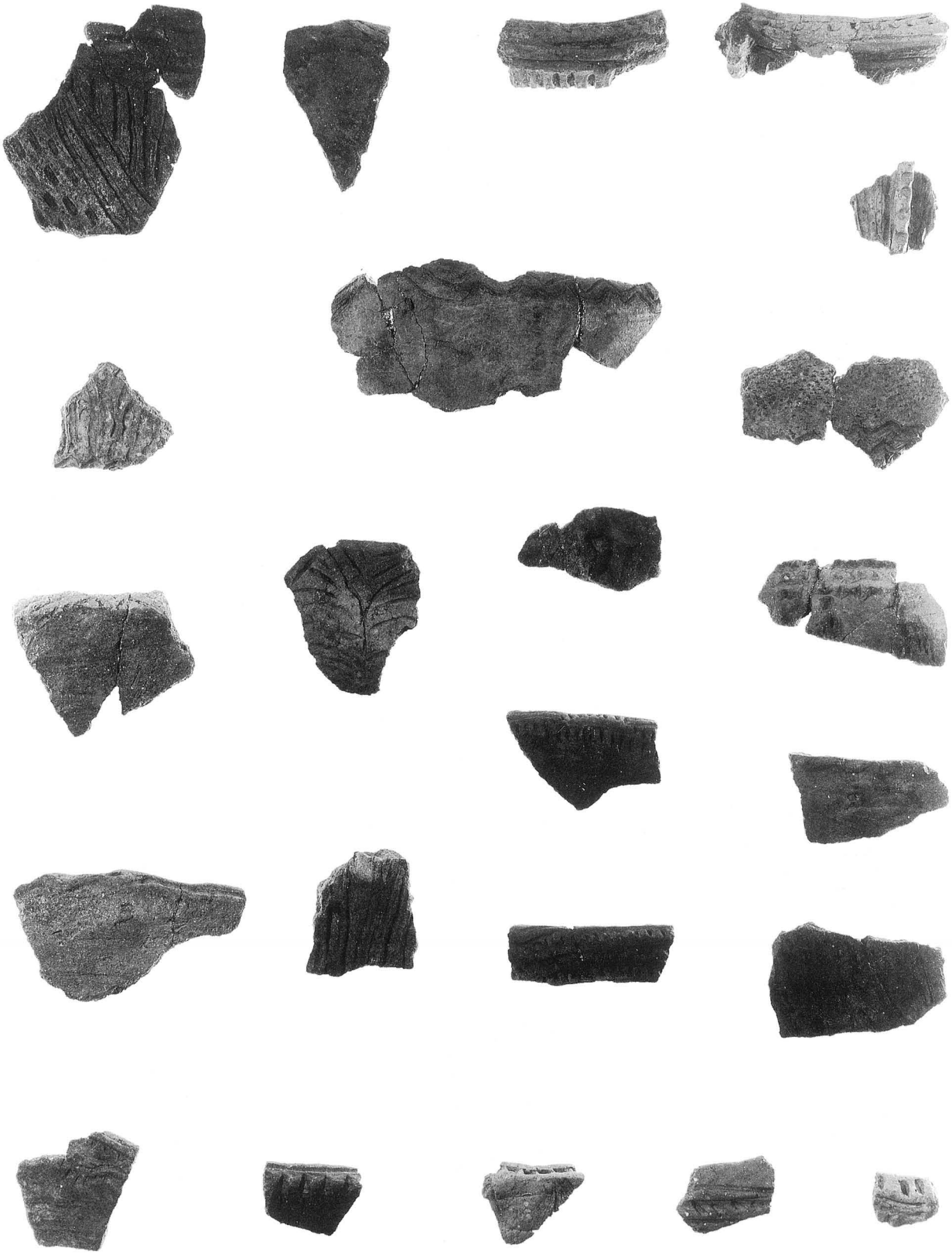


縄文時代中期の土器

図版8

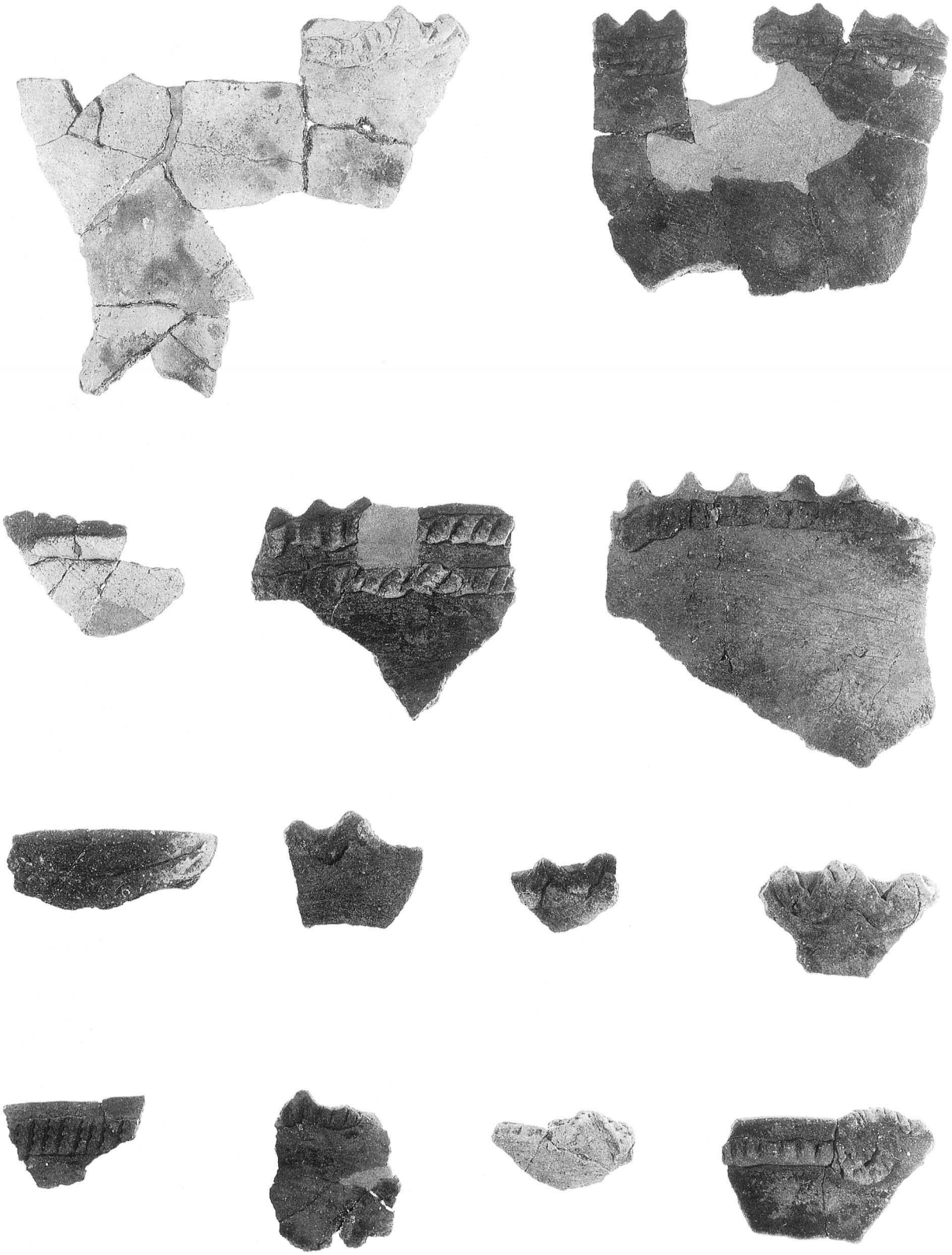


縄文時代中期の土器

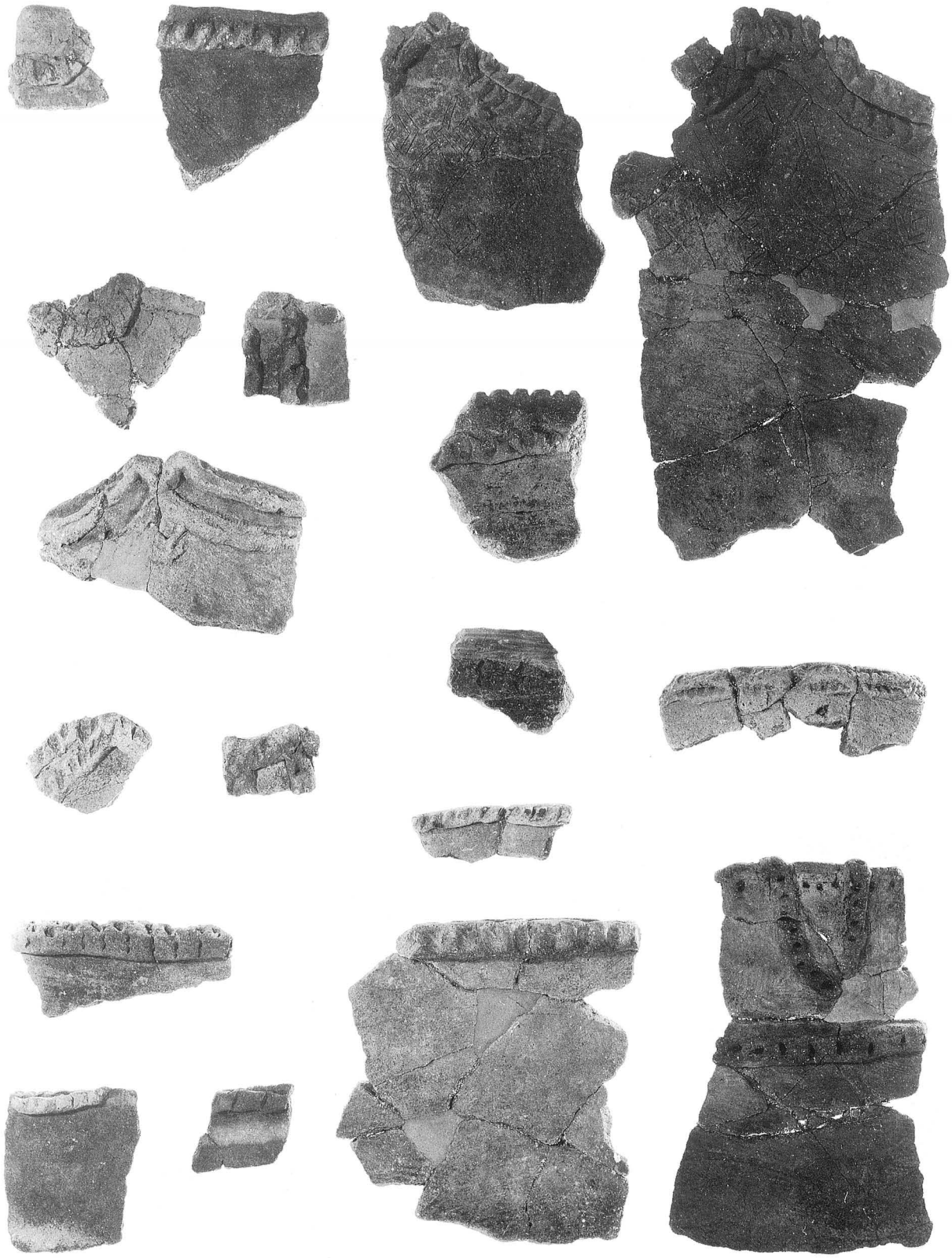


縄文時代中期の土器

図版10

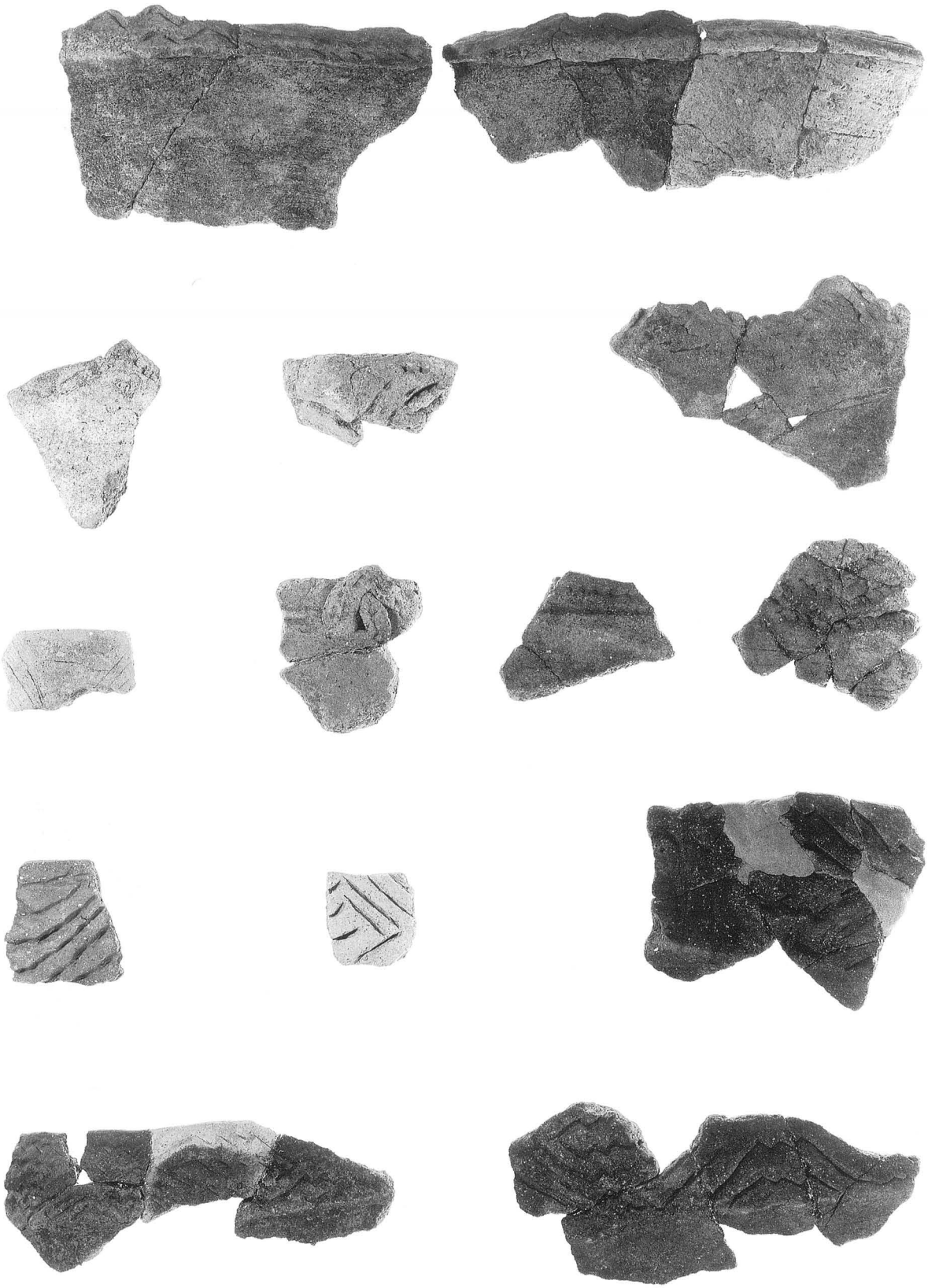


縄文時代中期の土器

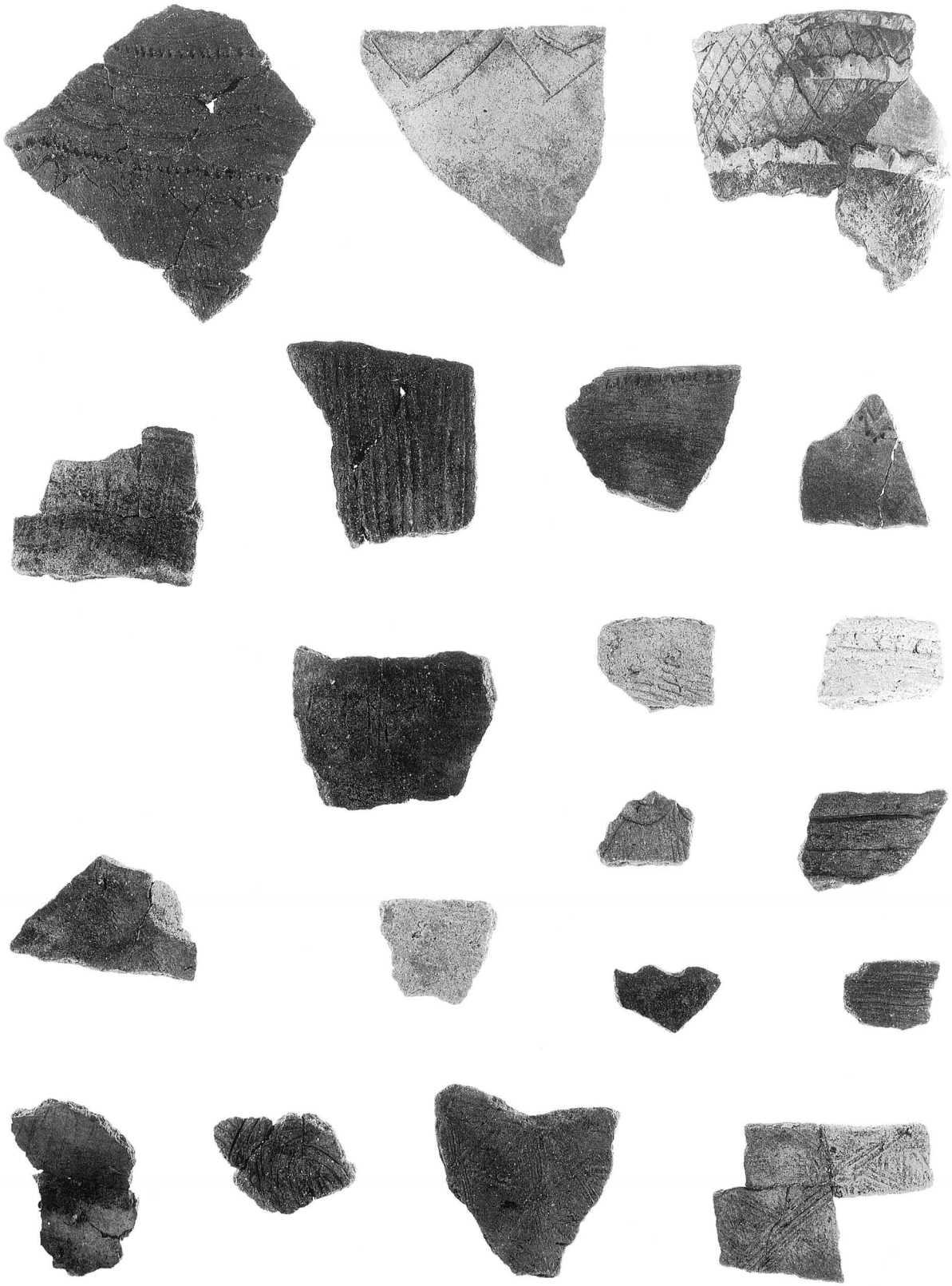


縄文時代中期の土器

図版12

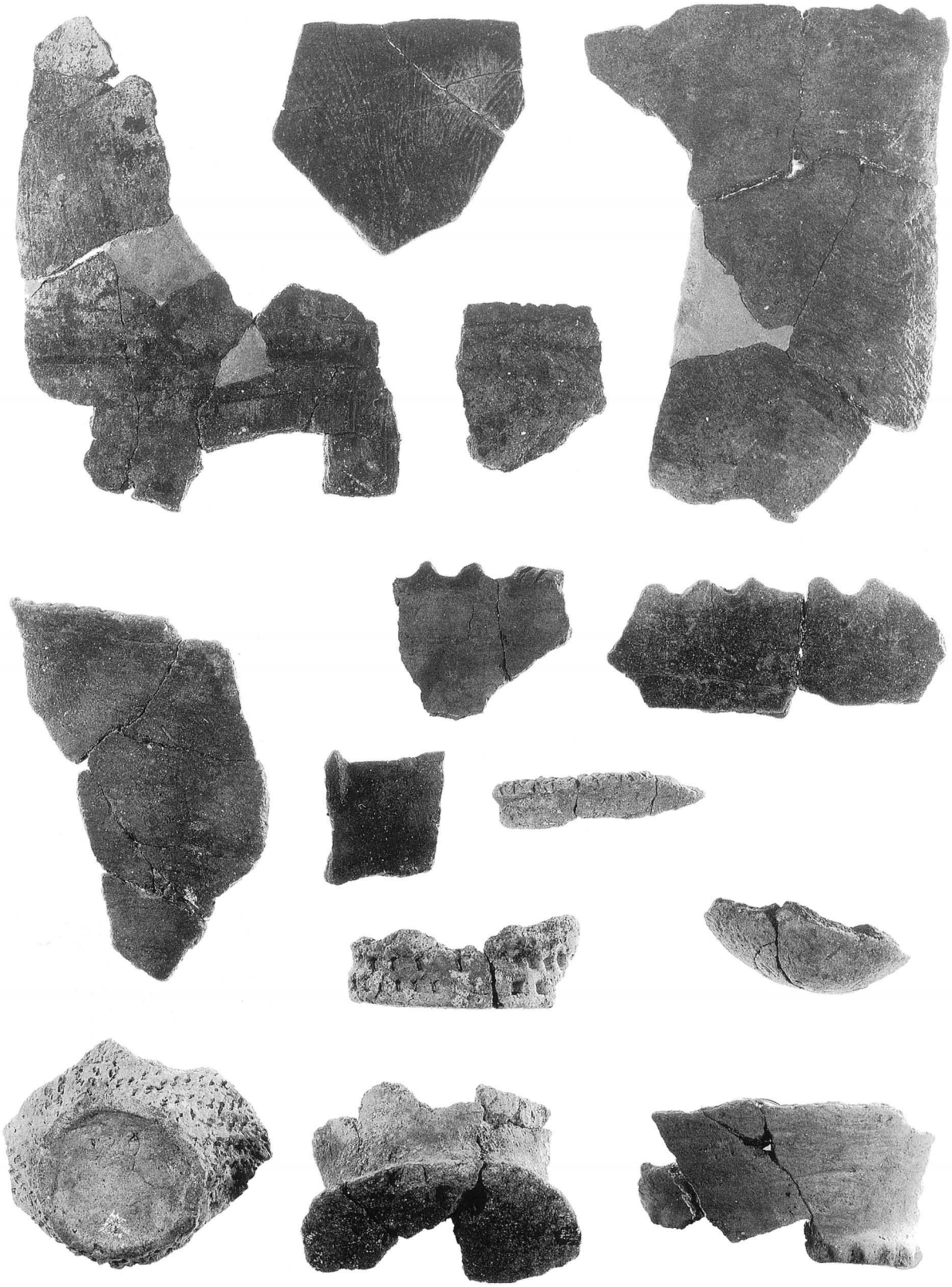


縄文時代中期の土器



縄文時代中期の土器

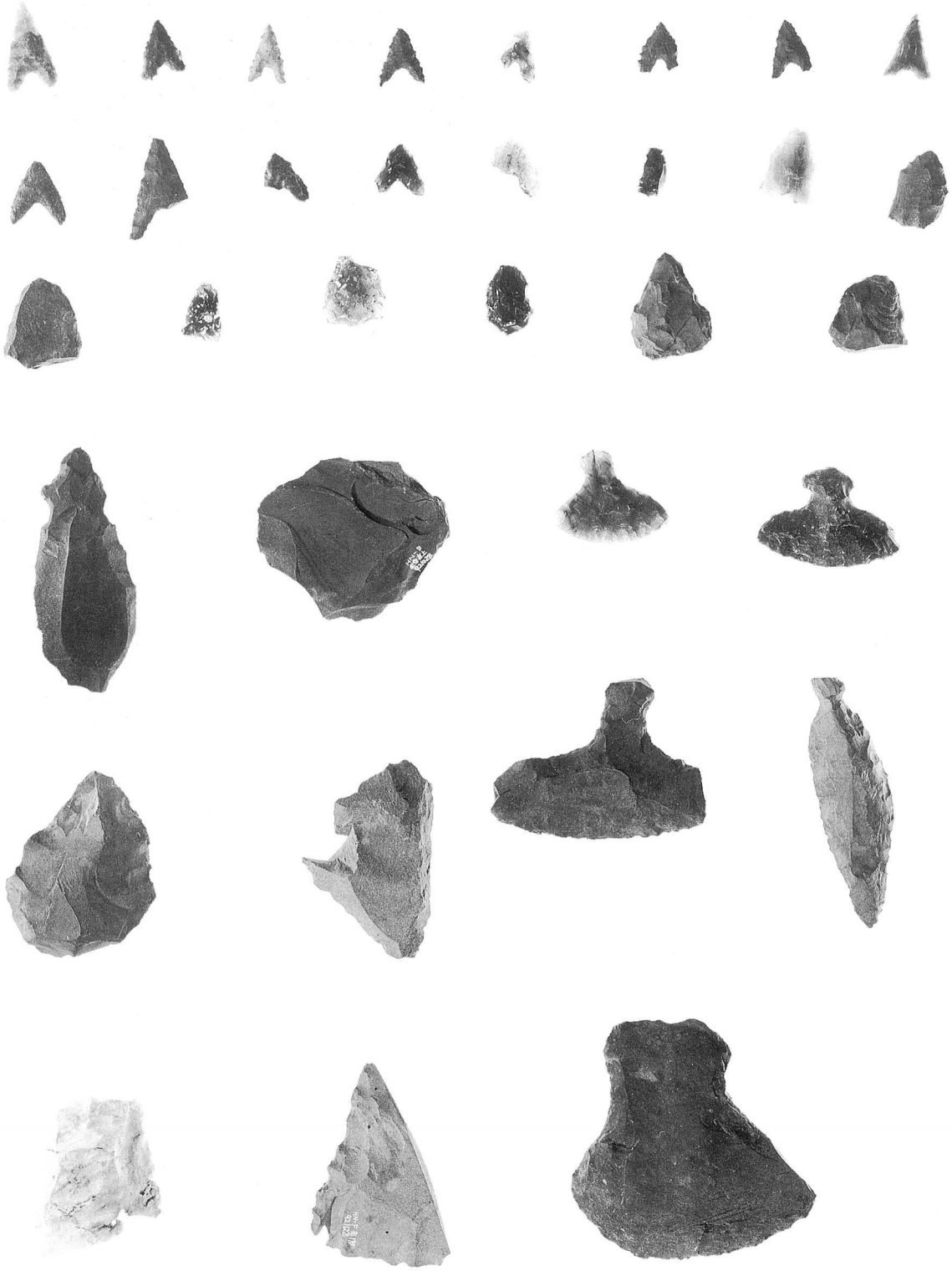
図版14



縄文時代中期の土器

縄文時代後期の土器

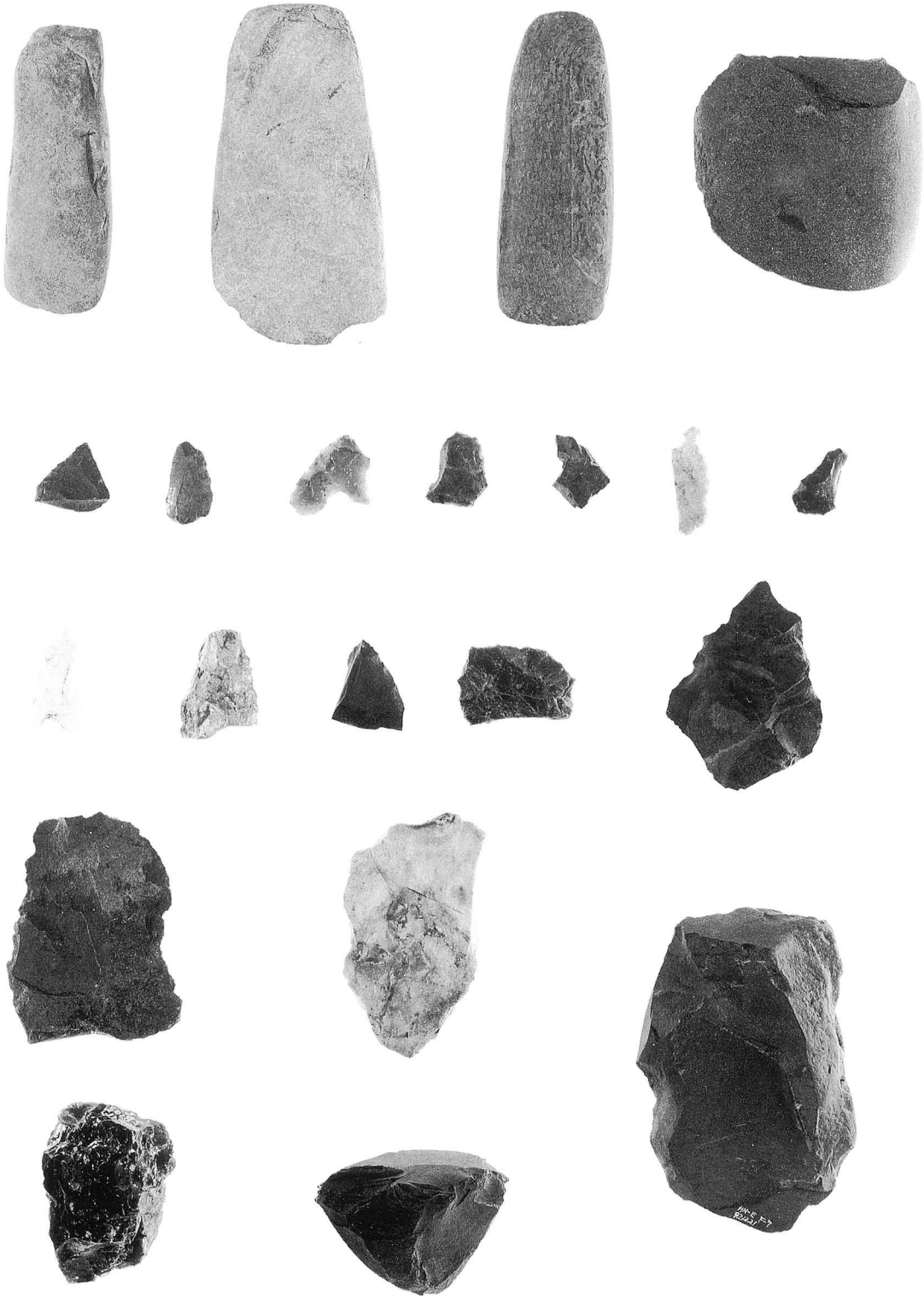
図版16



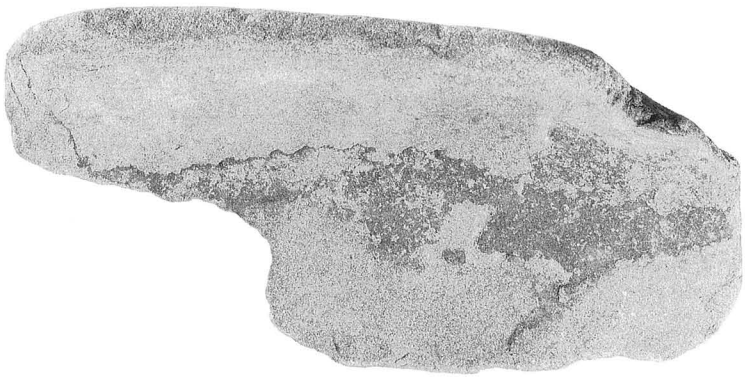
縄文時代の石器

縄文時代の石器

図版18



縄文時代の石器



縄文時代の石器

報告書抄録

ふりがな	ほんのいせき						
書名	本野遺跡						
副書名	平成4年度県営農地保全整備事業元野地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次	1（縄文時代遺物編）						
シリーズ名	田野町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第32集						
編集者名	田野町教育委員会　文化財調査事務所　金丸武司・森田浩史						
編集機関	田野町教育委員会						
所在地	宮崎県宮崎郡田野町甲2818番地						
発行年月日	1999年（平成11年）3月						
ふりがな	ほんのいせき						
所収遺跡名	本野遺跡						
ふりがな	みやざきけんみやざきぐんたのちょう　もとの						
遺跡所在地	宮崎県宮崎郡田野町　元野　甲　13,118番地外（本野）						
市町村コード		遺跡番号	2005	北緯		東経	
調査期間	平成4年10月16日～平成5年1月28日						
調査面積	約12,000㎡						
調査原因	平成4年度県営農地保全整備事業元野重地区						
主な時代	縄文後前期～後期・弥生			主な遺構	土坑・竪穴住居跡		
主な遺物	縄文時代前期～後期土器・石器、弥生土器・磨製石鏃ほか						

田野町文化財調査報告書　第32集
本野遺跡（縄文時代遺物編）

発行年月　１９９９年3月
編集・発行　田野町教育委員会
印　　刷　㈱ 昭 和 印 刷